

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十一年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九八一号



日川協加盟

No. 981

同人特集・風百句

二月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

日の丸の旗

河内 天笑

しるちにあかくひのまるそめて
あうつくしいにほんのはたは

昭和十六年春に国民学校一年生となり最初に習った懐かしい唱歌。毎年元日は二宮尊徳像が入口にある講堂に集まり、正面に掲げられた日の丸の旗を見ながら君が代を合唱し、校長先生のお話を聞いたあと紅白のおまんじゅうをいただいて帰った。どの家の軒にも当たり前の様に国旗が立てられていた。

世界一日本の旗が美しい
万国旗一際映える日章旗

生嶋ますみ
木村 晃

太平洋戦争が勃発して日の丸の旗にも有為転変の旅がはじまった。大先輩の須崎豆秋は

モヤモヤがいちどに晴れたみことのり

塵箱へ突っ立ち上り訣別す

B通過あとはしばらくほととぎす

お月さんごんねんながら負けました

街を見よ汚れた白衣鉄の足

(開戦)
(出征)
(空襲)
(敗戦)
(戦後)

日の丸へ大豆と芋の蔓で耐え
貧しさの中で国旗を掲げていた
日の丸は自慢の出来る国旗です

春城 年代
吉田 陽子
鴨谷瑠美子

祝日に国旗はためくいい眺め
久しぶり日の丸の旗立てました

山本加お里
阿野寿美子

日の丸のない正月の淋しさよ

祝祭日驚くほどに腹が減り

日の丸で見送ることがないように

指宿千枝子
安達 忠央
山田 耕治

天皇の御無事を祈る旗の波
日章旗頑張っているお正月

金メダルああ日の丸が麗しい

岡野すみれ
山松みち子
松村 里江

直近に拝見した「日の丸」に関する作品から十数句を載せましたが、嬉しいことに日の丸に否定的な作品は一句も見当たらなかった。「祝日に旗を見ない」と憂えている作品が大部分で、実は私自身、日の丸をこよなく愛しているものの、長いこと祝日に旗を立てていないので情けない限りだ。「日の丸をあげて怪訝な顔をされ」(菊地政勝)は祝日の国旗を見慣れない若者達の代弁か。「日の丸を見て感激をするそれでよい」(寺川弘二)は私の代弁でもある。

ニッポンチャチャチャ頬つべに日の丸を描いて 天笑

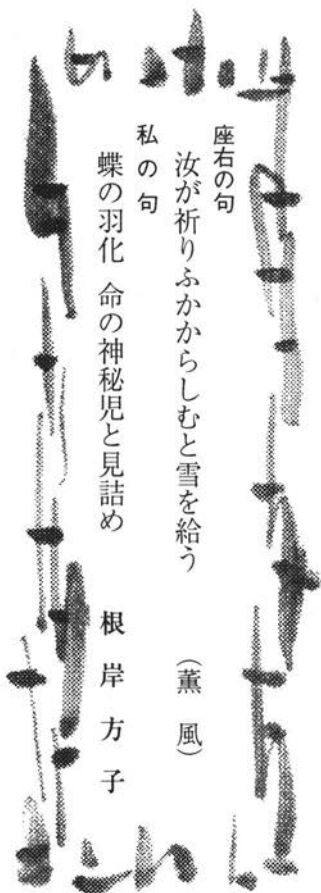
B面のゴリラはハミングをしてる

たのしみを共有出来る仲になり

B面を晒し仲間にして貰う

私語を鎮めるとときの裏話

〃 〃 〃 〃



座右の句

汝が祈りふからしむと雪を給う

(薫風)

私の句

蝶の羽化 命の神秘児と見詰め

根岸方子

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「有馬温泉」

■巻頭言 日の丸の旗

旅の句

河内天笑 (1)

(做) 早川清生 (2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑 (4)

川柳塔の川柳讃歌 (50)

木津川 計 (47)

自選集

(48)

温故知新

(51)

水煙抄

小島蘭幸選 (52)

麻生路郎句抄

(71)

愛染帖

新家完司選 (72)

■同人特集 風 百句

(76)

誹風柳多留 一篇研究 42

旅の句

(做) 早川清生

私の仲間には海外踏破百数十ヶ国という剛の者がいる。学校の先生だから夏休みという利点はあるが、銃弾とび交う近くまで行つたことがあるという。私は三十ヶ国程度だが、川柳塔欄に天笑選で数十句を残させて頂いた。旅の句はむづかしい。海外では国の成り立ちが違うし、現在置かれてゐる状況がいろいろである。十七音字の短さでどこまで迫れるか。それに旅行中は目の前の事象に追われて句作どころでない。しかし帰国してからでは驚きとか感動の鮮度が落ちてしまふ。それに、同じ所を見ている、土地の人と旅人では絶対に視点が同一ではない。拙吟だがウイーンホイリゲ聚ることなきひとと酌む

テロの銃どこかの国が売っている
パリに住みいきなり隣家から訴状

日本字でメニューにチップ置けとある

路郎、薫風両師も旅がお好きだったので、拝聴すべき佳句が多い。薫風さんには活動的だった青年期より大成の時代に抒情味したたる名句が多い。たゆたう思いを静かに吐き出したような句が目につく。淡これ真の心境で

檸檬抄「鍵」……………高瀬霜石・木本朱夏共選…(82)

一路集「騷ぐ」……………牛尾緑良選…(84)

「未練」……………岡本花匠選…(84)

「猫」……………中井アキ選…(85)

初歩教室「豆」……………鈴木公弘…(86)

秀句鑑賞「同人吟」……………森山盛桜…(88)

水煙抄……………都倉求芽…(90)

■各地句会だより 尼崎尾浜川柳会……………田原宏一…(91)

■エッセー 国語力……………井上桂作…(92)

追悼 宮本三喜夫さんありがとう……………川上大輪…(93)

一月本社句会……………(94)

各地柳壇(佳句地十選/国米きくゑ)……………(98)

柳界展望……………(104)

二月各地句会案内……………(116)

■編集後記(ひとこと/喜田准一)……………希久子・恵子・富美子…(118)

座右の句……………(118)

私の句……………(118)

財産を残さないのも意志である……………坂上淳司

ある。薫風文集などを見ると、彼は路郎師の旅について述べることはあっても、ご自分の旅行については多くを触れない。同行した人たちの言では彼なりに存分に楽しんでおられたようであるが、これは彼の旅がほとんど地方の記念大会出席などに伴うものであったからではなからうか。

城のある町への旅は恋に似る 薫風

足摺の雨は遍路へ地から降る

水郷の胸の高さに続く水

混合のさながら古き風俗画

川柳雑誌の古い号を見ていたら、若い日の路郎師が函館へ旅して、石川啄木の墓に詣で、私が死んだらその横に小さな墓を建ててほしいと願っておられる。凄絶なロマンチズムである。師も同様に用務をかたわらにしてお旅行が多かっただろうと思われるが、旅行吟は「旅人」の最後の章「旅つれづれ」に集約されている。はしがきの中で師は「旅を詠んだ句は私に思い出の数々を再演してくれて忘し難い」とことさらに記述しておられ、改めて旅行記をまとめたいと述べておられる。

信心で来たのへ桜真つ盛り 路郎

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

遠く来て信濃に山のない日なり

この村の詩人が炭を焼くけむり

最後の句はその名も句集「旅人」の棹尾だ。



河内天笑選

大阪市 板東倫子

酔客もまばら師走の北新地
心にも光が点るルミナリエ
角界の丁髷王子日馬富士
喧騒の巷逃れて古書の店
誠実に老いて悲しき認知症
国乱れ紳士淑女が見当らぬ

豊中市 藤井則彦

湯に浸かりながら余興の下稽古
父真似たメシフロネルも板に付き
自動詞がだんだん増えていく余生
友の絵に一苦勞する褒め言葉
今以て分からぬ妻のお小遣い
モノリザの笑みは私にかも知れぬ

米子市 政岡日枝子

人につられて私も何となく走る
一病を護るカルテに支配され
塩少々レシピ通りにいかぬ指

いい人だ毒を隠そうとしない
油断めさるな窓の下にも人がいる
私の猫背が窓にうつつてる

鳥取県 佐伯やえ

人情ののこりはなしを雪にきく
垣根ごし椿が鬼とはなしている
冬の笑い入れるポケットなおしている
不景気が去るまでゆるり本を読む
檣山いきの自転車冬になおしておく
坂道の小石ひとつが敵となる

黒石市 相馬一花

悪人も惜しまれて逝く突然死
慎重な人ほど罫に嵌められる
嘘だけはつかぬとホラで眩惑す
マンネリの夫婦にかける唐辛子
生真面目を小指が軽くもて遊ぶ
疲れたと言えば晩酌減らされる

檀原市 安土理恵

ケータイは圏外なにかおかしいぞ

妻のぐち一喝できぬ理由がある

枯野まで木立の息をたしかめに

干支めぐる いよ華やぐおんな舞い

吠えてます仕舞い切れないもの抱いて

酒うまし いま品格を問うでない

尼崎市 山田耕治

水しぶきかかりよるこぶ川下り

七十で忙しいとはなんです

ちらちらと座席の幅を目で計る

終電車みんな演技を終えた顔

敬老の日のまんじゅうを孫と分け

まだ生きてはるのときつと言われてる

鳥取市 倉益一瑠

人間にあいさつがありまるい風

おはようの声で芝居の幕があく

好奇心メラメラ両目しかと開け

北風にビエロの服を着てみるか

ケータイに覗き見されているところ

コンパクトの裏から冬がやって来る

枚方市 海老池洋

小鳥らと囁き交わす木守り柿

蟹工船偶然売れた訳でなし

地球の立場人間なんて消えてくれ

中国語は苦手麻雀は得意

七人の敵に学んでいる余裕

校風が乗車マナーに出る生徒

三田市 白井二英

瞑想は五分続かず寝てしまい

褒めすぎは優越感のうらがえし

偏食をテストしているまわる寿司

カーナビは抜け道なんか教えない

アウトセーフ神も分からん事決める

子や孫の未来いいとは思えない

河内長野市 山岡富美子

アナログに郷愁がある握り飯

パソコンを如意棒にして渴いてる

ケータイが掴むわたしの首根っこ

家計簿を蘇生させたい給付金

リーマンのショック地球が熱を出す

カシミヤのコートで偽装するメタボ

堺市 和田つづや

還暦の妻に初めて花を買う

一病のおかけ死に下手かも知れぬ

冷飯に出がらし番茶こそ茶漬け

紅一点場が和んだりすさんだり

雨もりの屋根に根性たたかれる

ふる里を思う帰らずただ想う

鳥取市 福西 茶子

わたくしが歌うと逃げる池の鯉
深呼吸ときどき毒も吸っている

どの服を着ようかきょうは日本晴れ
お昼まで寝ますお日さま悪しからず
年金になってやりくり上手くなる
脳トレにけんか売るのもおもしろい

西宮市 西口 いわゑ

銀杏ひらひら音なき音を聞いている
この世のことはみんな夢だと思いたい
ストレスの源だった隠しごと
マナーより愛の心で接したい
吉報はペンの先まで弾んでる
好きなことしながらゆっくりと生きる

松山市 古手川 光

団塊と走った0系も消えた
頼んでません地デジも株の電子化も
非正規雇用調節弁のために有る
産めよ増やせよ言ってもたらい回しされ
激増と減少民族も二極化
CO2出してるハウス物を食う

神戸市 両川 無限

片付けの楽なメニューに慣らされる
思い出すたびに笑いがこみ上げる
忘れたい過去がこのこついてくる

昨日より優しさプラスして明日
言い過ぎてちよつと気まずい鍋つつく
もてなしにびっくり真心に感謝

羽曳野市 安芸田 泰子

かくしごと何一つない冬木立
まだ若いもう年だとの使い分け
里帰り親の財布でシヨッピング
バーゲンの列へブライド捨てている
鍋奉行父は手順を譲らない
回りくどい話に鍋が煮えつまる

三田市 上垣 キヨミ

舞い落ちるもみじと浸る露天風呂
セーターがメタボを遠慮なく見せる
国旗立て家族で拝む初日の出
お雑煮は白味噌仕立丸い餅
持物を全部広げて鍵さがす
年末は掃除逃れのパチンコ屋

宇部市 平田 実男

長男をていよく嫁に拉致される
赤い糸もやはり金には脆かった
あげ足を捕られてからの失語症
大吉の御くじは神のジョークかも
切れ過ぎてエリートコースから外れ
言い訳が上手になった自己嫌悪

和歌山市 田 中 み ね

ものの五分あれば化粧のできあがり

よしなさい心にも無いご謙遜

厄介な一つ激しい首の凝り

あと二キロお肉が欲しい試着室

やれやれと長いお話終りそう

こそこそと今へソクリを加算中

鳥取市 武 田 帆 雀

ビール缶握り潰して異議があり

口髭に貫禄付いて黙らせる

指一本欠けたのも銭蟹を選ぶ

鶴の首には沢山の回線路

国賊にされてさあむい喫煙所

五十日振りの床屋は定休日

高槻市 井 上 照 子

教育の恐さ子どもは純である

青信号全速力で猫渡る

老眼鏡ルーペ重ねる注意書き

風邪ひきを最後にもらい医者通い

アイドルは暑さ寒さを我慢する

わだかまり熱い友情枯れかける

弘前市 福 士 慕 情

白桃へ指紋を付けたのは誰だ

放流の雑魚が気づいた海の道

枯れ芒凜と師走の風に耐え

貸店舗貼り札に雪吹きつける

飛び込んでメガネの曇る縄のれん

白鳥が渡ると冬が加速する

吹田市 太 田 昭

喝采を浴びて花道踏みはずす

据え膳を食わぬ啖阿が悔やまれる

旧姓で呼ぶと笑顔が振り返る

人間を忘れたくなり酔いつぶれ

不都合はいつも忘れることにする

のほほんとプラス思考の妻老けず

和歌山市 上 地 登美代

平成の子に月のうさはわかるまい

目に見えぬ神を信じて手を合わす

老いらくの恋に補聴器買い替える

ありがとう たった五文字に癒される

フラダンス見物客も腰を振り

息をしないで下さいドミノ並ぶまで

堺市 村 上 玄 也

匿名が組織の裏を暴きたて

世界中毒撒くメイドインチャイナ

ねんねこを知らない今時の子供

窓際が知っている社の裏事情

鍋つつく燗酒が胃に染み渡る

いい月が出て中止する休肝日

和歌山市 古久保 和子

散り残る不様は見せぬ冬木立
身ぐるみへ潔きこと並木道

一畝を掻き上げ冬を遣り過ぐす

百態の水の景色と河口まで

誕生日きのうあつさり通り過ぎ

積み上げた本に所定の位置がある

大阪市 升 成 好

頭打つまでは見守る子の試練

聞き役に回りミカンの筋をとり

共通の話題はメタボ胴まわり

次の日は腹筋いたい大笑い

全力を出せば生命線が伸び

嘘言えぬホントのことはなお言えぬ

長岡京市 山 田 葉 子

大シヨックきれいな色が似合わない

耐えたひと離婚のわけを語らない

はにかむと絵になるひとにあるロマン

電池切れ過去の絆に縋りつく

走馬灯身の上話エンドレス

売れ筋のTシャツ街を闊歩する

弘前市 高 瀬 霜 石

静かだと思えば雪が降っている

見るだけで満腹になる旅雑誌

これだってひとつの勇氣途中下車

気がつけばあなたも僕も鼻メガネ
タイマーをつけておきたい長電話
人生双六上がりに壺が置いてある

羽曳野市 三 好 専 平

人間の欲に詐欺師の腕が鳴る

歴史書に「ブッシュはテロ」と書いてあり

ころみに椿油を塗ってみる

カネもカブも持っていないのにいじめられ

ポイ捨ての世に人間も屑になり

廃田が増えた能登路の鰯雲

鳥取市 岸 本 孝 子

素うどんは温い財布のとき食べる

メタボまで私を選び住みついた

毎日を好きに生きて物足りぬ

一生を小太鼓打って終えた母

少々のメタボ長生きするらしい

身内から漏れた噂が恐ろしい

鳥取市 岸 本 宏 章

ポイ捨ての罰金決めただけだった

血圧に悪いものほど欲しくなる

町医者のカルテ手書きが温かい

身から出た錆だ一生かけて消す

男らしい男に太い芯がある

にんげんの声聞きたくて窓開ける

唐津市 丸 晴 翠

後期でも買つて読みます文庫本

青空に事故ゼロ誓うダム工事

気の抜けぬ義母の介護にレモンティー

もういいかい まあただよと彼岸から

薬飲むために三度の食事とる

唐津市 樋 口 輝 夫

ジングルベル屋台に隠れ切支丹

聖書には無縁の一夜クリスチャン

お開きはまだかまだかと下戸の膝

イベントの方が人気の文化祭

三年後誓詞のことば死語になり

唐津市 井 上 勝 視

長いようでもう金婚か有難う

よく笑う変らぬ妻よ有難う

呆けるのは早いが勝と笑い合う

賽銭をケチツタかなと悔んでる

悩むだけ悩む男のコップ酒

唐津市 坂 本 蜂 朗

妻の留守末摘花にのめり込む

神前の約束妻が武器にする

休憩のように見られている思索

宮仕え終つて以来冬知らず

北の民永い冬にもよく耐える

唐津市 山 口 高 明

平成の維新何方が成し遂げる

学童を教える資格カンニング

花の世話妻は童女の如く笑む

窓ガラス割つたボールはホームラン

生きるの死ぬの騒いだ妻が死ぬと言う

熊本市 永 田 俊 子

真実一路ゆつくりと行くかたつむり

平等な時間を使う上手下手

人生はグーチョキパーのくり返し

何もかも忘れる老いの引き潮

過ぎた日に花を咲かせる回顧録

熊本市 岩 切 康 子

取り入れてつくづく日向の有難さ

保存品ないと不安の癖がつき

味噌造り待つてゐるから念入れる

予防注射元氣な内に受けておく

食べ方も教えて掘つたウコン遣る

熊本県 高 野 宵 草

ストーブの部屋で活け花咲きました

自惚れに痛打をくれた世の教え

学ぶことばかりで寿命まだ来るな

予防薬先手先手と老い楽し

人並みに腰痛が来て気付く齡

シドニー 坂上のり子

毒へびの恐さ崇めて神にする
年寄りと思われてたと知るシヨック
年寄りと思われたくはない背筋
不況風前も何とか生き延びた
外出に便利で楽な家探し

平川市 小寺花峯

香りには値段は付かぬ沈丁花
指切りは赤い糸から離れない
干し餅の笑いが続く冬の風
独り酒罍炉裏の鍋が煮えたぎる
病院で少し笑顔を分けてやる

黒石市 佐藤古拙

反芻をするかのように散歩する
五線譜をはみ出た風呂の夫の節
除雪費を嘲るように雪積る
添い寝してママはうたわぬ子守唄
雪おんな転居の噂温暖化

十和田市 阿部進

居酒屋で雨がやむまでのんでいる
高齢者まだ夢もある恋もする
紅白のマンジュウ買ったためでたい日
嫁さんにしたいが少しきれいすぎ
安らぎの地所は墓場となりました

弘前市 櫻庭順風

津軽には津軽のお山ある矜持
変らぬと見ているうちに四季の彩
登山する肌が知っている四季の風
下山して彼女来たのでまた登山
大寒に仁王立ちする岩木山

弘前市 岡本花匠

人らしく肩の荷降ろす除夜の鐘
寒たまごすべすべ肌へ娘の願い
熱燗で溶明させる今日のうつ
生姜湯の出番に母の苦笑い
雪像の主役に町の時計台

弘前市 今愁女

天皇と夫も同じ不整脈
北の冬華やぎくれるシクラメン
ポインセチア飾り独りのクリスマス
行き渋るおのこに女兒の寒稽古
初場所の番付上位他国人

弘前市 高橋岳水

千の愚が始まる朝の飯を食う
好きな事する日には無い疲労感
控え目な妻の意見が的を射る
虫のいい話は一步引いて聞く
抱きしめてやれば通じる父性愛

弘前市 須郷井蛙

温暖化ギネスブックを塗りかえる

共稼ぎ回覧板が進まない

原油高くらしの知恵がよく回る

風力発電岬の風をよく食べる

子育ての方が疲れる日曜日

弘前市 相馬銀波

ひと言の書評で欲しくなる新書

一球に泣いた昔の僕でした

ピーマンに偽りのない味がある

減反の波で広がる不耕起地

位置どりの上手い男に立ち負ける

青森県 松山芳生

年金で空地と農地管理する

山になる夢の木植えた散歩道

半世紀過ぎて恩師の認知症

樹海から蟻が這い出す位置にいる

他人さまの札数えてる職もある

さいたま市 八田敏

命かけた青春尽きぬ同期会

愚痴こぼす相手いないと呆けが来る

埋蔵金ないのでくじを買っている

カレンダーまず医者行きの予定から

身構えていても振込め電話なし

さいたま市 星野育子

すっかりと忘れた頃に袖が成る

車道との段差は大事な杖

だんだんと無くなる男の領域

妻じゃなく娘としてるペアウオッチ

犬派より猫派が多い川柳界

東京都 岸野あやめ

アメリカの破産クラスター爆弾か

嫌やなあ自分の年齢を忘れそう

リハビリで会う老人の百面相

顔拭いて薬飲むのが寝る儀式

ミシユランにランク付けられ泣く和食

東京都 清原悦子

朝起きて今日の命の水を飲む

渋滞の街で自転車軽やかに

おいしいね健康だからこそその日日

趣味というほどでないけど土いじり

舌鼓自給自足という暮し

横浜市 菊地政勝

切り返す言葉が出ずに貝になる

金持ちも同じ納豆食べるはず

よく聞いて思い違いを認め合い

階段を数えてのぼる呆け防止

不況時に一品減らす老いの膳

横浜市 小野 句多留

富山県 島 ひかる

不景氣をかき集めてる酉の市
温浴を混浴とみる勇み足
別れてもない噂が先走る
ソファアをちよい置く場所にする独り
八百長の話うんざり相撲小屋

川崎市 三浦 きぬ

締切りへ急かされているベン先の
クラクション鳴らす夫に急がされ
保険証カードになつて持ち歩く
依存から解き放された保険証
紅葉マーク返上できぬ過疎の人

大山市 関 本 かつ子

十二月八日私の誕生日
地球儀を回し亡夫に会いに行く
征った亡夫私の恋は終わらない
自己嫌悪繰り返しつつ今に生き
新春や目出度い意味が見えぬまま

静岡県 蘭 田 猿 沓

クリスマスに呼ばれケーキはこちら持ち
逆縁の友のうれしい立直り
定職を持つ子供等の有難さ
満足な顔で支払う美容院
長生きをしすぎひっそり家族葬

大山市 吉 田 幸 子

木の橋の村の入口霜柱
郵便受け雪の便りを待っている
味付けも細かく話すお裾分け
世話やいてうるさがられる老婆心
スマイルを添えてライバルとも握手

可児市 板 山 まみ子

悪口をはいても離れない仲間
若い日に戻れるおけさ節に酔い
ストレッツ慣れてほど良い足のバネ
心地いいあなたのトーンに湧く勇氣
パンジーに元氣をもらう師走風

愛知県 早 川 遡 行

全身で朝の挨拶ランドセル
暖冬はありがたいけど喜べぬ
ボケるのは夫が先と信じてる
ナス キュウリ冬に無くても生きられる
ひっこみがつかなくなつて受けた役

カレンダー一枚剥げば春景色
まアまアと肩書きよりも年の功
へそくりがここにもあった広辞苑
スタートのたった一步が追いつけぬ
軍手にも汚れてからの右左

京都市 榎本宏子

亀岡市 井上森生

収穫よりプロセス楽し葱坊主

ひとつ余分パンの備蓄のある安堵

テレビ消しやっぱりつける秋夜長

来客に花柄の幕ボロ隠し

モデルにはなりたくないピカソの絵

京都市 高島啓子

信長の血がフィギュアで舞っている

核心のあたり煙幕張っておく

CGになると嘘っぽい画面

志成らず立ち食い蕎麦の箸

家中の灯を消し部屋を休ませる

京都市 坪井孝一

マイペース無難な道をすぐ決める

コーヒーは足を延ばしてジャズの店

バラに棘あるから怖く美しい

肩書きの自慢を競う同窓会

子に還るシーソーのある遊園地

京都市 三宅満子

骨なしの総理舵とる難破船

戦力外父はうすうす気づいてる

年金開始妻の飛距離が伸びて行く

子や孫と距離が近づくお年玉

除夜の鐘撞いて善女の顔になる

カサコソとうまく気が合う枯れ落ち葉
花ことば富良野に人を思う風(テレビ 風のガーデン)

変革の波おத்தりの日本にも

春を待つ仲間はいつも路の盡

湯上りの冷水シャワーで温い冬

八幡市 結城君子

認知症きたかと思う冬の朝

当世の隠居生活いと多忙

京ことば少うし入れて話し合う

晩秋の雲よそんなに急がずに

ひい孫の写真飾って今日も無事

大阪市 谷口義

禄高でマッサージにも行ってます

禄高に無料のパスがついている

禄高は振込制になっている

世の中といつても家の中のこと

こだわった処が節になっている

大阪市 榎本舞夢

普通の子普通に生きる難しさ

金木犀においに酔って不意のキス

今だから言うけど巨人ファンです

くだおれ太郎ちゃっかりタレントに

下戸なのに飲んだ勢い安来節

大阪市 西川 更紗

大阪市 川端 一步

水しぶき黄色い声の川下り

何時か乗る夢は持つてる豪華船

つまずいた数だけ私強くなり

財布見つからず寒さが加速する

恙無く主婦をこなして除夜の鐘

大阪市 坂 裕之

お先にと別れ一人で申カッ屋

あちこちでぶつかりながら山登る

三億もいらんと母が言う師走

背伸びしてちよっと遠くが見えた午後

葉の落ちた銀杏並木に日が昇る

大阪市 小谷 集一

マイカーに枯葉マークは無粋なり

バリアフリー凸凹道が懐かしい

掛け損になれば嬉しい癌保険

戸主という肩書きをまだ持っている

芸人が浪華言葉をわやにする

大阪市 神夏磯 典子

雑草もスタート負けてはいられない

還付税楽しみ少し残ってる

呑めぬけど一升壺が頼もしい

喋るのと食べる泣くのはまだ自信

噂の出どころは無口な人だった

初春を憲法手帳抱いて待つ
酒ちびりちびりと賀状読む至福
負け犬にならないいつも前を向く
ありがとう言えば私が救われる
変の字に因み世直し旗を振る

大阪市 渡部 さと美

ふっと子に思い出される親でいる

あちこちのガタつき老いは耐えるもの

秋冷の紅葉息のむ写真展

酒飲んでテレビに吠えて寝てしまひ

齡取るはいいいもののものに動じない

大阪市 近藤 正

変の字が不気味な世相予告する

年ごとに総理の名前変わる国

投機マネー仕掛けた異に身を堕とす

直筆の賀状絶滅種に指定

生きてたら百寿の祝い鶴彬

大阪市 福岡 末吉

開戦日哀しい日本語につぐ

我儘を諫め戦後のくらし説く

不用意な言葉にエゴが潜んでる

佗しくも閉店セール黒だから

埋蔵金あるらしポチが嗅ぎまわる

大阪市 岩崎公誠

野次馬の来ない喧嘩はすぐ終り
札束をゴミと一緒に捨てたらし
本物のビールをくれと念を押す
暴落に塩漬け株はただの紙
立ち飲みで給油をしたら軽い足

大阪市 森田明子

十二月ブラームスかけ窓磨き
許されてばかりだったと今気付く
ホームメイド素朴な味が値打ちです
戦友といつしかなっている夫婦
お茶お花無手勝流でウケている

大阪市 中井 萌

靴音で今日いちにちを聞き分ける
単調な暮らしに慣れた花ごよみ
プライドを尾ヒレ背ビレに雑魚の群れ
待つ人もないのに急ぐ帰り道
この年になっても恋し父と母

大阪市 松尾 柳右子

良いニュース少ないテレビ見入ってる
物忘れしばし佇み思い出す
朝刊に今日の知識を貰ってる
老眼鏡はずし着けたり忙しい
鮮やかな鯛のうろこが顔に飛ぶ

大阪市 榎本日の出

健康を追っかけてゆく丑の年
円とドル丸い地球を飛び跳ねる
玉手箱開けてないのにこの白髪
主婦業に慣れて計算弱いまま
ストレスを知らぬ私の皮下脂肪

大阪市 川原章久

残り柿取ると烏が鳴き怒る
達筆で金は貸さんと断りを
値下げの日満タンだよと大声で
八百長の有無は土俵の土が知る
内定の取消通知飽きず読む

大阪市 小糸昭子

売られゆく牛は振り向きモーと啼く
品格は顔と心のバランスだ
心地良い総理の椅子は渡さない
風船は自由欲しくて手から逃げ
不死鳥のように生きてる人がいる

大阪市 田浦 實

二人乗せペダル踏むママ美しい
風呂浴びて今日の始末がちゃんとつく
意地を張り音を上げ損ね腰へくる
うちの風呂ちよくちよく月が覗きます
おにぎりに妻の温とい心しむ

大阪市 岡 本 久 峰

ボンボン育ちとかくピンチにうろたえる

国会がマヒして景気戻らない

不景気をチャンスにしほる水ぶくれ

うかうかと正論吐いて首切られ

景気にはとくと無縁な小商い

大阪市 小 泉 ひさ乃

終止符を打つまで自分らしく咲く

駆け込んだトイレフックも棚もない

しつかりの義妹と比べられている

ちちははの魂が呼ぶ兄危篤

私ひとり残して姉妹黄泉へ旅

大阪市 熊 代 菜 月

予定表あちらこちらに置いてある

川柳に今日も私ははげまされ

博識の友が主役の旅日記

飼い主も犬も頑張るダイエット

若作りちよっとしてみるクラス会

大阪市 川 久 保 睦 子

笛吹けばまだ踊ります尾髭骨

蝶の愛まだ待っている葱坊主

あらいやだ影までこんなに太って

ゴミ分別心残りが無いように

弱音吐けば抓ってくれる友がいる

大阪市 古 今 堂 蕉 子

重箱に家伝の旨さお正月

試着室イメージだけが空回り

美しい未来が見える鏡欲し

浮気ばれしばらく殊勝ハイハイと

人の道説いた火鉢の前の祖父

大阪市 奥 村 五 月

株下落やはりと思う神無月

嘘でよし好きの一声待つ仏

その内に空気も買うとボトル党

内気でも二合も飲めばはや天下

酒はしご止めた時には医者ハシゴ

大阪市 平 嶋 美 智 子

老犬の散歩だっこの介護つき

遅刻する人はきまつて何時もする

商店街店がぼつぼつ人もぼつぼつ

シャッターをおろした店主ひなたぼこ

コンビニの深夜淋しい人が寄り

大阪市 澤 田 定 子

改革案骨を抜かれて多数決

英訳の字幕頭上に落語会

三ツ星のホテルを出れば普段の日

年毎に賀状相手も齢重ね

杵の音一番のりの幼稚園

大阪市 原 田 すみ子

しばらくね目がいろいろと探つてゐる
三面鏡見たいとこしか見ていない
タイムマシン未来を覗き貝になる
ぬるま湯ですべて樂觀してしまふ
アイドルも歳を重ねて味を出し

大阪市 池 上 清 治

余興には手拍子もらう歌がよい
メタボには腹芸という得意技
ばらまきであろりと貰う支給金
紅葉の名所テレビが連れてゆき
美人アナ憶えた頃にいなくなり

大阪市 中 村 れんげ

まなざしの熱い写真はセピア色
別々に寝て別々に子を想い
線香にむせて弔辞に涙して
ああ八十路さっぱり背の荷を降ろす
アイドルでならしたあの子総入歯

大阪市 江島谷 勝 弘

招かざる客いつ去るか氣をもんで
お散歩は裏道ばかりめざしてる
世相読み金銀買う店増えている
激動の年になるのか楽しみだ
願望はシルクロードを歩くこと

大阪市 津 村 志 華 子

生姜湯で寒いところを温めてる
澄ましても皺まで写し出すカメラ
片意地がときどき頭もたげ出す
欠点をいっぱい持つて生きている
寄せ植の花もいたわり合っている

大阪市 中 村 叡 子

わたくしをカラッポにして夫逝く
尽くしてたつもり私が守られて
背に氣配振り向き探す影もなく
娘なき淋しさ嫁の有難たさ
篤姫が泰然守る女の座

大阪市 伏 見 雅 明

目に見えぬ夫婦の溝が跳びこせぬ
UFOを信じて夢のある暮らし
友情の仮面かぶったお節介
記録より勝ちにこだわる月桂冠
言い訳を許した妻に謎の笑み

大阪市 岩 崎 玲 子

ゼロ系の新幹線にさようなら
切符切る昔の姿よぎる歳
改札を通るレインが決まつてる
喫煙のホームの端の仲間たち
無人駅好きな野の花おでむかえ

大阪市 井 丸 昌 紀

奮発したパソコン欠伸しています

大予言何も起こらず十年目

ドキドキする出会い求めて回り道

姿焼き目と目が合って食べられぬ

地に足を付け歩みたい丑の年

大阪市 大 川 桃 花

言い返す言葉その場で出てこない

年金で孫を味方につけておく

妻の愚痴いつも昔にさかのぼる

夫婦ではなさそびったりしすぎてる

鍋にして独りの膳もほっこりと

大阪市 津 守 なぎさ

横着な鳩に手をやく人通り

童心に帰るシルバー日向ぼこ

彫像へ足踏みしつ雪まつり

身動きのにぶい加齢が厚着する

露天風呂売りの湯宿の猛吹雪

大阪市 伊 藤 博 仁

旗振ってくれた乙女も高齢者

祝日に旗立てる気にまだなれぬ

日の丸を家から消した負け戦

万歳で出てこっそりと負け戦

旗巻いた日から電灯あかあかと

池田市 栗 田 久 子

どの家も鰯焼くのか換気扇

初午の神事にあげは欠かせない

一人居の豆は小声でそつとまぐ

湯たんぽを抱いて心地よい目覚め

わたくしは気づいているよビワの花

和泉市 横 山 捷 也

お誘いに少し怪しい節がある

ブランドの服の出番のない孤独

ふるさとの火鉢で焼いたモチの味

仲裁が入りトラブル根を広げ

アイドルが青い果実のまま落下

和泉市 西 岡 洛 醉

お茶漬けが好き凡人の儘時を追い

あの噂向う三軒姦しい

猫の恋こんな処までよくもまあ

太陽の恵みに新芽生き生きた

屋台酒そんな昔を恋うている

泉佐野市 山 本 蛙 城

秒針がやけに早いな米寿には

亡き妻の夢に深慮を迫られる

給付金その印籠の怪し過ぎ

通学路守り歩哨のころ偲ぶ

下流だと胸張って言う暮らしぶり

茨木市 藤井正雄

河内長野市 井上喜醉

裏話聞きたいための酒を注ぐ
四季報で息子の会社確かめる
賛成に条件付けてくるワイフ
銀行は年金だけのお付き合ひ
反省が顔に出せない損なたち

大阪狭山市 矢野 梓

名物を買って旅行を締めくくる
日程表作って少しずつ掃除
捨てる気を出してた服をまた仕舞い
家計簿の溜息もれる物価高
つらからう友の病につまる胸

交野市 森本弘風

関西は柔らか頭ノーベル賞
あと三年金婚式へする準備
ジャンボくじ何時かきつとを信じてる
老老介護あもうイヤやもうイヤや
アメリカに振り回されて不況来る

交野市 山川日出子

茶柱が今日の気分を晴天と
ロボットが第九の指揮をする時代
白熊に白い世界を戻したい
雷で里のテレビが虫の息
夕暮はその昔から魔の時間

定年を二度越え人生ロスタイム
嘘つくと鼻の頭へ脂汗
こっそりと遊ぶネオンが笑う街

親友の見舞励ます嘘一つ
情けない張り子の虎へ欲しい知恵

河内長野市 坂上淳司

一年生くるりくるりと鏡文字
鏡見て思わず声にならぬ声
極楽の景色はかくや万華鏡
女房が急に優しくなる不気味
バツサリと短髪にした妻不気味

河内長野市 植村喜代

安心したこの国でさえ崩れかけ
今日元氣明日わからず生きている
人生に色を付けたら茜色
うろうろとすれば顔差す商店街
下手も上手も総出のよしとさん

河内長野市 村上直樹

生き様の汗も涙も沁む財布
悪友を見舞ってからの虚脱感
駅ウラに妻も知らない補給基地
コンビニのガソリン飲んで一万歩
欲に見栄捨ててゆったり風の旅

河内長野市 水谷 正子

コーヒーをゆっくり飲んで弥生待つ
もう四日誰にも会わずテレビだけ
中高生バレンタインがストレスに
主絶えて白壁に柿影数多
墓掃除感謝と願ひ年を越す

岸和田市 原 さよ子

おみくじがくれたうれしい初詣で
精一杯明るい顔で友に逢う
家中が歌える歌でクリスマス
歌の声老人らしい皺がある
面影が母に似ている師を慕ひ

岸和田市 米 富 淳 風

師走多事元気でこなすのも至福
寒空に大根干すや冬最中
倒れられては困るよと労られ
腹立ちも時間過ぎればまあいいか
ときめきが老いる心に待ったかけ

岸和田市 雪 本 珠 子

古稀くれど好奇心の芽育ててる
情報で海で溺れるヒト科達
屋根裏のアルバム時を忘れさせ
銀杏の葉ラストダンスは風まかせ
恋かしら胸の鼓動が弾んでる

岸和田市 岩 佐 ダン吉

微力だが九条守る列にいる
固いとは聞いたが酒で溶けはった
ひと言が多くていつも外される
お愛想を言うて淋しくなってくる
にこやかに話せ鏡に叱られる

岸和田市 井 伊 東 吉

上弦の月と語らう星二つ
お互いの趣味の批評はせぬ夫婦
モウいいかい牛が鼠を急かたて
ゼロ系のひかりよさらばご苦労さん
失言の止まぬ総理は祖父譲り

岸和田市 林 力 子

椿の花落ちて空しい風の音
見切品賞味期限を確める
愛の城浮気一度で見切る羽目
鼻緒切れたも不安を募らせる
白桃が触られべそをかいている

岸和田市 堤 檣 代

携帯に依存しすぎもこわいこと
寝返りもうたずに眠るこの幸を
皆様の荷物にならず頑張ろう
歩くってこんなすてきなことやった
暖冬と聞いただけでもうれしくて

岸和田市 森 元 ふみよ

古ぼけたスーツは過去を知りつくす

百八ッ煩惱消えてくれません

年金を切りつめ孫にお年玉

年金を残していつてくれた夫

億有ればどんな人生送るだろ

岸和田市 土 橋 房 枝

春くれば解決するとプラス志向

私利私欲ついつい願ひ自己嫌悪

六十路過ぎ少うし丸く生きている

スケジュール大安の日に集中す

ニュースから目を逸らしたい事ばかり

堺市 加 島 由 一

さあ土曜日の馬にいい騎手がくる

クリスマス参加しましたイエス様

紅白にジェロが出たので納得し

大掃除はじまったので家を出る

見舞い客食つて喋ってお大事に

堺市 柿 花 和 夫

厨房で妻にしごかれ飯を炊く

年金手帳に私のふんばった記録

エアコンの部屋で恋しい股火鉢

飢餓の子の素朴な目には背けない

毒舌にストップかけたおでん鍋

堺市 矢 倉 五 月

琴の音も一品となる京料理

ハンカチにティッシュ笑顔も忘れずに

特記なしそんな日もあり早寝する

相性は悪いが欠伸うつし合う

要るものはしょうがないなど預金帳

堺市 近 藤 豊 子

消しゴムをさがす手もとへ秋の暮れ

いまここに置いた消しゴムもうかくれ

けしごむのぬくもり鉛筆にはわかる

消しゴムをつつむ紙にもエコマーク

消しゴムもひとつひとつが低炭素

堺市 志 田 千 代

うっかりを笑い合えない時がくる

難聴の夫喧嘩もままならず

アンチ巨人トラファンでもありません

散らかった部屋で豊かに暮らしてる

よく眠るために食べてる晩御飯

堺市 西 村 り つ え

ありがとうの響きが好きなおばあさん

足腰のがたがた庇う口の牙え

刺のある言葉頓知で返してる

割り高な限定品を懲りず買い

アメリカ発のリストラに泣く日本

堺市奥 時雄

齒の抜けた男に美人の妻がおり
初恋の人の面影幼な顔

ふるさとの鐘さかずきをおいて聴く
標準語はんばに混じり舞い戻る
コンビニと抜き差しならぬ仲となる

堺市宮本 かりん

内緒事笑いこらえている背中
失敗を繰り返して真摯な手
雨だれがハートにひびく心地よさ
山水画瀑布の音を聞いている
笑顔には笑顔が返る花の園

堺市齋藤 さくら

言い訳はしたくないから黙ってる
現世に共に笑えるのも縁
解散で国が変わると思われず
東京で関西弁に耳立てる
とれたての美味いキーウイありがとう

堺市源田 八千代

万札が単位となったお年玉
御節注文従妹の店と決めてあり
試着室私が穿くと長袴
シルバーもヤングも辛い正座なり
冠婚と葬祭だけに合わす顔

堺市大久保 のん子
(フン子改め)

なるようになるさ人生楽に生き
筋書きのない人生を泳いでる
聞きながしまあるく生きる年になる
忘れたらあかん空気のありがた味
この星の未来蝕む温暖化

堺市荻野 像山

塩分はちと控えてね後家はいや
絵日記で父喜ばす五升樽
温暖化不意に大空かき回し
再検査笑って酒とする結果
後ろ手で笑っておこう五カラット

四條畷市 吉岡 修

日本の光りと思う子供たち
入社式天下取る気が目が並ぶ
歴史ある町で社と忠魂碑
液晶のようにハートに君映る
冬の蠅どきどき春の音を聞く

吹田市 山本 希久子

繊細と大胆どちらもわたくし
エコライフしてる湯たんぽ
無印良品夫婦茶碗は割れぬまま
冬の窓ただ黙々と春を待つ
奥様のへそくり外堀を埋める

吹田市 瀬戸 まさよ

次々と友を喪う十二月

湯たんぽを今も愛用八十歳

枯木にもオブジェの美あり青い空

大根の季節大根どっこらしょ

便利さに終の住み処と決めました

吹田市 穴吹 尚士

病床の妻の指図で慣れぬ家事

偉そうに吠える気力はまだ残り

諍いは妻の凱歌で幕が下り

まだ老いていない証の向う傷

これからは仲良くしてと子が巣立つ

吹田市 野下 之男

敵討ち今更犬も浮かばれぬ

マスコミの機嫌伺う事件種

あの人は星になっても煌めいて

何だろが妻が体操雨が降る

初恋は縁の下での隠れん坊

吹田市 大谷 篤子

小春日に蚊に狙われて庭いじり

俄雨となりの布団取り込めず

改札を出ると馴染の店で飲み

流暢な関西弁の長電話

絵手紙のべこの子跳ねて飛び出そう

吹田市 須磨 活恵

財産はないが夫婦でよく笑う

人の世の怖さ一寸先のやみ

老いという躲し切れない下り坂

貧相な私を庇う肩パッド

何度でも出直しがきく砂時計

吹田市 木下 敏子

肩の荷をおろして青い空仰ぐ

もう背伸びしなくてもいい足の裏

中心線を真直ぐ歩く癖がつき

五十年添うてきれいになった影

ありがとう引き際飾り紅葉散る

高石市 浅野 房子

うどんげの花咲き去年凶だった

割り切ろうにも割り切れぬのが悩み

奇跡など待てど暮せどおこらない

たまさかに布団を干せば小雨降る

願いごと神も仏もそっぽ向く

高槻市 指宿 千枝子

輪の中で見よう見まねで踊ってる

酔うほどにワンマンショウのマイクです

脱ぎ捨てて夕日を浴びる露天風呂

食卓の花御馳走の一品よ

雑穀も混ぜてはかほかうまい飯

高槻市 峯村 勲 弘

朝食はバナナ メタボに挑んだが

あの人が座り空気が流れ出す

ハンドルを握る猫背はしゃんとする

義理を欠くことにも慣れて老いの坂

野鳥観る会の打ち上げ焼鳥屋

高槻市 西谷 治三郎

杖ついてバイキング旅行無理でっせ

給付金兄弟げんかさせる気か

書道展書いてる人もわからぬ字

ぎっくり腰受話器が取れぬもどかしさ

ひとり身が腹立つことはビンのフタ

高槻市 杉本 義昭

父親を越せずに励む芸の道

不器用で人間臭いところが好き

マイペースゆるい絆で日々元気

ふるさとの母から弱い文届く

海原に立てば小さき我が心

高槻市 佐甲 昭二

堂々と俗論を斬るベンの意地

里帰り亡父の雷しみた部屋

新聞の折込み迫る日曜日

母の手の温もり残る宅配便

坪庭が畑に変わる定年後

高槻市 左右田 泰雄

温もりを確かめ合って手をつなく

オクターブ上げると声が裏返える

夕焼にムードを添える寺の鐘

急くほどに足がもつれて追い越され

チャネルをパチパチ変えて冬炬燵

高槻市 乙倉 武史

変一字遣し鼠公^{ネズミコウ}去つてゆき

大不況青息吐息小商人

どないです ばちばちなと言つとれず

ぎくしゃくの世に晩酌の潤滑油

卒寿祝いまさか自分が主役とは

高槻市 執行 稲子

ただ単に歩いてプラス万歩計

お下げ髪淡い儂ない恋でした

哺乳類も乱れる伐採温暖化

自己嫌悪どうもしっくりいかない日

シルバーの席で憚る短パンツ

高槻市 生田 義一

どっち勝つ一郎太郎の泥試合

べらんめえ口調も日々に元気なく

八百長の噂国技も地に落ちた

禿げ頭太鼓に見たて孫叩く

視聴率トップで篤姫師走入り

高槻市 安田 忠子

豊中市 江見 見清

清涼寺十大弟子のあばらほね
三徳山登った自分褒めてやる
立ちふさがる巨岩を登るクサリ坂
道なき道岩上に立ち鐘を打つ
投入堂仰いで心洗われる

高槻市 富田 美義

豊中市 水野 黒兎

正直に生きて皆から笑われる
不況でも蘇生の望み捨ててない
点滴に命を預け一寝入り
本当の愛は見えないとこで咲く
無口でも愛があるから響き合う

豊中市 安藤 寿美子

のら猫にくみし易しと見られてる
美男葛光源氏にちなむ庭
賀状もう止めにしますという賀状
全員が背丈ちぢんだクラス会
次々に一族定年退職し

豊中市 山門 タミ

富田林市 井上 じろう

勞れ入るお風呂のいい湯だな
生かされて嬉しい出会い有難い
幸せを噛みしめながらフグチリに
草花と語り合いつつ画いている
次々とよく悪知恵が回るもの

紅葉狩り早めた北風の子報
くちびるの動き別れを迷わせる
妻とよく喋り布団が温かい
手づくりのくぎ煮なくなる大晦日
ノーベル賞人それぞれのお人柄
煩惱の今年最後は宝くじ
期限切れ平気で食べてやがて古稀
繁昌亭寒さ忘れる触れ太鼓
月明り迷子のように父は百
まないたの音に予感の妻の乱
時どきは牙むく海にあるロマン
浮き沈みゆっくり流れゆく命
人情に酔って生きてる路地住い
公園を無口にさせた塾鞆
相槌を打って本音を喋らせる

顔が利く時代は遠くなりけり
雑草のように強いが泣き上戸
回り道した者だけが知っている
月並のお世辞に飽きる年になり
旅の宿嫁の不出来を聞かされる

富田林市 中井アキ

寝屋川市 森

茜

留守電に嫁の心根残される
もう時効あの日恋は忘れよう
撫でるのも叩くのも愛介護補助
手作りの菜っ葉洗って届けられ
次男から突然旅のプレゼント

寝屋川市 太田とし子

使うのが勿体なくて使えない
神棚に勿体ないナ邪魔な札
宝くじ勿体ないと思うけど
賞味期限勿体ないからなめてみる
勿体ない効かぬ薬をのむ命

寝屋川市 森田麗

十三日予定書き込む煤払い
大胆に私を泣かすプロポーズ
三代目の里の新米ただ感謝
のど自慢米寿におまけ鐘二つ
それぞれにある鎮魂のルミナリエ

寝屋川市 籠島恵子

わたくしの器他人が決めてくれ
きさらぎの約束忙しいむつき
冬ざれや春の息吹を楽しまん
たおやかな人美しく老いたまう
ひらがなの恋をしまっている詩集

すれちがいざまの会釈にお人柄
胸ほんと叩きちまます財布
リンカーンの言葉は今も新しい
コーナーにむんずとうつが踞る
号泣が悲しみ軽くしてくれる

寝屋川市 富山ルイ子

年寄の頼みは軽いのだそう
二度三度頭を下げて頼みます
明らかに最良見え見え恥ずかしい
母親のようと嬉しい言葉聞く
冥福を祈る元氣を見たばかり

寝屋川市 平松かすみ

なつかしい万年筆の青インク
じいちゃんが入歯外しておせんざい
マイカーを磨く命を乗せるから
ありがとう手摺りがあつて今日も無事
スカタンと互いに思う右左

羽曳野市 吉川寿美

もの忘れ武器に鉾先避ける術
甘言と知って低温火傷する
八十路には八十路の夢よ靴が鳴る
修飾語いっぱいつけて人を刺す
わたしにもいいよ来たかもの忘れ

羽曳野市 徳山みつこ

東大阪市 北村賢子

りんご届いてみかんは雪の国へ旅

お向かいに電飾お嫁さんが来て

結果急ぐなとクラゲもいうている

同時多発地球を回る火の車

ゴキブリが地球の終り見届ける

羽曳野市 酒井一壺

その昔遊んだらしい洪い喉

いきさつがあつて返事を言い洪る

裏切らぬ大地へ蒔いた生きた種

種を食べ命をもらい生きている

何となく怪しい時は口にせぬ

羽曳野市 吉村久仁雄

惨敗の記録も過去に黄昏れる

原発は安全ですと街にない

トラブルに対処人間試される

水争いの過去なつかしむ休耕田

麵好きも読みを知らない饅頭の字

羽曳野市 永田章司

若者に語る哲学国になく

党首討論疑問が残るすれ違い

餅代に当てにしていた給付金

物でなく金が金生む世が終る

振り込めの電話に家にや金がない

漆黒の闇に木金月並ぶ

一年の感謝と押し詰まる焦り

師走に足かかると走りだすころ

イルミネーション陰にリストラされる人

老いて孫抱けたほんまの宝物

東大阪市 久米奈良子

片付けがすむまでお迎えを待たせ

亡きひとを偲ぶベゴニア咲き匂う

ヘルパーに感謝のベッドメーカーキング

幸せを映す手鏡拭いて笑み

いつまでの命頂く今日の幸

東大阪市 佐々木満作

熱いうち打った鉄ほど質が良い

熱弁が差別を越えるオバマさん

心底は信頼おけぬ飲み仲間

飲み方の一家言推すワイン通

もたもたの性格いつも割を食う

東大阪市 安永暁子

石仏はよく見ている知っている

頭にもアンテナ立てて感知する

自転車に乗せて脚力衰えず

耳も目もまだ大丈夫姥桜

星の降る山はひんやり露天風呂

東大阪市 笠井欣子

薄情になれぬ私をもてあます

宮参り茶髪のパパが追うカメラ

平凡に生きて足腰四苦八苦

子の世話にならぬ氣持がゆるぎ出す

鍋奉行食べる頃には野菜だけ

枚方市 伊達郁夫

写生するあなたの足の裏までも

生きている証にハガキだけは出す

うれしい日も苦しい日にも花を買う

縄跳びで雲を掬っている広場

腹割って話がしたいキムチ鍋

枚方市 森本節子

唐楓散り敷く道を通院す

左手がいうこと聞かぬもどかしさ

ガラス越し冬の日ざしの暖かさ

マフラーと対の帽子が快気まつ

もう幾日卒寿手を受け待っている

枚方市 寺川弘一

ブロンプターに徹してくれる妻が居る

ドクターストップ妻が厳しく管理する

ひそひそとささやく二人共犯者

カビが生えても握りしめてる志

松竹梅の梅から売れる幕の内

枚方市 安達忠央

上手過ぎる歌でしーんとしてしまい

手拍子に合う童謡でうけている

余興にはねたばれれば良い手品

お互いの非を認め合いめしにする

いただきます家族で拝む朝の飯

枚方市 丹後屋 肇

ライバルのエラーに胸を撫でおろす

天神の御守りを売るゼミナール

雑音を消す入場の鼓笛隊

同意書に判子を押して待つ手術

点滴の数を数えて寝てしまう

枚方市 二宮山久

野仏に両手合せる世の平和

メモとペン持つて出かける冬晴間

ススキの穂ゆれて師走の日和かな

今日もまた日本晴れです万歩計

ライバルは自分と知ったコンクール

枚方市 小林わこ

秋色の好きなベレーを買いました

尽くしても尽くしても散る紅葉です

五十段駆け上がったと自慢する

上中下迷った時は中にする

オリンピック一度くらいは出たかった

藤井寺市 鈴木 いさお

箕面市 広島 巴子

雨あがる私も泣くのやめにする
肩書が消える寂しさ気楽さよ

つらら垂れ滝キラキラと吸い込まれ
スケートの初めは手摺磨いてた

おまけ付きグリコみたいな我が余生

雪女ではありません社交べた

席譲る若者を見てホッとする

故郷へ響けザクザク霜柱

柳友に医者も僧侶も校長も

北国も太陽を受け子は育つ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

守口市 井上 桂作

親切な妻だが実は他人さん

定年後人間らしき日が続く

あっさりと賛成何かありそうだと

なるようにならぬと思え人の世は

機嫌よい夫にすごく腹が立ち

天命に任せて今日も無事でした

銀行に使う運転免許証

こだわりを忘れて生きる利口者

信号を無視せぬ鹿のいる都

辞令だけ新入社員春遠し

藤井寺市 太田 扶美代

八尾市 宮崎 シマ子

花時計人を待たせる癖がある

酒うましおでんもうまくなり冬に

旅で会う人は善人ばかりなり

料金は箱へと道に吊った柿

ネクタイを結んであげたのは昔

ひとり暮しプラスになるは自由だけ

エプロンの下はメタボになつて

むかつく時甘納豆を口に入れ

あかんたればかりで平穏な暮らし

不肖の子見れば自分の姿なり

藤井寺市 高田 美代子

八尾市 生嶋 ますみ

運がよければノーベル賞も夢でなし

目葉の半分ほどは逸れている

童顔の男たこ焼き食べている

靴の底私の歪み溜めている

木枯しにみんな無口で前かがみ

嬉しい時はうれしいう言う杜の風

小正月やつと素顔をとり戻す

今はもう力を抜いて生きている

着膨れて動きのにぶい雪おんな

漬物のおいしさ知ったお正月

八尾市 吉村 一風

鍵の束未来を開けるのはどれや
やわらかい字体で書ける楽しい日
ふっ切れた心へ風は透き通る
言わぬが花世間いろいろむずかしい
雑学で追いつ追われつ老いてくる

八尾市 村上 ミツ子

埋蔵金探してもないわが家には
やさしさに傷つくこともあるのです
間違はなくメタボだという腹回り
ありがとうと言う当たり前のことへ
近所にはうれしいことを話さない

大阪府 米澤 俣子

MRI言い訳無用丸裸
新薬は効けば効いたで出るリスク
雑学クイズ脳のカンフル剤になり
影法師ちよつと小さくなつたかな
値札見て考え変えることもある

大阪府 初山 隆盛

初日の出一番好きな日本国
紅白は見えないハイビジョンのファン
駆け足でねずみと牛がタツチする
ワインとは舌でころがすものと知る
入院の妻と血の糸もつれだす

大阪府 澤田 和重

ゆつくりとしている時に不意の客
追い打ちはよそう反省してるから
寝転ぶのに便利なんです万年床
前置きが長いお金のことらしい
競走馬のように改札口抜ける

大阪府 桑田 ゆきの

焚き火の輪巷の風が吹いてくる
助け舟欲しがっている麻生丸
大卒のニートが増える不況風
毛糸編む母の愚痴まで編んでいる
柚風呂に心足ってる好々爺

大阪府 野田 栄呼

メモしとくバランスとれた病院食
穏やかな顔が並んで足る夕餉
気遣いも安らぎもある我が家です
紅葉が車窓へ流るバスの旅
二座席を腰へゆつたりバスの旅

神戸市 山口 美穂

ポーナスの喜び遠い日となって
アメリカから世界へ不況ハリケーン
木枯し一号さあ冬帽子出番です
歳の鯖顔が承知をしてくれぬ
道の駅大根っ葉に惚れて買い

神戸市 伊勢田 毅

夫婦して顔を見合わせ飲む薬
ゴルフ界十七歳に従いて行く
診察券数を見せ合うクラス会
盗み酒妻と距離おき会話する
一豊の妻が買つてゐるジャンボクジ

神戸市 田中 章子

よそ行きの顔とドレスでコンサート
勝ち負けをつけぬ夫と口喧嘩
東京の友の誘いでルミナリエ
これも重力脂肪は下へ下へ
ゴミ出しに血液型の違いあり

神戸市 木村 貴代子

寒いけど君に逢いたい流れ星
家計簿に今日一日を書きとめる
歳末もおせちも遠く一人住む
呼ばれたら元氣にハイと旅立とう
水だけで次々開くシクラメン

神戸市 山口 光久

慌てずに尺取虫に成り切ろう
可哀相に点取り虫が今ニート
健康な土壌に住んでゐるミミズ
団子虫保身の術を心得る
てくてくと自分探しの旅半ば

神戸市 山田 婦美子

貯えも出来ずねずみ年が去る
噛み合わぬ意見が喉にひっかかる
本心をよそに置いての談じ合い
十のうち一つよいとこあり夫婦
炬燵に足取られ一日休眠中

相生市 中塚 礎石

激論の果てのプラスが少なすぎ
リーダーを辞めて気取な雑魚ぐらし
カラフルな衣装が雌雄まどわせる
偏差値へ夫婦の指針割れてくる
仮面みな付けて行き交う過密都市

芦屋市 黒田 能子

靴下の自由右でも左でも
クモの巣を払つてクモの行く方など
人ごとと軽く笑つて泣いてゐる
シンブルに暮していこうゴミ袋
上機嫌ふんわり出来た玉子やき

尼崎市 春城 年代

忌が明けてぼつんと菊の薫る部屋
うしろ楯失つた日の風厳し
この家に夫と生きた歳月よ
よもやの時に恥ずかしくないバジヤマ着て
辿りつく晦日にひとり酒を酌む

尼崎市 長 浜 美 籠

キャンドルライト今宵はエセのクリスチャン

高齢の余病涙腺ゆるみ出す

いつだって出直す気さえあるならば

旺盛な時こそ足場たしかめる

無駄だとは思うが試みるバック

尼崎市 林 昭 三

御仏の身拭い終えた肌の艶

大声でなく正論で論す父

アメリカは何か起ると走り出す

冬の海なまじ半端でなく揺れる

邪心などない幼児の瞳瞬かず

尼崎市 軸 丸 勝 巳

賀状買う年に一度の交際費

衰えを見せじと賀状跳ねた文字

リストラのない年金の有難さ

知らぬ顔出れば紅白切る点ける

老いた足急げば転ぶバスは出る

尼崎市 加 川 靖 鬼

三ツ星が並んでいますお空にも

雪だるまやはりメタボがよく似合う

鼻ピアス牛はとつくに填めてます

無理するな言われて意地になつてゐる

ケータイで大阪弁は打ちにくい

伊丹市 山 崎 君 子

あんさんと夢に懐かし師の笑顔

剪定終る蘇鉄ふるえる丸坊主

申し込み歳は書かないことにする

書くよりは電話で声を聞きたくて

見間違ひゼロの一つに夢消える

川西市 米 原 雪 子

異状なし笑顔で医師に告げられる

子の名前一字に込めた親の愛

粒よりの人材宙に浮く不況

すくすくと育つ曾孫に癒される

親ゆずり足短めは黙っとく

川西市 西 内 朋 月

勝ち組に賛成してる日和見派

折角の余興を誰も見ていない

キッチンで棚で錆びてる炊飯器

晩飯を抜いても酒は欠かさない

胃を切ったあとも早食い直らない

三田市 石 原 歳 子

ついてない一日でした夫婦とも

輪の中でもまれて世間見えてくる

一城の主がごみを出しに行く

真っ先に冬に入った指の先

会話する声が大きくなってきた

三田市 堀 正和

杉玉がおいでおいでをして困る
東大出だったと弔辞聞いて知り
原因ははつきりしてる不整脈
週二回首吊ってますリハビリで
まだ前期でつかい夢を抱いている

三田市 北野 哲男

この僕も神童だった頃がある
マージャンの貸しを栄転放棄する
大器晩成 定年過ぎて十五年
円高の騒ぎ横目にバスポート
埋め立て地ジンタの響く大テント

三田市 久保田 千代

老木を豊かに染めて柿実り
農地にも都市化を目指す青写真
天職と続けてみればある実り
スーパールの野菜それぞれ故郷もち
プレゼント箱のリボンの夢を解く

西宮市 山本 義子

風呂敷はほんま便利と母の声
楽しいなら嘘でもひとつ混ぜておく
近ごろはおっぴらにする大欠伸
山ざくら初恋いろになつてくる
春を待ち青い帽子を買うとする

西宮市 牧 渕 富喜子

たまにあるヒットところに灯が点る
簡単に決心ゆらぐたいこ焼き
かぶらずし届き故郷近くなる
残り火へ時々風が来てくれる
ひがん花ものみな枯れる時繁茂

西宮市 緒 方 美津子

父の次好きだったのは姑でした
山の神しゃべらぬ時は病気です
木蓮の白に重なる震災忌
小気味よく庭師の缺空作る
魔物でも宝でもある孫娘

西宮市 井上 松煙

坪庭の紅葉が散つて絵になった
満月がとてもきれいで妻を呼び
青春を保つお金は惜しまない
親離れされていつまでおろおろと
病院は天気よいほど待たされる

西宮市 秋 元 てる

野仏よ誰の形見か正ちゃん帽
傘の杖おしゃべり続く陽の温さ
流れ解散友は消え行き吾ひとり
何もいい事など無いと蕎麦吸る
度忘れの字は〇〇で書く日記

西宮市 菊池 トミエ

茶柱が今朝の出足を弾ませる
落葉道踏めば優しい音がする
まだまだと卒寿の人に励まされ
訳もなく孤独に落ちる日暮れ時
生きている証し痛みとつき合おう

西宮市 亀岡 哲子

青春のなごり銀杏の御堂筋
二三人抜いて駅までゴールイン
赤を着て敬老席を避けている
ジョギングを追い越す犬の散歩道
苦勞人らしい笑顔のおだやかさ

西宮市 藤本 直

年の字が明となる年いつの日か
明らかな嘘に頷いてる弱さ
指恋の新語を造るメール族
食品業一度の嘘で明日はない
二兆円気軽に配る他人の金

西宮市 片山 忠

ゴミ出しを他所の女にほめられる
あほな事言うて妻にも注いでやる
遠いから無理に来るなど親心
弱虫と女に顔を抓られる
何もかも見せていないと落着かぬ

西脇市 七反田 順子

入院中母は延命嫌ろてます
切捨てる医療制度にメス入れて
急停車紅葉マークの後につき
バラ一輪垣根を越えて声かける
寄せ植えに家族の絆交せている

姫路市 古川 奮水

ビール好き焼酎カクテル危険です
健康へ減量努力明日からは
無口でも心は通う目が笑う
ローン等忘れてパツとルミナリエ
新年会習うた奇術提げている

奈良市 米田 恭昌

大枚の寸志に僕だつて揺れる
老いてまだ笑われそうな虹を抱く
頑固病み厄介かけるねと弱気
思い出はホカホカぬくい股火鉢
イベントは古老地酒が盛り上げる

奈良市 天正 千梢

陸橋の上で拾った天の声
ふる里に何も約束していない
制服をぬいで言いたい事を言い
うかうかとしてたら対馬とられるで
秋の酒さみしすぎますのみすぎる

生駒市 飛 永 ふりこ

手作りのケーキできつと笑み戻る

お元氣な方の訃報に脈震え

なんべんも頭打つてゐる散漫さ

不景氣を飛ばす華麗なルミナリエ

腕組みの鬼一匹と除夜の鐘

香芝市 大 内 朝 子

心身がわつと伸びする春よ来い

困難を逃げぬ覚悟の真正面

もうとまだ古希を揺れてゐるヤジロベ

お誘いへ女に戻る髭を剃る

年寄りがひとつの席を譲り合う

橿原市 居 谷 真理子

御堂筋追ひこして行く人ばかり

一心寺他人の骨に手を合わせ

すべるには登らにやならんすべり台

子を産んで九条なんて当り前

嫌つてもあげないあんな男など

大和郡山市 坊 農 柳 弘

身の程を悟る男にあるケジメ

柊の心ね早春を掬う

人許す愛の序曲のナナカマド

ためらいが多くて主張霞んでる

偽りがなくかと自分に問うてみる

奈良県 渡 辺 富 子

錆ついた脳にしつくりジェロの歌

母を看る話へみかんころげ出す

すつきりと思ひ出仕舞いホーム入り

すぐ熱くなる厄介な男です

オレオレ詐欺しばらく相手して遊ぶ

和歌山市 堀 畑 靖 子

生きる糧そんな氣配のカン拾ひ

シャッターも心も錆びる不況風

暗いナアあははケチケチ作戦や

運氣向上そんな氣がする冬の虹

ひまですとフライドチキン屋のおやじ

和歌山市 玉 置 当 代

それはもう意氣投合の縄のれん

ごぶさたが寄つた法事へもみじ舞う

哀しみも新たに母の三回忌

満遍の幸せ願うルミナリエ

運のないおとこにしがみついている

和歌山市 喜 田 准 一

目で詫びてゐるから詮索はしない

失言を妻から諫められてます

妄想が地獄の沙汰で攻めて来る

激論に落とし所が見えて来る

生きて行く温度は自動セットです

和歌山市 木本朱夏

和歌山市 松尾和香

クリスマスソング寒さを掻き混ぜる
一身上の都合を猫に言い聞かす

煮えすぎた豆腐内緒を聞いていた
本箱の隅で思想が腐りだす

飢えて死ぬそんな時代がないように

和歌山市 福本英子

上を見て下見て明日も生きられる
四捨五入するととてもすごい歳

地デジに替えて京の錦秋独りじめ
ひらひらと山茶花散って冬至くる

当り年病気の問屋して暮れに

和歌山市 松原寿子

湯豆腐がゆるやかにする胸の芯

目立たない位置にいるから気が楽だ
はらはらの想いが櫛の背にたまる

視界ゼロ流れの外で深呼吸

振り向けば目線に絡む愛の私語

和歌山市 武本碧

何もかも吞んでだんまり雪景色

愛という特効薬を持つ母よ

百万は長者と言えぬ世を生きる
善人もそれぞれ過去の二つ三つ

騙されておこう五十歩百歩なら

無事ラスト愛しむ0系ありがとう

千年紀京の紅葉人の波

平行線だった夫婦も丸くなる

鍋のメうどんの旨いひとり鍋

人生もスイッチバック登る坂

海南市 堂上泰女

薩摩焼きの一輪挿しに旅偲ぶ

孫に誘われつい無理をした空元氣
子の電話きけば長生きしたくなる

安定剤のように電話が子から来る

日本の花だと思ふ菊の花

鳥取市 鈴木公弘

いくらメモしても忘れる名前あり

子ら抱いた写真に出合う大そうじ
ごみ出しの係になってゴミが減り

よく言えばメタボ通称タヌキです

ひと言が拍手もらって降りられぬ

鳥取市 有沢せつ子

大会へ希望をくれた朝の虹

ストープを点け一日が動き出す

全身で笑って肩の凝りがとれ
趣味のはずなのに毎月追い込まれ

痩せすぎの悩み寒さが骨に沁む

鳥取市 植田 一 京

過ぎし事こだわることは止めとこう

いちがいな男の背なが寂しそう

プロポーズ冗談入れて言ってみる

へそくりが意外なここに置いてある

七十路を生きてでもいい定まらず

鳥取市 西川 和子

鍋茶碗今日も厨は賑やか

じいちゃんの叩く太鼓に踊らされ

時どきは大法螺吹いて悦に入る

僕ほくに一旦切つてかけ直す

給付金旅のプランを練っている

鳥取市 吉田 弘子

ハイこままでしつこい夫黙らせる

貧乏の記憶ひたすら生きてきた

偶然の恐さホールインワンが出る

何よりの薬とおもう家族愛

内定のるんるん気分だったのに

鳥取市 近藤 佳子

海鳴りも風の記憶も消えやらず

栄転も左遷も万歳でよく

新塔婆粉雪まじりの風に揺れ

命日はユーモレスクで兄偲ぶ

目を閉じていまタンポポと飛んでいる

鳥取市 中宇地 秀 四

色の無い風に魂いやされる

次の世につながる夢を胸に抱く

あなたならどうする美女に誘われた

先ず見ます中国産かその他か

顔体操 鬼や仏やヒョットコや

鳥取市 山宮 愛恵

突然の喜び電話かけまくる

方便の嘘がほんとになつてきた

見放されていらないと思うことにする

腰に手を当ててはのばす丸い背な

ポチ君も診察券を持っている

鳥取市 夏目 一 粹

万札は鳥だと思ふ飛んでゆく

天国へゆく気で梯子かけている

痩せている人は神経質に見える

本物の辛さどれだかわからない

脱線をたまにするのも生きる術

鳥取市 土橋 はるお

平幕にビリオド打った日馬富士

両側に美人が座り肩が凝る

金持ちは無理をせんでも金溜まる

ンダンダンダ ビールも酒も飲み放題

へらへらの木の葉鏝を釣りあげる

鳥取市 土橋 睦子

和やかな対談でした表向き
大気汚染都会の雪はどうだろか
共稼ぎメモに携帯置き手紙
ひと時の夢を見ていた私小説
丸つけただけで終った誕生日

鳥取市 加藤 茶人

おだてればほらはら豚も木に登る
野仏に芯からすがる心地良さ
いつからか妻が三步も前歩く
日本を滅ぼす総理三代目
何食べる何でも良いは困ります

鳥取市 平尾 菜美

こだわらず笑ってきつと若返る
活躍が光るくらげのノーベル賞
愚痴を飲む壺のむなしさ思いやる
祈りから覚めるはろばろ深い海
重ね合う命平和に捧げてる

鳥取市 福島 庸二

恥ずかしいほどに煌めく今日の月
いにしえに思いを馳せる月明かり
煌煌と輝く月に背を押され
満月が私のロマン搔きたてる
神代より夢とロマンの月世界

鳥取市 宮脇 道子

問い掛けに眼鏡外して聞き直す
無駄なこと沢山省く年の暮れ
お隣の匂い舞い込み元気かい
心乱れ薔薇の花弁全部散る
セーターを解いて編んでた母偲ぶ

鳥取市 池原 天馬

この人で世直しできる信じたが
山の秋無粋な杉で色みだる
野次ばかり党首討論先見えず
ゴミとして思い出の品軽く捨て
加齢にて孫等の新語聞きとれず

鳥取市 奥谷 彩子

毒だけど酒も煙草もとても好き
人生薄暮やり残すこと山積み
うきうきも少し残して夫婦の諧
冬の陽にほっこり幸を噛みしめる
雪しんしん亡夫の想い出温める

鳥取市 永原 昌鼓

昭和史へひもじさ綴る一ページ
思い出のページに涙跡がある
自分史のページ秘め事ふたつ三つ
新刊書ページ捲って句を探す
一ページ読むか読まぬに眠くなる

鳥取市 中村 金祥

いい夫婦一日だけの仲直り
権力について仮面の顔になり
ブルートレイン初めて乗った一人旅
挨拶の大きい人が跳ねている
病床で夫婦の絆確かめる

鳥取市 太田 幸枝

住みながら窓辺の色を換えている
心の窓あけると視野が広がる
毒舌家にポイントつかれてる苦笑
少子化の進む日本が気にかかる
口紅をつけると逢いたくなってくる

鳥取市 田村 邦昭

励ましをうけて老いにも鞭をうつ
油断した穴が大きく塞がらぬ
いい音が補聴器なしで聞かれない
ハーマニカ亡父の匂いを吹いてみる
一生を託すつもりの社が潰れる

鳥取市 春木 圭一郎

健康に感謝ほどほど金もある
いつだって自分主体に考える
かけがえのない存在と今を生き
無理しても他人を変えられることできぬ
ハードルを下げて幸福感増やす

鳥取市 福田 登美

明日の風読めぬ女の独りごと
年重ね昭和も遠くなつていく
いい話聞けば命に欲もでる
人許すその時心高めてる
新卒の採用無視に泣く不運

鳥取市 下田 茂登子

成り行きで夫婦になつて半世紀
成り行きで出来た子供が一人いる
お隣と庭木のことで揉めてきた
脳味噌がだんだん減っていく怖さ
馴れ合いになつて我が家の恥晒す

倉吉市 猪川 由美子

スキンケアだんだん大儀おんな老け
無人家に季節の花は偲び咲き
鏡より辞書見が好きな私だ
大相撲ヒールが去つてポツカリだ
字が読めぬ総理恥ずかし未曾有だね

倉吉市 野口 節子

港には昔話が積んである
私の血の九割は外来製
半分この喜び知らぬ一人っ子
争いを避けてストレス溜めている
転げ込んだ福をラップで繋ぎ止め

倉吉市 松本よしえ

トラックが怖い歩道が狭いから
物忘れ進み笑っちゃいられない
戸締りを忘れてないか夜の風
お茶がらも玉子の殻も畑に撒く
便箋は和紙下手な字も映える

倉吉市 山本玲子

打楽器にされる組板朝餉どき
般若心経波紋となつていく脳裏
シャボン玉弾けて行方くらました
独り者できぬ三食昼寝付き
新人にあげるハンカチ白にした

倉吉市 牧野芳光

歯が抜けて鬼の威厳が消えてくる
まん丸い窓には鳥が寄ってくる
窓際は人の尻尾がよく見える
神様の願ったとおり戦する
煮つめたらおいしくなれる人間も

倉吉市 山中康子

お山から昇る日の出に励まされ
童心に戻るマンガのサザエさん
はつとして雲の行方を追っている
懸命な医師看護師に支えられ
点滴が今日の命をつなぎとめ

倉吉市 最上和枝

披講中こそこそ私語の花が咲く
こそこそと教科書立てて早弁当
銀杏が落ちてる一寸立ち止まる
もしも今振り込め詐欺にかかったら
昭和の歳末大買出しで賑わった

米子市 光井玲子

過ぎ去った事は思わぬ事にする
乾燥機にたよりきつて洗濯だ
気分よい日は家事なども楽しいね
亡き父母に守られている手を合わす
毎日を呆けないように努力する

米子市 青戸田鶴

天窓から朝の光りが下りてくる
平たんな道を選んだはずなのに
ほのぼのと孫の便りは面白い
しつかりと家族を守るちらずし
こたつから荒れた景色を眺めている

米子市 白根ふみ

悪人が欠で忘年会にならぬ
脇役と思わぬ車道チャリンコで
美しいものに紅葉束の間で
豊穣祭むかしどおりの祭り笛
気付け葉のように熱いお茶をのむ

米子市 野坂 なみ

さまざまの傘に守られはや米寿
年寄らしくするにも金が物を言う
試す側少し反り身になつてゐる
次の選挙のばして見ても始まらぬ
今はもう気促にせよと弥陀の声

米子市 門 脇 晶 子

好きだった思い出ばかり夢に出る
手作りの梅酒酌むのに友が来て
数え唄うたう昔に会いに行く
足腰を鍛えたいので踊りの輪
拳骨をしらぬ子供に骨がない

鳥取県 盛 田 夢 路

カサコソと諸行無常の風がゆく
いばら道越えたらきつと春だろう
老人が尊敬されて世が温い
人生を楽しみながら古希の坂
おバカクイズ孫と競つて知恵しぼる

鳥取県 山 下 節 子

無理をした笑顔に頬がひきつれる
無駄めしも長い目でみる度量もつ
仮面つけ本音をはいてゐるらしい
堪忍袋そろそろ破裂するころだ
お世辞だとわかつてゐるが嵌められる

鳥取県 深 田 俱 久

甦る国来年の課題とす
化粧して心の鍵をかけ忘れ
足腰に言つて聞かせる数え年
鍵かけたはずの心に隙がある
千円の枠で贅沢閉じ込める

鳥取県 竹 信 照 彦

金の無い師走にひびく麻生節
果物も米も豊作貧乏だ
不況下の神も仏も寄付ねだる
金策もせずにリストラする企業
年ごとに喪中ハガキが多くなる

鳥取県 石 谷 美 恵 子

スムーズに嵌らぬリハビリの鉤
怒るまい病が無理を言わせてる
仮の世に生きて仁義のむずかしさ
居眠りもできないど真ん中の席
手を振つてしつかり真ん中を歩く

鳥取県 松 川 行 男

息子達道の駅までガマンせい
どなつても重い尻から抜け出せず
火遊びの外孫一人認知待ち
総理からマンガ全集取り上げる
千の風君は死んでも浮気者

鳥取県 北村 稔

ぼつぼつなんて言つてられない婚期です

お色気がたつぷりあの娘笑顔よし

よくもまあ次々と詐欺また新手

今日もまた退院送る窓さみし

百歳はあと何年と孫が聴く

松江市 三島 淞丘

弱音吐く私を叱る冬の海

裸木にわが生き様を重ねみる

もう一度大輪咲かす冬囲い

今日もまた笑顔の仮面つけて出る

色褪せた虹しか立たぬ世を憂え

松江市 川本 畔

歩けば風大胆になる酒のあと

綿菓子ほ口の囲りへ甘え出す

一言のおだてはひよいと乗り易い

美しい虹だ さよならした後に

お隣へ耳打ちをする寒椿

松江市 松本 知恵子

しつとりと蕪の甘さよ冬の宿

だんだんの舞台しんじ湖冬景色

師走まで紅葉残っている不気味

孫の熱下がれと祈る滝不動

転ぶコツ覚えてからの処世術

松江市 安食 友子

貧富の差見すぎて月も染み増える

曾孫からボーイフレンドの耳打ち

紅葉が眠りこけてる窓嘆く

忘却が自分の居場所捜してる

孫の居るニュースはらはら上海よ

松江市 小川 注湖

丑の絵馬給付金負い重たそう

ポストの底音立て僕の心を受け

カレンダー追っかけているこの元氣

祖父の味蕎麦の看板続くてる

大卒の夢を取り消す政治問う

松江市 銭山 昌枝

チン・ピー・ブー忙しい朝の電子音

二度寝する夢の続きが見たいから

トゲだけを残してばらは枯れてゆく

ああ言えばこう言う孫の成長期

何だかだ言つても夫に護られる

松江市 津川 紫晃

寒い朝蛇口の水で目が覚める

合併でやや薄れがち郷土愛

秋の実が落葉布団で夢を抱く

こだわりを捨てると風も笑い出す

みの虫がブランコをして世を嘆く

出雲市 岸 桂 子

限界を悟って齢と妥協する
目が早く覚めて続きの本開く
柔らかな言葉の刺がある一句
群集の一人一人がみな他人
一度だけ行つて見たいとハワイまで

出雲市 多久和 敬 子

わたくしの心きれいにして眠る
子や孫に恵まれながらこぼす愚痴
ストレスも風邪も追い出す鍋料理
戻り税ちよつとぜいたく許される
ポーナスも終り小さくする暮し

出雲市 伊 藤 玲 子

結ばれる若い二人に応援歌
転ぶなど目配る夫が居て生きる
新年を呼ぶ寺の鐘聴いている
正直な時計がくれたお元日
句読点うって若水汲んでます

出雲市 森 茂 美

どの家も秋色豊か柿すだれ
年金に小さな幸せ感じる日
久しぶり隣家の灯り点つて
ふるさとに消えていました吾が母校
バスの揺れまだ身に残る旅の宿

出雲市 富 田 蘭 水

信じてた女がウツで伏せつて
引き算で残った数が温くなる
クリスマスまたイベントか目をつむる
牛歩を恋人に決め八十路坂
パソコンが解らなくても生きられる

出雲市 小白金 房 子

ご神殿の笛に額く感謝祭
箱膳を囲んだ頃の思いやり
身の内を晒す話も聞いて上げ
野晒の自転車が待つ雨の中
仏壇の花も四季あり詩がある

出雲市 石 倉 芙 佐 子

晴れた日は親子狸が出る出雲
寒かろにぼんぼこ狸宿はどこ
和尚さんをびつくりさせる豆狸
白酒にほろ酔い機嫌右大臣
はたん雪見ている内に眠くなる

雲南市 毛 利 幸

年の瀬が鈍な私を攻めたてる
せかせかとしている割に埒あかず
百薬の長が人生狂わせる
苛苛し円い心も角が立つ
いつの世も素敵な人に憧れる

島根県 伊藤 寿美

舞いながら胸に沈んでゆく手紙
まだ秋が居座る冬の出入り口
ふと亡夫かと思う木枯し戸を叩く
あの世でも喜寿の祝をしましたか
ババシャツもヒートテックも同じでしょ

島根県 持田 多輝子

天覧の名酒で寿ぐ新世紀

錦帯橋一世一代匠技

ソックスで老いのたるみ包んでる

島と島つなぐ吊り橋瀬戸のうず

叩かれた痛み人間とりもどす

倉敷市 撰 喜子

好きなことできる八十路に日の短か

今聞いたことを忘れる似た夫婦

側近の言いなりになる三代目

税金で無駄めし食わすいのお国

罰金を払い悪事を重ねてる

美作市 大石 あすなろ

Eメールあなたとキャッチボールする

深呼吸怒りをひとつ眠らせる

夕やけに明日の構図を組み立てる

発想の転換人の裏をかく

舟盛りの鯛が腹式呼吸する

美作市 福原 悦子

鍋底を磨いて女取り戻す
学歴に勝る世渡り汗光る
見栄張って財布の底を覗いてる
村興し終ると元の過疎の村
不況風小さな鯛と年を越す

真庭市 国米 きくゑ

誘惑した友川柳の花咲かす

ささやかな年金ねらう誘惑魔

転ばぬよう杖プレゼント敬老日

降り注ぐ太陽雪の伯耆富士

杖片手牛歩で登る八十の坂

真庭市 福嶋 智恵子

あつという間に寒椿咲く師走

ともすれば愚痴ばかり出る年の暮

ルミナリエ今の平和が有り難い

誘われて四国霊場遍路旅

巡拝の観音様に笑みもらう

竹原市 石原 淑子

冬空へ嬉々と赤い実紅く映え

ひたむきに生きる背中をみせておく

オレオレの電話も独り暇潰し

病む嫁とケイタイ絆つよくする

ポツポツと世話焼き役に徹し切る

竹原市 岩 本 笑 子

東かがわ市 原 賢

忙しく生きてて年を忘れてる
春を待つ畑よ夫のはつらつと
無農薬野菜と話しています
初春はあけぼの和服姿とすれ違い
人が人思うと空が明け染める

竹原市 時 広 一 路

自画像は少し希望も入れて描く
時計また見てる待合室の椅子
平均寿命越えたと膝も知ったらし
ボールペン私の心書き留める
齢の順変えて哀しい南無阿弥陀仏

美祿市 安平次 弘 道

神様も知らない星が増えている
長生きをすれば出費が多くなり
コーヒーが苦い私の負けらしい
口ごもっているから言えぬさようなら
点滅をしたは星座か母星か

東かがわ市 清 川 玲 子

老人会の誘いに歳を自覚する
温泉行きばかりがふえる予定表
嫁に来た島の岬で里を恋う
鶏足とケーキを前にイブごっこ
変わればえしないおせちも里の味

嘘のない空があるから生きられる
印相を変えて明日へ翔んでみる
嬰兒に裏も表もない笑顔
生き下手が笑顔ひとつを持ち歩く
踏み出した一步が杖と動きだす

東かがわ市 川 崎 ひかり

うかうかとかかりましたわネズミ取り
年金があるから無事に越せる年
来る来ない幾度も電車見送った
空海の教えを辿る遍路杖
金持ちの本音ペラペラ言う総理

東かがわ市 伊 勢 八重子

はっこりと湯たんぽ眠気連れてくる
散り敷いた枯葉の私語を聞く師走
伝統が消える師走の風物詩
紅葉を背負う山家に柿すだれ
上げられず貰うと困る風邪の菌

松山市 宮 尾 みのり

自己主張せねば街から弾かれる
雲隠れしたい日もある影法師
ケータイをいじつてないと間が持てず
多機能へ私はオンとオフで済み
手抜きするコツも覚えてする介護

松山市 高橋 宏 臣

スパイスをふってふられて生きている
も一人の僕が背を押す背をなでる

丸い輪になれずお遊戯踊りだす

喝采もなくて序の口取り終える

前例をみじん切りして吹くラッパ

大洲市 中 居 善 信

七十二これから恋をするつもり

上品な将棋を指して負けている

雲は流れて人が産まれる人が死ぬ

古希過ぎてブレーキばかり踏んでいる

入れ歯外した顔は誰にも見せられぬ

西予市 黒 田 茂 代

せつかちの心はいつも忙しい

夜更しは平気早起きは苦手

ローンまた一つ増やした着物展

テロ多発旅行は国内に限る

温泉はぬるめゆつくり寛げる

高知市 小 川 て る み

乗り越える壁に手順がいるらしい

嫋やかな女でいたい白昼夢

ときめきが賞味期限を遅らせる

紅葉がいつに庭を秋にする

はくほくの芋がウインクして困る

高知県 小 澤 幸 泉

あとは沈黙息子と父のながい夜
それほどに思わぬ子らのよき寝顔

ばんやりとネオンが光る秋の宵

お役目も楽し旅情の秋に酔い

不器用に生きてる夫をいとおしみ

第34回全日本川柳大会(2010年鳥取大会)協賛 第9回 春はくろほこ川柳大会

日 時 4月5日(日) 10時開場
会 場 新日本海新聞社中部本社ホール
(☎0858-26-8300)
(JR山陰線「倉吉駅」徒歩15分)
宿 題 (欠席投句拝辞) 各題2句 締切11時30分
「丘」 河内 天笑 選 (堺)
「除く」 天根 夢草 選 (茨 木)
「手引き」 小島 蘭幸 選 (竹 原)
「リーダー」 池 森子 選 (富田林)
「にがい」 山岡富美子 選 (河内長野)
「囲む」 矢倉 五月 選 (堺)
「砂」 後藤美恵子 選 (米 子)
表彰 新日本海新聞社賞(最優秀作品・優秀作品)
川柳塔社 常任理事 河内 月子 選
なりすな記念賞(総合上位3人)秀句賞(各題3句)
2,000円(粗品・特集号呈)弁当券500円
懇親会2,500円(当日受付16時20分終了予定)
お問い合わせ 鈴木公弘(0857-84-2886
〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4
宿泊日のご相談に応じます
主催 くろほこ川柳会(共催)川柳サークル21
後援 新日本海新聞社 青谷福祉会

川柳塔のぞみ 2月句会

日 時 2月24日(火) 13時
宿 題 (各2句) 銀座区民会館(地下鉄東銀座3番出口)
「選ぶ」 伊藤三六 選
「楽器」 尾藤一泉 選
「自由吟」 1句 播本 充子 選
「スボーツ一切」 1句 播本 充子 選
欠席投句 2月21日必着 播本 充子 宛
〒193 八王子市散田町2-31-3
0832

川柳塔の

川柳讃歌

(50)

木津川 計

びしょ濡れで帰り着いたら雨が止み

林 昭三

待てば海路の日和あり、慌てる鯉は針を呑む。昔の人は鷹揚で、果報を寝て待つゆとの持ち主ばかりだった。

だからびしょ濡れで帰ろうとはせず、雨の止むのをじっと待った。「本降りになって出てゆく雨やどり」の古川柳は、待ったあじくのびしょ濡れだが、現代人の昭三さんはいち故、待たずに帰って針を呑んだ体なのだ。ケータイに時間を奪われ、支配された私たちである。時間を待たせる、そんなゆとり時代はもう来ないのであろうか。

許す気になればお酒がほしくなり

川 端 一 歩

「お酒」とは男は言わない。さすれば生真面目に見える一歩さんも、なかなかの食わせ者で、詰問する奥さんか、あるいは女人Xもあまりに平謝りな従順さにはだされ、ここに

で堪忍してやろうと気を許したのだ。

なにしろどちらの女性もお酒好き。微醺を帯びた風情の艶めかしさである。「もう怒ってへんさかいあんたも飲みなはれ」。一歩さん、そんなひとを裏切ってはいけません。

九割は妻に反省して終り

江 見 清

見清さんはいけません。失礼ながら糟糠の奥さんに、反省が九割とは何事ですか。新国劇の「王将」で関根八段を倒したものの、勝負に勝つても将棋の道を忘れていたと坂田三吉は反省、弟子をみんな断って自分を磨こうとするのだ。妻の小春が言う。「わては貧乏になれます。あんたがその氣やつたら、わてなんばでも貧乏しまっせ。あんたがそれで仕合せやつたら、わても一緒に仕合わせです」。反省はかくありがたい。

今日は居た居たと宅配便の人

古 今 堂 蕉 子

蕉子さん、久しぶりの傑作である。多分ご自身の日常であろう。宅配便泣かせの、いつも不在の忙しい毎日。どなたの句だったか、しかもうる覚え、「先生で女史で女傑で家に居す」を地で行く蕉子さんである。

「奥さんはどういう方ですか？」のアンケートに答えた先代の渋谷天外は「いつも家にいます」と。漢字の国の嫁さんは、読んで字

の如く、いつも家から離れることがなかった。そんなアホな、で家内でなく家外で活動する戦後第一世代が蕉子さんだったのだ。

その時に誰の名呼ぶか思案中

伊 達 郁 夫

その時とはいつの時であろう。郁夫さんもけしからん男の一人だ。先代のやはり天外は脳溢血の昏睡を女人の呼び声で目覚めようとして答えた。「芳子か?」「ちがいます」「菊江か?」「ちがいます」「梅千代か?」「ちがう、わてだんがな」「なんや、お前か」まで七人、呼んでいた奥さんは呆れた。

郁夫さんもそれを案じているのである。それにしても川柳塔には艶福家がいるなあ。

運のある手相と言われ握りしめ

吉 村 一 風

類句の多い題材、ではあるが、一風さんの氣持ちが伝わる。なにごかおかしと言つて「成功を教える易者止に立ち」があろう。「わたくしを占う人も貧乏そう」なのだから、占いの一切は信用できないと心得た方がよい。が、人間は風にそよぐ葦である。何かに縋りたい。だから種々の占いが生まれた。不安と混沌の時代にはやるのは、宗教と心理学と占いである。さればこそ僕は念ずる。皆さん、今年がどうかいい年でありますように。

(「上方芸能」誌発行人)

自選集

仁部 四郎

一浪の正月社説読んでいる
二ん月も社説は読まぬ女学生
日向ぼこ社説にカタカナ多すぎる
愛国の誠社説を読みくらべ
宇宙船各社の社説積んでいる

林 瑞枝

青春譜に描き残したい戦の絵
前向きに生きよと諭すちちの塔
望郷の映画戦時の嘘を吐く
早春のハートを若草彩に変え
海鳴りもあれば故郷の子守り唄

前 たもつ

生活の音どっさり立てて二人住み
尿検査コップ長寿と書いてある
お互いの名前忘れて立ち話
年金がけなるがられる時代生き
欲捨てて生きる太郎のよい笑顔

宮口 笛生

正月の準備せわしい妻である
ストーブを二台焚いている寒さ
御近所へあげる大根の太さかな
数の子にタラゴマメうちのおせち
鍋にする白菜ネギがよく太り

三宅 保州

私の電池を抜いたのは誰だ
格好の標的になる有頂天
最大の敵はマンネリズムである
旧姓で呼ばれ一氣に盛り上がる
クラス会行けない人もあるのです

宮西 弥生

万葉の山ひらがなに舞う小雪
寒いから温い言葉であたためよう
花びらの雫も冬へ一直線
門限も掬も過去は光ってた
未来図は伏せて夢だけ追いかける

森下 愛論

善人のつもりで一人の枠に入り
うたかたの花とねぎらう古いひとり
だんまりでダルマに似たるひとり住む
残り火を大事に守りひとり生き
銀杏のばらばら落ちる連帯感

八十田 洞庵

ふる里の枯葉と別れ尾灯去る
家を出た時のせりふが追つてくる
無我夢中通過地点を生きている
中庸に生きて無欲の師を慕う
おこづかいそつとくれるよ肩を揉む

両 川 洋 々

温暖化地球に保険掛けておけ
札束の賄賂レシートくれますか
権力もサイフも妻が握つとる
腕組みを解いてゴミ出す日だ急げ
離農した日から土踏まずが疼く

阿 萬 萬 的

句主の顔うかべてつくるミニ句集
おだてられ年甲斐もなく無理をする
物好きもいいかげんにと妻の愚痴
年明けて私も数えで九十三年
年金でどうにか後期高齢者

板 尾 岳 人

母一人愛し続けた憎い父
赤トンボ貴方の指に止まりたや
初恋の白い風吹く如月の
湯に浸り夫婦で話す性の事
五十年偕老同穴まだ夫婦

奥 田 みつ子

通学の声にぎやかに無事祈る
ささやきをワインの赤にとじこめる
あれも縁これも縁みな一つの輪
遠い人みな美しくなつかしい
言いたいな最期にみんなありがとう

河 井 庸 佑

もう一度チャンスをやると元氣付け
限界を知って急がぬ老いの道
成り行きに流れ自分を見失う
アルバムをめくり旅情を懐かしむ
回り道無駄でなかった生きる道

川 上 大 輪

幸せは先着五名限りです
天日干しすれば私も味が出る
独り言だったらうまく喋れるが
楽しいことがいっぱい背伸びしてみよう
おにぎりの中が一番住みやすい

木 村 あきら

せせらぎに春の訪れフキのトウ
寒に耐え凛々しく咲いた寒紅梅
綿帽子貰い温くぬく六地藏
年の功老母の火加減水加減
空晴れて一際映えるサヌキ不二

小島蘭幸

イエスカノーか比翼の句碑の前に立つ
古い男でいいではないかなあ雲よ
完璧は嫌い私は詩人です
うつらうつらと毒舌の中にいる
蜘蛛一匹私の句碑の中に棲む

小西雄々

如月の二六事件まだ自問
鉢の中はほえむ花はみな仲間
愛という響きにはすみ編みいそぐ
肩がこる腰が痛むと駄馬の鬱
喪服着るときに集まるお付き合い

斉藤 磊

りんごを語る農高生にある未来
百歳の瞳に百の物語り
だとしても白にこだわるカリフラワー
農の道探り続けて来た鋤だ
ふるさとの山がタクトをとる津軽

塩満 敏

今年こそ鶴彬忌つくりたい
今年こそ杖なしで歩きたい
妻の庭花でいっぱい飾りたい
広辞苑第六版買って川柳しています
櫛の歯が欠けるに似たり友が逝く

新家完司

地味ですがこれでも咲いているつもり
出がらしの茶を飲まされる酔っぱらい
高くつくアメリカという用心棒
歩かねば家に帰れぬ散歩道
側溝に落ちたモグラとなりにつけり

恒松町紅

外は雨閑を生かして筆洗う
甘辛の両方いけて老いの喉
老いた脳思い出ばかり浮かばせる
老いの鋤畑の野菜出来がいい
いい気分昔の唄を口ずさむ

津守柳伸

身から出た錆も理由をつけたがる
迷子札転ばぬ先の杖だろう
マイペースくずせぬ母の笑い皺
マイ箸をおもむろに出す緋縮緬
カボチャほこほこ果てし無い道だ

遠山可住

定年を器用貧乏で迎えられる
冗談の一つが愛をこじらせる
無器用な愛をつらぬく父の汗
夏の汗たっぷり還る秋の出来
孤独との闘い名士がひとり逝く

都倉求芽

三寒四温なんて経済には合わぬ
不況でも元気に泣いている演歌
梅の香へ向けて僕の息風の息
そこそこに自分のことはする夫婦
春を呼ぶごとく飛行機雲一直線

土橋螢

昭和史を遠くに年が改まる
潔ぎよく生きる男のど真ん中
きみ思い明日をおもい年惜しむ
天地人愛を沈めてゆくドラマ
法名をもらって釈迦の弟子になる

中原諷人

応診の風ひゅーひゅーと雪のなか
漸くに冬を抜けでる天地人
にぎやか笑いたそうに花芽吹く
旧い鍵そう容易には手放せず
痛むほど頭腦いじめて片田舎

西出楓楽

七十路自分探しはもうやめる
よく笑うお方にもらう柿の種
びっくり水自分にさして立ち直る
あつあつのスーブの距離にいて孤独
虚勢張るうしろ姿が見苦しい

温故知新

野村 初甫

二児連れて赤いマフラーまだ似合い
母はもう財布を探す年になり
相談に来て相談をされて去に

浜田久米雄

駅長を一人残した春の汽車
退屈の午後へ牡丹がくずれたり
麦の青寒さを越してきた青さ

橋本 緑雨

上かん屋顔をも見ずに酒を注ぎ
転業と移転位牌にすまぬなり
恩人になれず金庫の番をする

服部十九平

親切な女医が病気を長引かせ
火葬場へつづくさくらの並木道
ソプラノで怒りアルトで愚痴を云い

— 合同句集「私達」 —

昭和三二年発行 選者麻生路郎



小島蘭幸選

香南市 桑名孝雄

日の丸が目印うちの三ヶ日

暑さにはやき寒さに泣いている勝手

儲け話一喝吼えて切る電話

毒舌の友が三人いてくれる

Uターン勝ったまけたは聞くでない

鬱の字が笑って書けるから達者

神戸市 早川孝子

サンタさん今年退職いたします

沈黙を守る女に出会いたい

年賀状いつもの文字が笑ってる

老後より今が大事と旅支度

ルミナリエ幸せですか問いかける

スーッ着て大人の顔になってきた

今治市 渡邊伊津志

睦まじく相手を立てている和み

救われる言葉信じている読経

生きている今日が一番頑張れる

聴聞に極まるという仏道

綺語妄語深く傷つくのは自分

念力によつて疑問を解く浄土

岐阜市 平野あずま

鏡との門答続くナルシスト

陰徳を神様しかと見てくれる

十年は歳をとらないバスポート

胎の子が耳傾けている第九

良き昔を語るベンチの日向ぼこ

予報士が美人でミスも許される

横浜市 川島良子

移りゆく季節絵筆が記憶する

勝因は輝くキミの笑顔だろう

色褪せた頭脳へ喝を入れ直す

六十歳からの受験もまた楽し

円高還元期待ほどではないセール

ほんのりと光が見えて年暮れる

美作市 小林 妻子

極楽へ行く肩書は残しとく
正月の餅搗く音は孫達だ

要介護の覚悟はしてる八十路坂

身の丈のくらしで賀状書いている

牛が居た頃の農家が思われる

喪中ハガキ重なってくる風師走

紀の川市 宇野 幹子

猫じゃらし一人暮しがほろ苦い

ストーブを焚いて昭和をあためる

炎の河を渡る世間を敵にして

両眼が入ると饒舌なダルマ

泡沫の恋で低温火傷する

素足から春の序曲が流れ出す

紀の川市 吉村 幸

山映えて師走を抜ける策を練る

同期会あの日の顔で師を仰ぐ

温い声交し踏ん張る登山靴

稜線を辿れば父母の待つお墓

冬空にふと思いつく真知子巻き

世界遺産辿り紀州の良さ深め

和歌山市 福井 菜摘

ばら色の夢を結びに来たこの世

それぞれに花を咲かせて子等巣立ち

踊り出た舞台に敵が待つ輪廻

躓いた石に猪突を諭される

愛を盛る皿は素朴なほうがよい

もう少し歩いていたい花の道

田辺市 大峠 可動

夢ひとつふたつ初出の砂時計

運命線引き算ばかりの風の中

春雷やピカピカピカに屋根を拭き

理屈ぬき蟹の背中に波の音

病む影も時と流れているのです

まだ二月枕を抱いて火を抱いて

和歌山市 堀 富美子

寄せ植えの葉牡丹が待つお正月

わたくしの目線で生きて満ちている

辛抱しよし意地張る度に亡母の声

故郷の紅葉しのばす友の便

だんだんと歩幅が軽くなるシューズ

つましく生きた余生の笑い皺

紀の川市 辻内 次根

決起する時だと神の声がする

待つことに慣らされ耐えることに慣れ

水墨の紅葉のいろが見えてくる

生姜湯飲んで今夜は早く寝る

加齢臭と違ってしまう首の皺

サザエさん一家の名前なら言える

高知市 松尾 憲子

倉吉市 酒井 美美子

姿勢良く生きて何故だか肩が凝る

大食いのツケが今頃膝に来る

手抜きだと言われています またおでん

気は強いけど弱者だと思っている

二世には庶民の痛みわかるまい

松江市 相見 柳歩

雲の中君の笑顔に包まれる

ジャングルの中で君との縁を知る

学びますあの世で困らないように

身の丈にあった暮らしはつまらない

手をつなぐ優しくギター弾くように

松江市 松浦 登志子

今朝もまた昨日と同じ落葉はく

十二月シクラメンから誘われる

契約を切られコンビニワンカップ

アメリカのくしゃみでお菜ひとつ減り

朝夕に鏡の私鼓舞してる

米子市 吉田 陽子

カレンダーくれる会社がまだあった

スーパーで買えばおせちも無駄がない

間違いは私家族のマスゲーム

後悔も和解もあった酒の席

葬式の帰り迷子の靴捜す

有難い説教なのに居眠りが

石けんでは汚れの落ちぬ世の中だ

誤解とけ涼しい風が吹いて来た

ポックリと行く道ないか考える

辛くてもプラス思考に切り替える

雲南市 武島 ちよえ

日に一度声かけ合って両隣

寄せ植えの中にも強いのが目立つ

教育を先ずは親からしたいもの

節ぶしに油の切れた音を聞く

アンケート亡夫の名前でまだ届く

鳥取県 西谷 悦子

走るほど空の青さはついてこぬ

障子張るわたしの黄ばみどうとろう

無農薬やさしい青虫茹で上がり

喜怒哀楽ころろはほんと忙しい

深くには考えぬ幸せもある

鳥取市 近藤 秋星

貧富の差なく新年は来てくれる

餅つきをした日もホームおはぎです

大福でも買って食おうぜ正月は

うちの猫新幹線に乗って来た

産婦人科以外の科にはみな行った

鳥取県 岡村孝明

おもちゃ箱開けると子らの夢が見え

順風へ拗ねる者いてままならぬ

夕日背に妻の伴走ありがとう

一ときの怠惰を悔やむ日暮れどき

傘寿入り仲間の顔の指を折る

竹原市 國實 力

よろこびが続く生きていてよかった

気配りにヨッコラシヨツとついで行く

天国で2DKは無理だろな

したたかに生きた寄り道回り道

お望みのとおりにかぬ笑い皺

竹原市 若年幸子

日帰りのわたし待ってるおでん鍋

四人兄弟雑草のごと奔放に

窓ガラス磨くわたしの住むお城

暮参り済ませ冬至の陽がぬくい

柚子の香に今宵女をみがく幸

府中市 馬場利子

思い出を残した旅路冬に入る

丹精の寒菊仏間で和ませる

洗濯の乾いたひと日ほっとする

陽だまりに冷えた心が癒される

ひらめきへ決断つける彩を選ぶ

府中市 藤岡ヒデコ

何事も明日へ持ち越さないつもり

木枯しの吹く日に外へ出なくとも

つまずいた話他人事ではないぞ

きつちりと三度の飯は欠かさない

安心の暮らし下さい総理どの

府中市 岩本雅代

友人と会えばさりと出る自慢

ゆうゆうと十八番を披露する

給付金だけが遠くで光ってる

初雪だ今日はめでたい酒を呑む

成り行きに任すしかない運不運

池田市 上山堅坊

失礼な話へ知らん振りがいい

予報外れ納得をする豆知識

あと十年僕の貴重な持ち時間

よい川柳作る女性に憧れる

老い先は長しプランを練り直す

富田林市 古田千華

アイラブユーほんとに普通に言えますか

美辞盛られ舞っております絵馬の丑

私の思いの丈を盛る絵皿

青空がいつぱい見える日の狭間

花剪った鉢に残る手の温み

豊中市 谷川 勇治

吹田市 二宮 栄子

穴掘って椿の赤を埋めました
千歳飴神さん好きになった孫
選挙近いいろいろ飛ばすシャボン玉
そこそこに生きたと思う三等星
白絵具目立ちませんが僕は僕

八尾市 赤木 妙子

弾丸を潜った兄の説く重味
飲む塗る貼るいつでも来いと葉箱
汗かかぬ金が起こした大恐慌
湯加減を誰も聞かなくなつて久し
ありがとうと言いつつ茄子の根っこ引く

八尾市 田邊 浩三

アメリカの風邪タミフルも受け付けず
深酒をベッドで叱る母白寿
空気より時間選んだマイホーム
打ち取ったゴキブリ急に走り出す
美しく枯れましたねと言われたい

枚方市 二宮 紫鳳

明日香路を歩く二人にもみじ舞う
野仏に心が和む古都ウォーク
大和路はロマンを秘めて秋日和
年賀状年に一度の人となり
壺坂寺夫婦の絆確かめる

糠床に亡母の年期が生きている
里の陽をいっぱい浴びたみかん来る
見栄を張るまだまだ女捨て切れず
年一二度枕持参の友が来る
主役の座孫にうばわれうれしい日

吹田市 早泉 早人

おもうほど他人は僕を見ていない
目覚しはドアに新聞落ちる音
饒舌な悪友が居て楽できる
音無しの構えて酒を飲んでいる
ストレスに負けない胃腸持っている

三田市 福田 好文

過去の栄光ちらりちらりとひけらかす
先生と呼ばれて照れる芋畑
ペロペロバー電話で孫をあやす妻
寒いけど春を伴う冬が好き
冬最中ギヤルがおへそを仕舞わない

河内長野市 針生 和代

髪染めて若さに軸を置いた古希
ゆつたりと月と入った露天風呂
小春日和猫とゆつたりする昼寝
孫四人うれしい痛みくる財布
愛情を配り続けて逝った母

大阪市 尾崎 ゆめ

本能のおもむくままに切手貼る
弱点をカバーしている座りだこ
片思いですがゼロには戻れない
幸せをつかみそこねた髪をとく
新年がきつと味方をしてくれる

大阪市 吉田 富美

土佐からの柚の酢とどくほんまもん
洗濯物干して見上げる事が好き
ああ嬉し猫三匹と遊ぶ刻
ふるさとはだんだん遠くなる孤独
テキパキと働きました日向ぼこ

大阪市 太田 としお

大不況かえってふえる酒の量
大不況やっぱりええな公務員
大不況待合室も空いている
大不況だけど年玉減らせない
大不況世直しをするいいチャンス

大阪府 神野 千恵子

雨の日に豆秋の句とお茶にする
携帯が前頭葉を驚掴み
パーチャルの中で命が軽くなる
丑年と言われ納得する粘り
スローライフ馬から牛へ乗り換える

和歌山県 森下 よりこ

笑顔にもいろいろ騙されないように
せつかが見るに見かねてする過保護
仕合せの欠片集めて生きる糧
電車乗り継いで私のもみじ狩り
紀見峠あたりでいつも冬に会う

和歌山市 根田 よしこ

この不況ボーナス出たか子に聞けず
向きになりサントは来ると五年生
化粧より先ずは笑顔と鏡言う
いもうとを妬む自分が恥ずかしい
好物は白いごはんと孫が言う

紀の川市 北山 絹子

愛犬と絆結んでいる平和
妥協癖ついて夫婦の和が出来る
計らずも今日は夫が米を研ぐ
夕陽百選足を運んで雨となる
杉花粉天狗の鼻も折っている

岩出市 村中 悦男

入居者の秘密を屋根は語らない
同窓会病氣自慢をするように
甲高い声で子どもら呼ぶ未来
宅急便二人で開く娘の心
反対と言ってしまった意地がある

昭島市 野口 忠

不況風店のシャッター開けられぬ

オバマ氏の視野は三百六十度

独り身になってスキップなぜか出る

退院の朝は化粧の乗りがいい

個展では自画像までが礼を言う

栃木市 岡野 すみれ

欲しかった椅子にとつぷり首相の座

苦労した時代はそれでいい時代

これからは予想もつかぬ世に生きる

生真面目に生きて常識まだ足らず

栄えないはずです駅も道もない

札幌市 小沢 淳

ごはんだよ叫んだ頃の懐かしさ

されど辞書これほど世話になろうとは

渋柿を嚙んで吐いてる情けなさ

拍手などはなからいらぬ能舞台

嘘ばかりついて本音が出て来ない

シドニー 三谷 たん吉

政界のあわれな末路二世三世

政治屋の家系見離せ国のため

五七五指折るオレを睨む猫

励ましてみたい気もする官僚テロ

怒り越え夢さ残す両党主

唐津市 岩崎 實

肩たたく友不意に来て去つていく

川柳塔大阪からの嫁貰う

総選挙ねじれぬように心して

暗がりもわが家の中は動けます

唐津市 吉富 節子

リストラの波に流され砂の上

頑固夫要所要所にいる至福

これぐらい何でもないが医者通い

おしゃべりもリハビリだよと古い二人

唐津市 北村 松風

御供する携帯と子機風呂トイレ

時時は補聴器はずす別世界

雪国の厳冬知らず八十路すぎ

終焉は桜のように散る願望

福岡県 林 さだき

主義主張身体がついてこなくなり

酒タバコ止めあれからは趣味を持つ

ライトアップされて眠れぬマリア像

譲られた席に戸惑う老けた僕

香南市 近森 功

ばたつくな俺には俺の椅子がある

二度来ない旅だ寄り道回り道

何迷う終着駅は見えたのに

万歩計手押車で遠出する

阿波市 三浦 千津子

手探りの曲がりくねった道続く
物価高騰また描きなおす老後の絵
ガソリンの値下げに少し遠出する
精一ばい明るく見せて行く見舞い

大洲市 花岡 順子

千の窓から千のロマンがこぼれ出す
日曜日妻が笑っている平和
うっかりと鼠に鈴を付けている
辞書を読む目から鱗が落ちてくる

宇部市 高山 清子

身のほどを知らぬ男の勇み足
横文字と新語の海に老いおぼれ
喪中ハガキ癖字の賀状もう見れぬ
除夜の鐘今年も独り聞く八十路

竹原市 六田 半徳

何一つ出来ない人の理想論
免許証返して今は徒歩に慣れ
遅咲きの山茶花見事ありがとう
研究の成果世界で四氏笑む

出雲市 川島 和歌子

青畳香りもほのか結納日
ぶつぶつと愚痴をこぼして寝てしまふ
刈り終えて今日一日の仕舞風呂
仲間割れどっちも大事員になる

松江市 山根 邦代

土付きの大根里の味がする
リストラが誰に回るか不況風
ポーナスは孫の笑顔で良しとする
美容室美人になって靴弾む

雲南市 渡部 好榮

さつと去る夢は何にも残さずに
人間のうやむやロボットどう見てる
一芸があつて檻から出たお猿
原点を見つめなおしている案山子

雲南市 菅田 かつ子

茶柱の今朝へ期待を掛けており
思い出の中でちよつぱり恋の文字
年月をただひたすらに足の裏
物忘れそれも得意と逃げておき

雲南市 福岡 博利

休肝日とれよと天から声がする
待合室赤ちゃん本気で泣いている
原点をあやふやにして永田町
もの思い階段おりてからにしろ

安来市 原 煩悩尼

老い毫れを骨身に知った旅の果て
酒の味知らぬから生きているのかも
事故米へ荒れるがままの半^{ハン}蕎^ゴ麦^{マク}よ
禁酒禁煙僕には縁のない話

いい気分朝一番の茶柱で

糸口が掴めぬままに日が暮れる

鯨糸母の指紋がついたまま

たどたと書いた曾孫の賀状抱く

正月がそこまで来たと風が吹く

波に乗り他国の塵が流れつく

三世代波風たてぬ技がいる

異常気象天から罰を受けている

夫人院息子一家に助けられ

歩けまず話が出来る神の加護

退院の祝いカニすきカニ雑炊

お見舞のお返し終りよく眠る

丸まると大根太りメタボ消す

古写真掃除の手まで休ませて

歳末に財布の口もつい開ける

千両の実も赤くなり小鳥呼ぶ

すさむ世を漫画で心温める

ほのぼのと夢みた老後遠くなり

学歴より生きた証の知恵袋

罰金を払う人達皆若い

米子市 猪 森 スミエ

米子市 見 山 温 子

米子市 小 塩 智加恵

倉吉市 藤 井 美津恵

倉吉市 前 田 喜美子

地理地名高校野球見て覚え

手酌酒それが平和の一人酒

狂い咲きいや違います寒ざくら

長寿国政府高齢軽視策

あいさつが笑顔でできる今日元気

木の葉舞う秋も別れのあいさつを

あいさつも役のおかげでうまくなる

川柳で元気ネットの和ができる

渡り鳥安全地帯知っている

未練など何もない顔生きている

ピアノ音悲喜交々に揺れて鳴る

八十路坂女らしさも意地で生き

干柿も季節の色を添えている

亡き父母の事を思える歳になる

日頃から感謝の言葉でてこない

貧しさへ耐えてもエコに力入れ

何度目かつつかえ棒に添え木する

自画像はいつも目尻を下けている

自信持ち選んだ道の闇くぐる

十牛図床へ迎えて意を新た

境港市 中 井 虎 尾

鳥取県 飯 野 菖 子

鳥取県 岩 崎 和 子

鳥取県 橋 谷 静 江

鳥取市 大 前 安 子

鳥取県 田口清帆

もの言わぬ何より怖い妻の笑み
読めない字達筆だねとほめて聞き
飽きたころ一句出てくる会議室
意見言え言つてやつたらにらまれた

鳥取県 岡本幸枝

リハビリに心も和む和紙を折る
ピリオドはもつと試してからにする
入院でまずは禁煙大成功
闘病に嵌った夫を離さない

鳥取市 山口千代子

家計簿を締めるたんびに違う数
年金者ポータスの声聞くだけか
睦まじくゆつたり歩く老夫婦
お酌なら美人がよいと夫が言う

鳥取県 大塚美代子

そつと来て紅葉を散らす里の鳥
欲に目がくらみ掴んだバラの棘
ジーパンの乙女が解く襟け糸
点と線つないで語る日記帖

鳥取県 斉尾くにこ

いい知らせアポを取らずにやつてくる
感情を抜いて晒して苦言言う
イベントの花束愛を押しつける
回覧板の革命ポストからポスト

鳥取県 加賀田志延

散紅葉踏んで私も絵と染まる
蜜取られ働き蜂が進めない
パソコンの打ち初め指も餅太り
着ぶくれてかゆい背中が遠くある

鳥取市 谷岡清子

胸のドアたたく亡夫かあいたいよ
几帳面丸く掃除か年だもの
明日こそ明日こそと夢つないでる
脳味噌の替わりほしいと傘寿坂

鳥取市 津村律子

また揺らぐ誤読失言総理の座
国の威信が守られるのか水面下
遼君の活躍まさに一億円
ゴムタイプそれになさいと鏡言う

鳥取市 坂本智子

笑顔満つ空気の中にいる私
にっこりと卒寿迎えた母の顔
溪谷の水もわたしも蛇行して
工芸に秘めた学歴にじみ出る

北名古屋市 片岡文男

ブッシュ殿盛者必衰みせて去る
西武勝て明日一番の特売日
義歯ゆるみ顎も瘦せたな正直だ
バカ笑いさせるテレビよ何狙う

横浜市 巖 田 かず枝

納骨の空はすかっと青かった
右手より大事な母が天国へ
本心は小さな声で言うことに
世界中貧乏神が旗を振る

横浜市 長 島 亜希子

脳検査ほめられ旅行申し込む
老人ばかりの医院で僕も待っている
値上げにも慣れてしまつて怒らない
高級スーパ―僕の町から退散だ

静岡市 渡 辺 芳 子

同じ空気吸つて生きてる猫がいる
痛いのは生きてる証拠と言われても
片付けがスローになつて日が暮れる
命がけ恋愛なしで八十歳

日立市 加 藤 権 悟

燃え上がる初日に夢を賭けるもの
初売りの琴も華やぐ春の海
一年を充電して三ヶ日
許すたび大きくなつて行く器

藤沢市 加 藤 スズコ

絶叫のもみじの余韻帰る道
友の愚痴中に自慢がチラホラと
三世代生きて静かな時刻む
作る喜び待つクリスマスアハウス

東京都 高 岡 弥 生

ボーナスが消える大学受験料
コンタクト年に勝てぬか眼の疲れ
段々と人数減るよ家族旅行
年賀状差し出す名前私だけ

東京都 井 上 つよし

現役でなくて良かった大不況
幸運は外角低目手が出ない
閑話休題まだ続いている長電話
鮪減つても秋刀魚鰯があれば良い

佐渡市 高 野 不 二

賀状出す先もだんだん減つて来る
支持率ががたんと落ちた読み違い
息子には言いたい言葉がまんする
産地偽装値段も味もわからない

札幌市 三 浦 強 一

お湯割りが旨いビデオは小津映画
時々輪の外に出て伸びをする
週刊誌変つた頃に行くパンク
おばかではとても出来ないおばかキャラ

橋本市 石 田 隆 彦

五七五想い巡らせ老い防ぐ
夫婦げんか二幕目には無言劇
衣食住今は足りてる幸を知る
初詣で株の値上りまず祈願

裁判員私にだつて裁けます

明石市 梶谷和郎

とりあえず跳んで空気も読むバツタ

客が居ぬ店へアンヨが躊躇する

今日はきょう明日は目覚めて考へる

加西市 金川宣子

無口ではストレス溜まる熟女連

妊婦服着ればメタボが隠れ住む

物音に安眠できぬ夫の留守

ああ言えばこう言う二人テンボよく

加東市 黒崎美紗子

丹精の庭木いつしかなじむ家

親切に助つ人に來た耕運機

良性と医者笑顔の有難い

紅葉の見頃よい旅楽しんだ

加東市 安達厚

原因はお年ですなと言う診断

発熱中しばし來るなと言う電話

卒寿まで何の取り柄もないけれど

二人でも洗面トイレ譲り合う

加東市 岩本美緒子

晴れ喜び秋の散策若返る

山連々紅葉に染む美事なり

アデランスのグレー頼もう春に添え

そこそこに歩き真つ直ぐ來た誇り

三日月のロマン見上げる冬の空

三木市 広瀬房江

大関へ外国人が四股をふむ

倅せになつて欲しいネ披露宴

暖かな絆を結ぶのし袋

三木市 山口久子

相合傘したい相手はもう逝つて

寒椿雪はまだかと咲きそびれ

子宝に恵まれくらす傘寿です

還暦を迎えし息子趣味いかす

兵庫県 永井かほる

友も忘れ私もほつとした気持

干柿をつるすの鳥が見ています

この味も夏だけのもの楽しんで

秋きらい十で別れた父おもう

兵庫県 日野岡和之

年かさね幸せかさね光る古い

厳し世をほとけに学ぶ思いやり

花は友鳥のさえずりBGM

四苦八苦身に潜めてぞ心意気

三田市 辻開子

ひとときは介護離れて足のばす

幸せは幸せ思う人に来る

時が経ち小言が増える夫の介護

ご近所は留守を頼めるお付き合ひ

神戸市 木村 忠義

温暖化雲走るのがのろくなる
どのように変わろうと月美しい
彼の笑顔はひまわりが咲いたよう
晩酌を今も心の糧とする

神戸市 山崎 武彦

白い地図自分さがしの鈴鳴らし
すすいと浮世を渡るアメンボウ
サクサクと命聴こえる種袋
満天の星が嫁ぐ娘見届ける

西宮市 石野 照代

派手じゃなく地味でもなくて菊一輪
葉を落し無口になった冬木立
若づくりシルバーシートに座らない
童心に返りツリーをかざります

尼崎市 河津 正治

琴線に触れる笑顔に情がある
ほろほろの服でも心意地を持ち
一言が友の善意を呼び覚まし
二枚目の舌はジョーカーと秘めておく

尼崎市 小池 幸子

代用食恨みはないが諸嫌いな
猫ひざに日向に憩う老いの楽
ウインドー横目でチラリ見る猫背
会う時は何時も礼服従兄弟達

尼崎市 藤岡 りこ

ふと見つけ亡父の蔵書にメモがある
児に絵本読んでもらってママ眠る
牛の歩み前に進めば良しとする
闘牛ショー見たその日だけ肉嫌いな

和歌山市 坂部 かずみ

ハワイよりもシニア体操行ってます
お正月を一杯詰めるレジ袋
めでたさを賀状の中に張りつけて
縦になり横になりして見るテレビ

海南市 小谷 小雪

予定外出費もうれし子の帰省
良いたより空気を読んでやってくる
赤毛のアン読むたび心熱くなる
思い切り眉間のしわを伸ばす歌

生駒市 小西 稔

若者の町も今では声静か
温暖化季節疑う庭の花
偽表示疑う度に新事実
はんやりと月見て思うふるさとを

京都市 藤井 文代

反論者の中でひっそり立泳ぎ
ひっそり咲く花に目がいく無欲な日
空気読むのは得意ですあまのじやく
骨休めの積もりがいつか熱くなる

京都府 清水英旺

残り一枚慙愧の年のカレンダー
コンサートホールの外は冬枯れて
祇王寺の庭に悲恋の散りもみじ
コンサートの余韻心にまとう帰路

奈良市 辻内 げんえい

暖房に火鉢使うもエコライフ
株価欄見なくてしばし過ごせそう
休刊日ゆつくりできる朝支度
十一月早や電飾の競い合い

奈良市 阿部 茶々

湯豆腐を祖父とわけっこ箱火鉢
つまみ食い火鉢の上のお豆さん
方角にこだわりましたも引つ越し
初代からこだわりの味かんとどき

奈良市 乾 春雄

明日もまた仕事の鬼となる軒
誇り捨て見栄捨て橋を渡りきる
美人薄命長寿社会で死語となる
一枚ずつ厚着になって冬が来る

奈良市 尾畑 なを江

断ち切った未練の端をまたほぐし
近頃は塩おむすびの母恋し
鉛筆を尖らせるとヤル気出る
リストラは先ず国会の議員から

奈良市 岩本浩二

飲み仲間猪口持つ指で誘い合う
この国の未来が読めぬ怖しさ
牛歩でも一歩一歩を踏み締める
時としてリズム崩すが二重奏

奈良市 矢野良一

紅葉狩雨もまた良し渡月橋
古代遺跡割を食うのも地元民
貧乏癖つい食べ過ぎるバイキング
この暮れは大から小に注連飾り

宝塚市 丸山孔一

愛犬と共に詣でる父母の墓
里山に守られ静か父母の墓
華やかに生きて静かに死ねる夢
木枯らしが古いの深さを検索す

八尾市 前田紀雄

無口です裁判員に向いてます
不景気で小遣規制迫られる
無為徒食貸農園で小半日
バラ撒きを出来ない私種を蒔く

高槻市 片山かずお

出来合いで少し心の痛む膳
身のほどを忘れ美人の湯に浸る
ダイエット続けていたらこの思い
独り居に人恋しさの募る夜

箕面市 寺井柳童

金融危機学習効果出てません
学力テストばかりお笑いは日本一
足だけを見ている勝負検査役
深海のクラゲに日の目ノーベル賞

茨木市 島田誠一

若い夢食って大麻が伸びてくる
我が町も若者の声とんとせず
争わず玉虫色で手打ちする
食材はまずは疑うくせがつき

篠山市 谷田多美子

迷いつつ生きて静かに除夜の鐘
九十まで生きると決めて早く起き
早起きに力もらって霜をふむ
名水で大根を煮る一人鍋

門真市 矢阪英雄

歯を鍛え八十路を越える心意気
円周の曲面に沿い春の芽が
はね飛んで春の威勢をかくし持つ
秘めている力を見せず腕かくす

泉佐野市 稲葉洋

トラブルのことも肴に同期会
歌は世につれても僕は戦後調
怪我をして悪いもして角がとれ
すまないねほんとは鬼の役は儂

泉大津市 助川和美

よく売れるお嫁に行かぬ演歌歌手
よく飲んでよく寝る父のお正月
どっこいしょ今日一日の無事感謝
年賀状書くたび思うきれいな字

吹田市 中村十八娘

出合いより別れが多し紅葉散る
ひたすらに愛一つ抱き寒椿
病床に笑顔だけしか贈れない
絶る瞳に負けて小犬が家の子に

豊橋市 藤田千休

干涸びた恋を悔んで黄昏れる
上品な会が苦手な福笑い
みえみえの世辞も嬉しい病み上り
凧に手ぐすねをひくおでん鍋

岸和田市 中岡香代

起きてても寝ているようなうちの夫
便利さの代わりいくつも添加物
地球から火星へ移転近未来
傲慢な心おさめて日々祈る

藤井寺市 俣野登志子

七難を色の白さに助けられ
何よりも身体の軽い日が嬉しい
影法師帰りたくない素振りする
留守番の気楽さカップ麺にする

藤井寺市 伊藤 アヤ子

解決の目処もないまま年暮れる
勿体無いけど整理する時が来て
葉を落とし春の芽ぶきを温める
きつと来る明日を信じて年を越す

藤井寺市 増井 ヨシ枝

ありがとに介護する手も温くなる
薔薇の字は花弁散るようすぐ忘れ
俯けば母そっくりと子が笑う
ヨン様も株で大損したそう

藤井寺市 吉田 喜代子

春蘭さん笑顔温い手ありがとう
(十月水眠)
地図にない紅葉の古寺教えられ
焼き芋が懐にある暖かさ
歩こう会輪も出来世間広くなる

藤井寺市 津田 シルク

妹になぐさめられた姉五歳
輪切りした頭ケラケラ脳笑う
主義主張あつて独身通し切り
青虫の残り物です箸休め

八尾市 松葉君 江

ユーモアで介護地獄を乗りきろう
空気澄む終のすみかは古里に
政治家を動かす主婦の生の声
趣味ざんまい母の晩年バラ色に

八尾市 寺川 はじむ

真ん丸い愛が転がる古希の坂
傷だらけ忍んで愛を待つ地球
姦しさ突如無口の蟹料理
こきつかわれてほつとする間に古希迎え

八尾市 笹倉 ひろし

なんとなく今日は自分を捨てたい日
転動を重ねた笑顔そつがない
不況波に翻弄される臨時工
おねだりはケータイ通す孫の知恵

八尾市 中島 春江

ボリーナスに胸はずみしは過去のこと
ひとり居の臥してクシャミの大きさ
老いの智恵たびたび借りて年末に
明日ありと信じ消灯眠りつく

羽曳野市 宇都宮 ちづる

いつの日かわくわくできる総選挙
勝ち負けをクラス分けた規制緩和
年の暮れやと歩いた孫を愛で
本物が好きな一歳また壊す

羽曳野市 松本 静子

雪囲いされし牡丹の姿よし
落葉もまた素敵なのです青い空
雪だるま作って見よう故郷で
今日もまた不況不況で日が暮れる

羽曳野市 仲谷 真一

リベートにまったく縁のない私
終戦のあのくやしさは忘れまい
仇討ちに穂先のぶるわけがない
ドラム缶石油の値下げ待っている

羽曳野市 森 下一知

年金を仕事嫌いの子が食らう
副作用止める薬が増えました
身の丈に合った肴の縄のれん
不景気が作り笑いをこしらえる

河内長野市 木太久 正一

平均寿命越えて転倒氣を付ける
冬炬燵母の白髪を抜いた日も
愛犬と午前七時に散歩する
宅配のおせちゆっくりお正月

河内長野市 黒岩 靖博

お早ようといつも笑顔で通る美女
愛妻の手綱さばきで生きている
恋心うんと濃い目の紅を引く
伊達男あちらこちらと忠実なこと

河内長野市 内海 綾乃

ワンマン亭主病氣になって夫婦なり
坂道で氣を付けの声嬉しいな
渡し舟水や櫓の音氣持よい
受験済むまで行けぬとばやく冬休み

寝屋川市 岡本 勲

なりゆきにまかせてたどりつくあの世
なりゆきで歩けば見えてくるものがある
一日のケジメをつける屋台酒
昭和史の鉄道唱歌が耳にある

寝屋川市 小嶋 みさと

アメリカの風邪が世界に蔓延す
不況風空へ飛ばして生き延びる
反省はするが次には生かされず
ハイチーズカメラの前は別の顔

枚方市 坂本 ミヨノ

知恵袋まめに開いて健康で
父母も逝く招かないでね山の宿
色白の化粧美人で脳活性
両隣に田舎土産を比較され

枚方市 河田 洋子

勉強に夢抱いた頃華でした
遠い日の火種今でも抱いたまま
口だけが達者で方向音痴です
あは言って人の笑いを買っている

枚方市 小川 良吉

牛馬も人もあの世で仲よしに
鶏口も牛後も通じぬ世界危機
政界に平成の竜馬民は待つ
瓶の蓋あけて男と妻認め

豊中市 藤沢 長一

低金利タンス貯金でひと休み

ミニツリー心和やか老暮し

鉢植の梅は忘れず春告げる

寒い夜は赤提灯が身をせめる

豊中市 松尾 美智代

パソコンがぐずり出したよ年賀状

何もかも買い替え時はいつ時に

人間が一番ガタピシしています

私も夫も買い替え出来ません

豊中市 荒巻 夢

チエーンソー響き老木姿消す

冠雪の便り届いて団子汁

意のままに動かぬ手足ごころうさん

飼い主とペットが同じ顔に見え

豊中市 源田 啓生

ちよつと貸せその一言が恐い酒

バラ一本贈らぬ妻と添いとげる

ボクと言う女と飲んで旨くない

賀状書く手が泳いでる酒のせい

堺市 近藤 治子

空回りした説得も後で効き

バス旅行メタボ同士が相席に

弾みです結婚したの別れたの

幸せの鍵はまじめに生きること

堺市 大隅 克博

月旅行地球の石を持って行く

軸足を外さず遊ぶ難しさ

悪かったたつた五文字が声に出ぬ

芸術というからみてたピカソの絵

堺市 羽田野 洋介

チョイ悪のささやき耳に心地良く

どちらかがバランスをとる老いふたり

まあだまだ初志貫徹へ道半ば

遊んでる金がどこかで笑ってる

堺市 阪井 智之

本に添えそつと渡したラブレター

寄りそつて風呂から帰る若夫婦

好きだった焼酎提げて父の墓

美人出て文句の出鼻くじかれる

大阪府 吉川 弘泰

レンジから飛び出すパンとモカの香と

指で丸判りましたと頬を染め

まともには書けない私の履歴かな

巣立つ日の近い息子と酒を酌み

大阪府 畑中 節子

洗われて白菜の尻日向ほこ

おでん鍋湯気の向こうの美人顔

お互に愚痴る事あり秋夜長

うたた寝の夢たぐり寄す掘炬燵

朝一の新聞の音眼を覚ます

大阪府 若月 祐作

デカンショの元気を貰う三味の音

冬苦手言うても夏にまた負ける

二十五回忌最後の墓参と石磨く(父)

大阪府 坂口 公子

上天気じつとしてゐるわけがない

人目など更々自分流と言う作法

山積にしているがせんでもいい仕事

五体満足感謝感謝でめくる日々

大阪府 寺井 弘子

行列の店も不景気もろに浴び

紅引いて女の歳を若くする

椅子世代座りだこない長い足

妥協する度ごと丸くなる背中

大阪府 安藤 なつこ

牛井の四杯目タダと言われても

牛乳が余る息子の転勤で

マウス持ち時代の端をつかんでる

健康法そんなにやったら死にますよ

大阪府 小栢 こずえ

日々着替孫のおしゃれに刺激され

悩みごと話せば気持軽くなり

食べ切れぬ料理を取ってバイキング

小春日に大根布団も干してある

食前にあの世と繋ぐ朝の経

御飯粒きれいに食べるもみじの手

夢で遇う仏はいつもすましてる

親子して癖もおんなじ笑わせる

大阪府 平井 露芳

今日からは陛下も後期の仲間入り

予報士でないのに天気オレに聞く

買う破目になるから試食遠慮する

万歩計お供に今日も医者通い

大阪府 高木 道子

大根が主役になつて湯気に居る

真つ直ぐに生されば世間狭くする

微笑みの国の地獄や旅の果て

長生きの五臓六腑の匙加減

大阪府 橋村 容子

素朴でも昭和の誇りもっている

歳ふえてまた一糶背が縮む

つるし柿足るほど食べて夢と知る

検査パス家で喜寿のお正月

大阪府 西川 冷子

祥瑞寺睨み据えてる鬼瓦

千体仏守る湖族の浮御堂

目が合うて絆深まる仔犬ちゃん

カピ少しけれど食べ度い吊し柿

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

大 空

恋ごころ

岐阜提灯の下で背広を脱がされる

襟垢をためて恋でもあるまいが

船は行く行く恋人の顔小さし

拝まれて女は泊まる気にもなり

ふられたと見へておつりもやらぬなり

親類に十九の春がひとりいる

逢ひたかった逢ひたかったと裾を踏み

恋しさがあありあり浮いた洗面器

写真だけやうやう呉れただけのこと

若い燕切符をかうて渡される

猫いらす外にりんきの手を知らず

ままごとのそのさいちゅうに保護願

転げ込んで行けば女は疑られ

友達をみんなだまして南に居

逢ふだけでよかったころの菜種咲き

のろけることを姉も妹も

二人きりしつぺいなどをして遊び

真似したりしているうちに少し惚れ

半襟をもらったまんまそのまんま

まちばけをさされてもまだ信じたし

うれしさと怖しさととの指環にて

そのころの女はいふがままになり

あの眼の中で男討死

愛染帖

新家 完司 選

履きものを脱いであがつて買わされる
京都府 高島 啓子

(評) 履き物を脱いでしまうと、「ひやかし
だけ」でサラリと逃げにくい。買う気がなけ
れば、そのような店や催し会場は敬遠しよう。

右利きは時計回りに腹撫でる
堺市 奥 時雄

(評) 確かに右回りに撫でている。左利きは
左回りに撫でるのだろうか。「何の役にも立た
ぬ蕩番」と、一笑に附すには惜しい大発見！

じつと聞く相手を好きになるために
西宮市 片山 忠

(評) 相手の性格を知るためには「言いつ
て聞かなければならぬ」。人が「聞いている
とだんだん腹が立つてくる」。人も稀にいる。

竹林を歩けばしばし善人
西脇市 七反田順子

(評) 真つ直ぐに伸びた青竹の間を抜けて
くる清々しい風。爽やかな空間を散策してい
ると、まるで「竹林の七賢人」になった気分。

百歳まで生きると貯金足りませぬ
豊中市 松尾美智代

(評) 子供の世話になりたくないの、年金
と貯金を取り崩して完全看護の施設に入る。
「金の切れ目が命の切れ目」とは心細い限り。

おい旦那おいと呼ぶな名前ある
和歌山市 田中 みね

貯金したら石鹸くれたのは昔
海南市 三宅 保州

袖擦り合うほど窮屈な指定席
鳥取市 福西 茶子

骨太になると信じてニボシ噛む
西宮市 藤本 直

蜘蛛の糸怨みのように絡みつく
西宮市 牧瀬富喜子

オバチャンをオバハンと言ひ叱られた
夕暮れの国の歩みが鈍すぎる
弘前市 高瀬 霜石

咲ききって一年草の根の浅さ
お金持ちのおきな声は出しませぬ
堺市 志田 千代

正直な左手嘘つきな右手
若夫婦児が寝つくのを待っている
姫路市 古川 奮水

そのうちにきつと出てくる探しの
慰めに行つて同情受けてきた
鳥取市 斉尾くにこ

葱一本買つてうどんの鍋にする
我がためにハーフサイズのヴォージョー
家計簿の予算くるわす松葉蟹
福岡県 林 さだき

青春の下宿は消えて駐車場
自転車で回れるだけのテリトリ！

ポケットにどんぐり握り古稀となる
豊中市 水野 黒兎

(評) ドングリや貝殻やビー玉が宝物だった
少年期。こころのポケットはあの頃とまった
く変らず、懐かしいドングリが転がっている。

鼻ピアスあんたもすぐにおやじやで
堺市 矢倉 五月

(評) 破れたジーンズや鼻ピアスが許容さ
れるのは、せいぜい二十代まで。オヤジにな
つて無頼を気取つても、薄汚く貧乏臭いだけ。

優先席の前に立たないようにする
枚方市 海老池 洋

(評) 「席を譲ってほしいのか」と勘繰られ
るのは片腹痛い。座っている人に「どうしよ
う…」と気を揉ませるのも本不意。

悪口を言うこの口でパンを食う
松江市 川本 畔

(評) 口の本来の役目は食物を摂取すること。
だが、言葉という伝達手段を得てから、本来
の役目を超えて悪口や喧嘩に使用している。

三合の酒で治ったから浅傷
三田市 堀 正和

誰よりも自分だましている化粧
大阪市 森田 明子

ゴキブリも実は人間嫌い
札幌市 三浦 強一

ゴキブリから見れば人間殺虫魔
高槻市 乙倉 武史

ライバルも医者待ち合い室にいた
鳥取県 山下 節子

きやらきやらとカラビーマン大はしゃぎ
和歌山市 木本 朱夏

生きてるか問えば薄目をひらく影
茨木市 藤井 正雄

自己弁護しながら楽な道を踏む
和歌山県 森下よりこ

私の孤独を癒すのは仕事
堺市 村上 玄也

あった方がいいよね親の七光り
堺市 村上 玄也

沈黙の臓器が突如呻きます
堺市 村上 玄也

昨夜何食べたか記憶力テスト
芦屋市 黒田 能子

グルメです薪でご飯を炊いている
ATMわたしの後の長い列
八王子市 播本 充子

お行儀よく並ぶ献上のみかん
陰ながら祈るだなんて嘘ばかり

これが目に入らないかと持つシャネル
大阪市 古今堂蕉子

世渡りの術まるむしに問うてみる
大阪市 井丸 昌紀

気掛りな地球の未来子の未来
唐津市 市丸 晴翠

浪曲が好きで枯葉の匂いさせ
鳥取市 倉益 一瑤

戦退いて遊んで磨く心技体
吹田市 早泉 早人

捨てたゴミ宝であった物もある
八尾市 生嶋ますみ

税金の行き先聞いて腹が立つ
藤井寺市 鈴木いさお

血の検査気になるガンマーGTP
休肝日食欲不振不眠症
紀の川市 宇野 幹子

のたうって生んだ一句をいとおしむ
ブランドで飾って背骨痒くなる
高槻市 富田 美義

添う愛も労働の愛もあり余生
人生の最初と終り無位無冠
東京都 岸野あやめ

おんな卒業箸でお皿を引き寄せて
百円の鉢も研いで使い込む
弘前市 櫻庭 順風

神の呼ぶ声に目覚めるICU
走るなと叫んでいます置換弁

電子カルテを主治医と共にのぞき込む
明日起きてから明日のこと考える
米子市 政岡日枝子

ずんぐりむつくりが威張るいもかぼちゃ
嫁がせて安堵残ったのは無口
西宮市 緒方美津子

八十だ矩を越えても構うまい
八十は想定外と言う孔子
香南市 桑名 孝雄

お地蔵様の前で赤ベコお辞儀する
親切心だったと思うことにする
大阪市 大川 桃花

新聞の折り目正してゴミに出す
松江市 三島 淞丘

失敗談笑い飛ばしてくれた妻
羽曳野市 吉村久仁雄

他人がする自慢話はつまらない
体重を乗せ新聞の束締める
大阪府 澤田 和重

東の間の城代家老妻の留守
堺市 羽田野洋介

抜きたてのチンゲン菜でもてなされ
生きること尊く見せる屋根の草
寝屋川市 籠島 恵子

岩出市 村中 悦男

居合真理子

司書さんの手首に今日も湿布薬

池田市 上嶋 幸雀
八つ当たりして大の字になる師走

堺市 加島 由一
家の近くばかりになった忘年会

和歌山市 喜田 准一
三次会妻へ言い訳考える

鳥取県 石谷美恵子
ちよつと無理したら逆立ちまだできる

神戸市 田中 章子
乾杯のウーロン茶にも慣れてきた

神戸市 山口 光久
まだ若い毎日髭が伸びている

藤井寺市 鴨谷瑠美子
カステラの甘さほどならときめこう

枚方市 丹後屋 肇
賽銭の百円玉に賭けている

大阪市 谷口 義
定位置で食べねばならぬ朝ごはん

鳥取市 岸本 宏章
叱られたことのない子がすぐキレる

シドニー 坂上のり子
散髪ですつきり若くなつた猫

大和郡山市 坊農 柳弘
呑みなはれ呑まにや本音が見えません

和歌山市 古久保和子
地球丸ごと包みませんかエコバック

八尾市 吉村 一風
肩書きで呼ばれびつくり古い顔

加東市 中上千代子
お見舞いに行くかどうかで採めている

奈良市 岩本 浩一
旅先で拾った恋は捨ててくる

大阪市 板東 倫子
おでん屋で三人だけの忘年会

大阪市 奥村 五月
神様は何時飲まれるか樽は空

寝屋川市 森 茜
午後九時のスタミナはゼロ寝てしまふ

鳥取県 西谷 悦子
辞書開くこの楽しさよ今更に

京都市 坪井 孝一
判らぬままただ立ち止まる抽象画

豊中市 谷川 勇治
柿の皮長く剥く妻八十五

大阪市 渡部さと美
昭和一枚不況の波に慣れている

唐津市 樋口 輝夫
左利きの男が悩む改札機

大阪府 米澤 俣子
勿体ないの山が押し入れ占拠する

弘前市 富士 慕情
千羽鶴きっかり千羽吊つてある

寝屋川市 平松かすみ
昼食はおにぎりひとつ夫留守

和泉市 横山 捷也
お互いに八つ当たりする物忘れ

京都市 三宅 満子
骨折の古傷なだめ冬過す

岸和田市 井伊 東吉
差別化の時代にもてる変わり者

枚方市 小林 わこ
心ない言葉一つで舞う枯葉

京都市 都倉 求芽
石畳冬がきらいなうすい影

海南市 堂上 泰女
エーデルワイスのチャイム清しい冬学舎

堺市 和田つづや
きんぴらのスパイスほどの意地通す

大阪市 神夏磯典子
新しいうちは大事にするグラス

浜松市 岡田 史郎
風邪ごときに内科耳鼻科と走らされ

豊中市 荒巻 夢
ドラマ見て流す涙の軽いこと

弘前市 相馬 銀波
赤札のチラシに緩む痩せ財布

岸和田市 雪本 珠子
憧れの人もわたしもセピア色

大洲市 中居 善信
酔えばすぐ裸踊りがしなくなる

和歌山市 根田よしこ
がんばろう冥土この世の続きかも

河内長野市 村上 直樹
トラブルもまあまああと名幹事

藤井寺市 太田扶美代

まだ六十まだ六十という呪文

吹田市 穴吹 尚士

さつま芋にトラウマがある戦中派

鳥取市 吉田 弘子

伴走の夫時には邪魔になる

高知市 松尾 憲子

ディナーショー留守の夫は一人鍋

四條畷市 吉岡 修

ネクタイをとってスタイル決まらない

長岡京市 山田 葉子

髪ね仕事の顔になってゆく

米子市 白根 ふみ

ゴミの日のゴミをいそいそ捨てにゆく

黒石市 相馬 一花

お早うと妻には言ったことがない

和歌山市 福本 英子

心まで病んでないから頑張れる

神戸市 木村 忠義

ケタイ熱を学に向ければすこかろう

東大阪市 笠井 欣子

へそくりも夫のためとはげんでる

鳥取市 土橋はるお

惚けてない惚けないようにメモを取る

奈良県 渡辺 富子

ふるまい酒下げて吉報やつてくる

高槻市 佐甲 昭二

ちよつぴりと出した黒字で恩返し

豊中市 安藤寿美子

城南宮も一度源氏読みたくて

泉佐野市 稲葉 洋

舌打ちを一つ株式市況消す

箕面市 広島 巴子

御仏をしつくり拝む独り旅

大阪市 田浦 實

握り鉄母が使うと手に化ける

紀の川市 北山 絹子

腰掛ける程なく去った福の神

堺市 荻野 像山

老いてまだミニから伸びる足にどきつ

明石市 梶谷 和郎

影はまだ元気なようだ万歩計

鳥取県 佐伯 やえ

粗食になれてこの不景気も苦にならぬ

河内長野市 坂上 淳司

監督が居るのだからか蟻の列

松江市 安食 友子

修行僧にととてもと手と手を合わす

唐津市 山口 高明

貸し本で濫読心充たした日

東大阪市 北村 賢子

歳月を重ね別れは瞬く間

奈良市 矢野 良一

古い二人餃子ラーメン半分こ

東京都 清原 悦子

売り切れのバナナ予約をして帰る

高槻市 左右田泰雄

ケイタイが無いと不思議な顔される

鳥取県 大塚美代子

もう少し若けりや飛べた水溜まり

大阪市 松尾柳石子

お歳暮を送り安堵の昼下り

奈良市 尾畑なを江

お出掛けもスーパードばかりつままない

羽曳野市 永田 章司

若者の夢枯れさせる格差の世

富田林市 中井 アキ

年上の私が肩を貸す介護

河内長野市 針生 和代

毎日が日曜なのに忙しい

鳥取市 中宇地秀四

膝枕しているような腕枕

篠山市 二階 幸子

話の腰折らないようにそつと輪に

羽曳野市 森下 一知

強弱の虫がハートに同居する

堺市 宮本かりん

冴えきった月へ泣き言さぐり捨て

唐津市 坂本 蜂朗

表には出さぬ晩学四苦八苦

弘前市 今 愁女

ゆらゆらと足場が揺らぐ日本丸

大阪市 太田としお

同人特集 風 百句

平成十五年～平成十九年
同人吟から 編集部

ひとり立てば風ふところに入りけり
風のまちなて薫風からと書くいのち

路 郎
薫 風

木枯しと四つに組んだ木守り柿
ランブ宿寝るほかはない風の音
念ずれば風が味方をしてくれる
木枯しの街で出会った山頭火
丹田に風を感じる時がある
目薬をさして明日の風を読む
たしなみは手櫛で済ます秋の風
逆風へ生年月日盾にする
くすり漬け止めると諭す風みどり
すれ違う人生にある風の道
男はいつも黙して風を読んでいる
木枯しに負けてはいないあばら骨

最上 和枝
中井 ゆき
大内 朝子
古久保和子
和田つづや
吉川 寿美
山本 半銭
倉益 一瑤
岡本 花匠
山本 玉恵
小島 蘭幸
徳田ひろこ

逆風が止むまで正座崩せない
風吠えて女の戦始まりぬ
来るものは来ると読んでの風まかせ
東風吹けば天神さんの梅まつり
定石は打たぬ男のつむじ風
春の風握りこぶしを開かせる
こぼれ種 風の指図にさからえぬ
そよ風へいい夢みてる葱坊主
向い風こんな所で亡父に遇う
ははの声たしかに聞いた風の盆
風が動いて真つ新な秋が来た
いい汗をかくといい風きつと吹く

北野 哲男
松原 寿子
木村富美子
源田八千代
高橋 宏臣
安芸田泰子
光井 玲子
近藤 佳子
中井 アキ
高橋 岳水
高田美代子
岸本 孝子

秋風に洗いざらしが心地よい
追風にまた判断が狂いだす
北風を斜めに今日も七千歩
生きること死ぬこと風の吹くままに
春風に酔って秘密がひとつ増え
自転車で一人占めする春の風
風風いふと振り返るひとりぼち
遥々と尋ねきたのに風ばかり
気紛れな風とワルツを舞う枯葉
南風にうっかり仮面はずされる
風に触れ風に語って風を知る
ムームーとアロハで風になる二人
お袋がそつと贈ってくれた風
風のように花のようにも生きたいな
美しいおじぎに和む秋の風
秋風にはっと息つく仁王様
風除けのある二番手が性に合う
秋の風連れて誤解を解きに行く
風は秋 心の鬼と寺まいり
台風接近夫婦喧嘩もそこそこ
台風が逸れた故郷から来たリング

蘭田 獏杳
大谷 篤子
高杉 千歩
早川 遡行
鶴田 遠野
牛尾 緑良
伊藤 寿美
石倉美佐子
福士 慕情
植田 一京
楠 昭子
播本 充子
坂上 淳司
西口いわゑ
福田 登美
初山 隆盛
志田 千代
居谷真理子
小白金房子
近藤 豊子
秋元 てる

秋風に涙阪神最終戦
風に伏し地に伏しやがて夢に伏し
春風にしゃきしゃきしだす古時計
風去って手持ち無沙汰の鯉のぼり
昭和史に風と生きてる兵の墓
帽子飛ばすビルの谷間のつむじ風
順風満帆運動靴に履きかえる
一枚を脱げば四月の風に会う
闇の中 男は風の匂い嗅ぐ
ふる里の風にいろはを教えられ
風の向きふつと出逢いを予感する
白刃の風が芒を薙ぎ倒す
たつぷりと花粉まぶした春の風
ルミナリエ景気を煽る街の風
あんななんか嫌い向かい風に叫ぶ
吹く風に初冬感じているうなじ
丸い背な風に押されてパン屋まで
耳打ちの話を風が膨らます
愛読書から川風が吹いてくる
いたずらな風がアデランスを揺する
逆風へ一途に回る風車

安藤寿美子
安平次弘道
海老池 洋
太田扶美代
大橋 鐘造
川原 章久
川端 一步
清原 悦子
久保田千代
倉益 一瑤
栗田 久子
黒田 茂代
黒田 能子
桑田ゆきの
古今堂蕉子
小泉ひさ乃
佐藤 治代
園山多賀子
高島 啓子
高野 宵草
武本 碧

網渡り風がなくてはつまらない
 いい風が吹いてる白樺の下で
 チューリップ風と素直に握手する
 美観地区風しなやかに通り抜け
 粘り腰また寒風が南下する
 花の種風に吹かれて親離れ
 言い訳はせずに明日の風を待つ
 四つ角を曲がると風が新しい
 勢いのある方へ向く風見鶏
 割り切れぬ心を急かす風の音
 頭から乾く目刺しへ浜の風
 千羽鶴風を掴んだ退院日
 ループタイ余生の軽い風の中
 間違ひ電話風がつないでいるらしい
 ミサイルが来たかと思う竜巻だ
 名月が転がりそうな風が吹き
 奥歯ギリギリ風下に耐えている
 新天地夢見て綿毛風に乗る
 点になるまで見送っている風の中

土橋はるお
 中居 善信
 中岡 妙
 長浜 美籠
 永原 昌鼓
 夏目 一粹
 原 賢
 水野 黒兎
 宮尾みのり
 宮本かりん
 森 茜
 山岡富美子
 山本 蛙城
 山本 義子
 中村 金祥
 神保坊太郎
 鈴木 公弘
 伊勢八重子
 石谷美恵子

柊の花に触れるは風ばかり
 大砂丘画布いっぱいに風の詩
 三人が黙ると急に風が出る
 千の風母の鈴の音かもしれぬ
 四季の風知らぬ花屋のカスミ草
 春風に頬をゆるめた鬼瓦
 弁解をしない男と風の駅
 バトンタッチ我が家は若い風が吹く
 風が止み途方にくれる風見鶏
 風下は見ようとしない風見鶏
 決断の出来ぬ柳は風に揺れ
 風九月いのちが丸い実を結ぶ
 ライバルも今逆風の中に立つ
 立つ位置をずらしただけの風の向き
 幸せと思つた途端すきま風
 もしかして台風の目は私かも
 絵の中で確かに風の音がする
 縄のれんぐれば軽い風になる
 コスモスに真似て私も風まかせ

牧瀨富喜子
 松本よしえ
 門脇 晶子
 小川賀世子
 生嶋ますみ
 徳山みつこ
 谷口 義
 盛田 夢路
 佐甲 昭二
 寺川 弘一
 小寺 花峯
 吉田あずき
 三島 淞丘
 佐藤 治代
 田中 章子
 山本 益子
 森田 明子
 佐藤 古拙
 岩崎 玲子

なにわ柳壇今年の10秀

—20年12月20日朝日新聞発表— (太字は本社同人)

最優秀句

川柳塔社理事長 西出 楓案選

泥水を飲んだ人だな温かい

針生 和代

秀句

握りしめるこぶしを妻が解きほぐす

小西 明

子が出来て孫が生まれて妻は古い

鯉田 秀紀

雷鳴一閃この道進むことにする

岩佐ダン吉

玉の汗お乳を食べる赤ん坊

西村 武

平凡がいい春の花春に咲く

吉田あずき

スピードを落とせば見える小さな芽

松尾美智代

うんざりを畳み直してバネにする

真野 稔

汗じみた金しか知らぬ縄のれん

吉岡 修

みじめだと思ふ心にあるみじめ

井伊 東吉

最優秀句

番傘川柳本社幹事長 田中 新一選

生きてるぞ朝一番に洗う顔

中川 正子

秀句

触角は笑顔の方に向けている

森吉留里恵

老いたドアやさしいノックを拒めない

吉松隆太郎

煩惱が消え寂しさに攻められる

太田 昭

おかつぱの私がしゃがむ田舎道

斉藤ゆうこ

飢えた日は狂ったように蕎麦を食べ

吉田ひな子

蓮華見て老母見て蓮華見て帰る

山本 淑子

微力だが何葉だけはたんとある

松熊 克衛

友情の不变信じていたピエロ

石田かね子

この僕がなぜ僕なのか鏡見る
藤井満洲夫

(特集) 原稿募集

父を語る

六月号掲載の特集原稿を募ります。

亡父、義父、或は在世の父についての想い、エピソード、思い出等何でも結構です。同人の御応募をお待ちしています。

四百字詰め原稿用紙一枚半〜二枚(六百〜八百字)タイトルは別につけて下さい。

締切り 四月十五日 本社事務所宛

但し原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

あかつき川柳会 3月句会

日時 3月13日(金) 14時
場所 住まい情報センター(地下鉄天六3番出口)
兼題 「ランブ」「瞳」
「ふんぶん」「時事吟」

投句先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14

江島谷 勝弘

1月号虫食い川柳クイズ 解答

- | | | | | | | |
|-----------|---------|--------|---------|-----------|---------|--------|
| 2822 向日葵 | 1 眼鏡 | 2 刺身 | 3 蜘蛛 | 4 柳 | 5 無精髭 | 6 パチンコ |
| 2923 煙草 | 7 水 | 8 扇風機 | 9 初 暦 | 10 ハンドバッグ | 11 たこ焼 | |
| 1712 反抗期 | 12 胃袋 | 13 不機嫌 | 14 ピアノ | 15 鍋もの | 16 スタミナ | |
| 1813 夫婦喧嘩 | 19 パチンコ | 20 土筆 | 21 はしご酒 | 22 砂 | 23 利子 | |
| 3024 義歯 | 25 歯 | 26 砂 | 27 利子 | | | |
| 3125 土筆 | 26 砂 | 27 利子 | | | | |
| 3226 仁王 | 27 利子 | | | | | |
| 3327 涙 | | | | | | |

誹風柳多留一篇研究 42

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾

伊吹和男
清 博 美

312 ぐつぐつをしてくれおれと留守居いひ

山田 「ぐつぐつ」がはつきりしないが、留守居が踊り子あたりに、特別なサービスを強要している場面であろう。留守居は諸藩の江戸駐在の外交担当で、情報交換等の名目で度々会合した。しかしそれを名目にして、次第に遊興の場と化していった。川柳では、踊り子が専らその相手とされている。踊り子は文字通り踊りを職業とする者だが、実際のところは、

三三三せんもおとりもしらずげいしや也

安七礼2

三味線のかわりに枕二ツ出し

末三16

というようなものだったらしい。

こりやひざがおれるハやいと留守居いひ、

一九八

ぶくくをしてくれおれと浅黄いひ

末二25

山口 「ぐつぐつ」は煮物、肉汁などの意があると『俚言集覧』などにもあり、この場合、獣肉の鍋などを所望しているのではないかと。薩摩の侍などは犬の肉を食べるので有名であり、精力を付ける為に肉鍋の注文とも考えられる。相手は座敷へ来た踊り子であっても料理屋の者であってもいい。

しつほくの鍋ぶたおさへさつま拳

小栗 わからず。単に鍋物でも作ってくれの

意か。

清 未考。

313 何事かおやぶんかしこまつて居る

山田 親分は「③侠客、博徒の首領」(『日国』)で、いつもは横柄な振る舞いをするのに、その親分が「何事か」あったのか、「畏まつて居る」。「何事か」はこの措辞だけでは分からないが、特別な事情があったのであろう。

上下を着ておやぶんハこまつてる

天七85

伊吹 賛。珍しい景。

清 賛。普段はあぐらの親分が……。喧嘩の仲裁でもあろうか。

314 ぶつかけがよいと花姫いひかねる

増田 ぶつかけは、蕎麦やうどんのかけ。店屋物の蕎麦・うどんを取り寄せるのに、若い嫁はかけの方が好みなのだが、恥ずかしくてそれをいいかねている。

恥ずかしがる理由は、「ぶつかけ」という響きが下品だからか、あるいは食べるときの姿勢を思っただけか。女がかけを食べる姿勢は、手に持たずに畳の上に置いた器に向かって尻高にかかみこんで口を運ぶ、というものとさ

れていたようである。

ぐつとこゝんてぶつかけを姫ハ喰ひ

安二智2

しりを高クしてぶつかけむすめ喰ひ

安五礼2

姫人をもつてぶつかけといわしむる

安六正25

山口 賛。後は知らず新婚の嫁。

清 賛。

315 雨戸くるたびに甘干じやまに成

増田 朝晩の雨戸を繰るたびに、軒に吊した干し柿が邪魔になる。

山口 賛。他愛ないが面白い句。秋の深まりを感じさせる。

清 賛。

316 すり子木てこづくハやすい法事也

増田 親戚一同が集つて料理人を呼ぶような大法事にくらべて、播り粉木でこずいて自家製の餅を作り近所に配るだけといった安直な法事。法事などのまつりことは派手、というのも江戸の風潮であつたのであらう。それに対する一般庶民の実情。

いけ垣にふきんの白ひ法事過き 明四仁5
八朔のやうにならんたい、法事 三六39
かねかしも老人くわゝるい、法事

天五宝2

一日ハ塵に簾の大法事

ケイ二五上12

清 賛。

317 金んだゝをいふとまんちうさまたそよ

増田 金は坂田金時、まんじゅうは多田満仲。「金時よ、だだをこねると恐い満仲のジイ様が出てくるぞ」と、満仲の子の源頼光がいつている。頼光四天王の金時は、子供で仕官をしたが暴れ者で頼光を手こずらせた、というのが俗伝の通説らしい。威しに満仲を持ち出すのは、九頭の大毒蛇を退治したとか、言うことを聞かぬ暴れ者の実子(美女丸)を殺そうとしたとか、このほかにも鬼神のごときといった満仲の怪物伝説が多いようで、それらによるか。絵草紙などに「鬼の満仲」といったものがあつたのかも知れない。

まんじゅうと菓子のことを考えるべきかどうか。

子かいから居だけ坂田わやくもの

明四信3

大入道どの公時も手はださず 新五百上38

山口 賛。連想はあるかもしれないが、礎前半で足りると思う。

小栗 そいうことでしょうか、変な句ですね。

318 むそうさなものの八桶屋のぶん廻し

増田 ぶん回しはコンパス。桶屋がコンパスを使うのは底板やタガのマルを描くためだろうか。無造作とする手先の動作が分からない。たがの大きさを決めるのに丸い型で間に合わせているのであらうか。桶づくりにコンパスも必要なのであらうか。

チヨンと木を入れて桶屋もぶん廻し

九〇38

桶屋でハ朝飯前に底を入れ

一九38

山口 指物師や他の精密な細工をする職人と違って、桶屋の場合は大雑把に円を描き、後は組み立てる時の手作業で調整できるので、それを無造作といつたのではないか。職人の感で作業は進む。

小栗 右のようなことだらう。素人目には無造作に見えるが……。

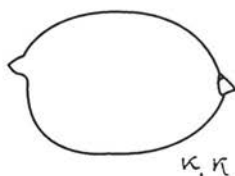
清 同。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

投句数 718句



「鍵」 高瀬霜石選

合鍵を返してからの軽い足
まだ熱いひみつへそつと鍵をする
金というマスターキーを持つている
どなたにも貴方だけよと渡す鍵
あたたかい鍵ならきつと開くはず
パスワード入れてたやすく知る機密
俺だよと泣かれて開けた鍵もある
鍵付きの日記に君を閉じ込める
鍵穴が淋しいポーズしているよ
行間に謎解く鍵が伏せてある
あのえくぼに心の鍵を壊された
鍵穴の向こうリストラないと言ふ
じくじたる思いが鍵の束にある
沈黙を守り続ける鍵の知恵
単身赴任やけに大きい鍵の音
女神呼ぶ小窓は鍵を掛けぬまま

和歌山市	武本 碧
鳥取県	齊尾くにこ
高槻市	片山かずお
富田林市	大橋 鐘造
橿原市	居谷真理子
京都市	高島 啓子
東京都	岸野あやめ
海南市	三宅 保州
鳥取市	倉益 一瑠
弘前市	高橋 岳水
四條畷市	吉岡 修
和歌山市	堀 富美子
河内長野市	山岡富美子
神戸市	山田婦美子
大阪市	田浦 實
弘前市	斉藤 菟

「鍵」 木本朱夏選

加藤周一逝つて知性の鍵が減り
直しても鍵が合わない六ヶ国
枢から鍵を差し出す創業者
キーマンという二番手の心地好さ
鍵握る男迷彩服着てる
切り札にマスターキーを隠し持つ
戸締まりは突つ支い棒の家でした
ドアチェーン性悪説の音がする
鍵開けて光源氏と逢う扉
鍵の場所じつと見ている猫がいた
鍵束の一本身元不明なの
へそくりも同居しているキークース
わたくしを立ちあがらせる鍵がない
じくじたる思いが鍵の束にある
玉手箱の鍵はわたしが持っている

羽曳野市	三好 専平
枚方市	丹後屋 肇
神戸市	伊勢田 穀
鳥取市	加藤 茶人
京都市	清水 英旺
八王子市	川名 洋子
三田市	北野 哲男
札幌市	三浦 強一
西宮市	亀岡 哲子
寝屋川市	森田 麗
八尾市	生嶋ますみ
富田林市	古田 千華
岸和田市	雪本 珠子
高槻市	佐甲 昭二
河内長野市	山岡富美子
藤井寺市	太田扶美代

ごめんねがキーワードだが口に出ず
わたくしを大事におもうかガッコ
だるまさんころんで胸の鍵開ける
鍵かけた部屋で積木が崩れてた
鍵だからそれなりの事はたします
へそくりも同居しているキーケース
夜の鍵わたしの今日が無事終る
鍵穴の向こう 蠢くものが居る
鍵かけた口がむずむずしてならぬ
どなたにも教えぬ僕のキーワード
二兆円金庫の鍵が見つからぬ
鍵の束あなたを開ける鍵が無い
鍵穴の向こうは鬼がたむろする
物価高がまんの鍵に付け変える
合理化の鍵口ポットに握られる
合鍵を持った男が頼りない
鍵穴が待っているのは春の風
鍵型の人差指をもてあます
一城の主となって鍵かける
鍵穴を覗き誤飲をくりかえす
今ならばまだ掌に鍵がある

秀 句

尼崎市	藤岡	りこ
米子市	白根	ふみ
鳥取市	山宮	愛恵
宇部市	平田	実男
西脇市	七反田	順子
岸和田市	雪本	珠子
芦屋市	黒田	能子
鳥根県	伊藤	寿美
羽曳野市	徳山	みつこ
枚方市	寺川	弘一
鳥取市	中村	金祥
岐阜市	平野	あすま
西宮市	山本	義子
大阪府	高木	道子
吹田市	大谷	篤子
弘前市	福士	慕情
八王子市	播本	充子
豊橋市	藤田	千休
尼崎市	春城	年代
寝屋川市	籠島	恵子
豊中市	谷川	勇治
大阪府	澤田	和重
箕面市	広島	巴子
八尾市	生嶋	ますみ

鍵カチツとひとり舞台のマドシナに
鍵はずしすっかり円くなった父
正倉院の鍵厳かに厳かに
ベランメエ長屋に鍵はついてねえ
建売りの十八坪にふえた鍵
母さんの家の鍵なら持っている
刀折れ矢は尽きたるに鍵は持ち
引継ぎの鍵を渡され墓の守り
鍵付きの日記に君を閉じ込める
あなたです血潮の鍵を開けたのは
開けたら閉めてね心が風邪引くわ
スベアキー貰ってダブルブッキング
合鍵が痛いところをついてくる
合鍵も頼も三分待て暫し
失った鍵の重みが今分かる
鍵無用島は晴天続きです
鍵かけて木枯しの世を生きる老い
鍵かけて少年 鱗磨いてる
口に鍵 健気に守る桜貝
鍵穴をすりりと青い好奇心
鍵穴を覗き誤飲をくりかえす

秀 句

西宮市	山本	義子
大阪府	畑中	節子
和歌山市	古久保	和子
香南市	桑名	孝雄
唐津市	仁部	四郎
大阪市	谷口	義
兵庫県	日野岡	和之
大阪市	山本	加お里
海南市	三宅	保州
宝塚市	丸山	孔一
大阪市	古今堂	蕉子
枚方市	小林	わこ
米子市	政岡	日枝子
豊橋市	藤田	千休
鳥取県	佐伯	やえ
大阪市	柴本	ばつは
大阪市	川久保	睦子
海南市	堂上	泰女
枚方市	海老池	洋
西予市	黒田	茂代
寝屋川市	籠島	恵子
豊中市	源田	啓生
箕面市	広島	巴子
美祿市	安平次	弘道

騒 ぐ

牛尾 緑良選



内定が取消しになり大騒ぎ
お静かに一喝食らう野次の席
朝青龍悪いとこだけ騒がれる
日溜まりの中で噂が騒がしい
歳末商戦家のポストも騒がしい
胸騒ぎ妻が突然しおらしい
トンビから鷹が生まれて騒がしい
他所の子を叱っただけで大騒ぎ
大騒ぎさせた財布がポケットに
紅一点混じり男が騒がしい
悪いことだけよく当たる胸騒ぎ
薬にも毒にもなつたお喋り会
騒ぐだけ騒いだ後の請求書
客席の騒ぎはいつも応援歌
騒いでも騒がなくても下がる株
幸せの真ん中に居て胸騒ぎ
国会の与党野党も騒ぐだけ
日本流雇用が消えて騒がしい
騒いだら転けて骨折する歳だ
老いたりいへど不正へ血が騒ぐ
チョッピリの給付金へと大騒ぎ
騒がしい人ではんとは淋しがり

ふみ 帆五 悦子 泰女 一壺 菜摘 葉杳 冥杳 幸雀 シマ子 とし子 銀波 弘風 章久 英子 東吉 照彦 次根 正和 淑子

反抗期多感な虫が騒ぎ出す
師走には貧乏神が寄ってくる
大声で騒ぐほどでもない話
読み間違ひ私がしても騒がない
娘が嫁ぎ胸騒ぎなどしなくなる
道端の騒ぎを覗く好奇心
どんちゃん騒ぎして悲しみを増やす
財産が絡むと騒ぎ出す絆
騒ぐなど言えば大きくなる騒ぎ
騒いだらこの逆境が越えられる
騒いでる間に風向きが変わる
失言がとんだ騒ぎになつてきた
お静かに折角鬼が寝たところ
お祭りに野仏の目も楽しそう
型どおり騒ぎ国会幕にする
佳
本当に駄目なら僕は騒がない
玄関を出て騒ぎ出す好奇心
リトマスの役目マスコミ先ず騒ぐ
子や孫に負けるかギターかき鳴らす
新しい旗へ雑音鳴り止まず
人
妻が騒ぐので謝ることにする
騒いだら負けや体験しています
地
したたかに飲んで騒いで以下余白
軸
ワッショイと私が真つ先に騒ぐ
坊農柳弘
朝子
典子
充子
霜石
四郎
小雪
忠
可住
蕉子
浜丘
茂代
アキ
幹子
洋介
弥生
扶美代
康子
蜂朗
憲子
みね
螢
碧

未 練

岡本 花匠選



未練などないないあんな根無し草
移り香が未練の糸をからませる
ふるりのテレビ未練がよみがえる
応援歌未練に気合い掛けたい
断ち切れぬ未練に枕乾かない
人生のどこにもあつた未練坂
反省はするが未練の無い子年
逝つた子をまだ思い出す五十年
縄のれんオンザロックで消す未練
ラストダンス靴がいよいよやして困る
自分史に未練の箇所は伏せておき
ひと押しが足らず他人の嫁になる
アルバムの憎い男を剥がせない
ちよつぷりの未練たんで袖の中
休耕田去年は此処も黄金波
自己批判未練の小石積むわたし
捨てきれぬ未練が葉指にまだ
まだ未練絡んで疼くくすり指
未練とや去つた男が夢にでる
妻や子を案じて手術台に乗る
通信簿用はないけど捨てられぬ
風ぐるま水子地蔵にあげてくる

のり子 孔一 節子 順風 キヨミ 輝夫 照彦 昌鼓 権悟 奈良子 裕之 茂代 小雪 猿杳 ばつは 洋 活恵 しみね 像山 古拙

ドラが鳴るあの娘へ未練解けぬまま
出て行った男の写真抱いて病む
今もなおあの娘の写真懷に
遮断機が降りて未練ぶっ切れ
定退の未練明日へと舵を向け
子の声が立ち去る母を引き戻す
未練なお断ち切れぬまま洗う髪
去り際の手の温もりにある未練
おくびにも出さず未練の梯子酒
今未練だしたら戻る元の鞘
バスボート旅の未練は捨てきれず
百までは生きているつもりで竹を踏む
清廉の背中に未練しがみつく
につこりと笑う遺影にある未練
さよならで切るに切れない紙テープ

佳

髪型を変えてきつぱり未練断ち
改築と決めて未練の出る古家
未練まだ燻っている退官日
0系車未練残して発車ベル
裏切りの空とは知らず旅に出る

人

まだ剪るに惜しい金賞取った菊

地

ヒーローになれない腕をさすつて

天

古日記ひければ未練零れ出る

軸

散るさくら人情せがむ花筏

三島松丘

孝明 岳水 末吉 弥生 俊子 あやめ 富子 賢子 靖鬼 登美代 順子 愁女 蜂朗 慕情 銀波

猫

中井 アキ選



駅長の猫より可愛いうちの猫
猫をだく女はいつも黒い服
勝ち組に拾われ虎になつた猫
サヨナラも同じボーズの招き猫
シャッターが閉まり悔しい招き猫
お静かで猫はいつでもマイペース
父と母ネコかすがいで仲が良い
年金を猫で声が狙つてる
きつかり両手を上げた招き猫

飼い主にそっくり猫もエゴイスト
猫の手もみんなお邪魔になる不況
そうだった迎えてくれる猫がいた
横着だ猫は尻っぽで返事する
猫にしか僕の気持は分からない
猫好きと知るのかのそりくる時間
猫のお産で今日は学校休みます
暴動を企てている猫の群れ
なにもかも見抜いてならしのねむり猫
猫までも私の色になりました
倒産にとり残された招き猫
お隣に飼われています家の猫
時たまの子より一緒に暮らす猫

典子 千華 充子 哲男 登美代 玲子 秀四 千代子 幸子 准一 川洋子 勝視 美紗子 陽子 沁子 愁女 古拙 週行 (矢)五月

猫舌にゆつくり乗せる京料理
年金の暮らし猫にも知らせとく
想い出の中一匹の猫が棲む
残飯は決して食べない猫であり
妻が飼う猫にかあるくあしらわれ
お隣の猫にもきがねしています
ブランドに群れるシャム猫ベルシャ猫
ヴィトンには猫で声が詰まってる
ベルシャ猫貴婦人と言う毛並

軸

坂 裕之

鐘造 可住 勇治 千休 次根 朝子 富子 美ね 美義 美龍 くにこ ばっは 幸雀 菜摘 洋

初歩教室

題一豆

鈴木公弘

豆ということばは①大豆・小豆・黒豆・枝豆など食用の豆②豆まきなど行事の豆③豆腐・納豆など加工食品に転じた豆④豆たぬき・豆しほり・豆鉄砲・豆炭など比喩の豆ほか、様々な形状をして生活の中に入り込んでいます。

そこでまず、豆が生きた使い方をされているかについて点検してみます。

〓動く川柳・動かない川柳〓

【説明の道具に終わっている豆】

お多福豆皮にもかかる消費税

克博

商品を包んでいるだけのお多福豆の皮。これに消費税とは、まったくもってけしからん話です。しかし、お多福豆だけではありませんね。

ゴマ豆腐は高野の里のおやつです

昇

高野山の豆腐は著名。しかし、その日常性を説いただけに終わってしまいました。

凍てついた畑もやがて豆の里

清

季節は移ろいますので当然かと思えます。

黒豆がさやを飛び出す良い日和

道子

ここでは弾けることが大切ですので、黒豆に限定する必要はないです。

ふつくらと味しみているぶどう豆

美智代

ぶどう豆でなくとも、味が染みてふつくら感のある煮豆にはなりません。

豆狸でもパパに負けないメタボ腹

浩二

豆狸とはご子息のことですね。

福豆が美人見つけて幸逢る

ヒロ

心地よい言葉に魅入られたようですが、むしろ豆の真相に迫るべきでしょう。

惚れました君が煮込んだ豆が好き

柳歩

好きなのは煮込んだ豆だと述べたあたりにおかしみがあります。

ほっこりとお豆が煮えた嵐の夜

千華

なぜ嵐の夜でしょうか。

故郷の小包便是豆の餅

智加恵

お豆の課題だったから故郷からの小包を豆餅にしたという感じがします。

それぞれに用いられている豆がその種類(用法)でなくともよい場合、その句は「動く」または「流れる」と言います。川柳に限らず文芸の多くは対象凝視の感性を大切にします。何を小道具に使っても成立してしまっ

句は、まだ推敲の道程ですから、投句すべきではないでしょう。じっくり煮込んで、絶品に仕上げてから食べてもらうべきだと思います。

その点、次に掲げる句は比較的、焦点が絞られており、作者と作品との位置関係が理解しやすい句になっています。

【背景がはつきりしている豆】

枝豆があれば機嫌の良いお酒

像山

熱燗と湯豆腐あれば冬寒し

光弘

原年をとり節分の豆多すぎる

周子

添年とつて節分の豆多すぎる
高くても国産品の黒豆を

みち代

買い替えは豆自動車に決めている

堅坊

原一泊は豆本などで丁度よし

宏造

添一泊に豆本ほどが丁度よい

タカ子

原 小豆粥あくびよう払い新年に

タカ子

添 あずき粥病魔払って新年へ

タカ子

原 谷間の家豆粒のよう寄り合って

りこ

添 谷に寄り合う豆粒のような家

りこ

〓説明句〓

豆まきのそうじするのはうちの大

弥生

この句は、うちの犬は豆まき後の掃除をしてくれますよという話です。書いてある通りに、十七音が一体となって解説してくれています。しかも、「・・・するのは・・・」だと

述べて、上・中の合計十音字と下五音字とがⅡ（イコール）だとも言っています。たいへん平明な作りになっていますので響きは悪くないですが、間違ひなく状況説明の句ですから注意してほしいところです。

Ⅱし止めの句Ⅱ

枝豆は今日も脇役青々し

すみれ

この句の問題点は、サ行変格活用をする動詞を誤って活用しているということです。すなわち下五部分の「青々し」を終止形にすれば「青々する」という形になりますが、「・する」という動詞の場合だけは、未然形も連用形も同じ「し」と変化するため、どちらの「し」であるのか判然としません。しかも困ったことに「する」の未然形は否定連用形は肯定を意味しますので、解釈によっては「し」が使っているがゆえに、全く正反対の答えが出てしまうのです。そこで、肯定的に表記したいときは下五を「・す」または「・する」と書くべし、という暗黙の了解ができ上がりました（終止形止め）。なお、この「し止め」は上五、中七においても適用されうる場合がありますので、この際、特段の確認をしておくべきかもしれません。Ⅱ少し手を加えればもつとよくなる句Ⅱ
原 豆まきは鬼が主役で福いすこ 健柳
添 鬼ばかり幸せ遠い豆をまく

原 豆の飯少し多めに米をとぐ	俊子
添 句の豆ごはん多めに米を研ぐ	
原 鬼は外豆を当てられ父も外	弘泰
添 鬼は外父も庭から帰れない	
原 野良で時く豆をカラスへ気をもます	利子
添 まだ時かぬ豆へカラスの気をもます	
原 豆しほり見れば体が黙らない	安子
添 豆しほり見れば五体が動きだす	
原 落花生菌のご機嫌をそこなえる	さだき
添 落花生菌のご機嫌を悪くする	
原 ふつくらと豆御飯焚け笑顔あり	治子
添 ふつくらと豆ごはん炊き笑みこぼす	
原 豆まきを手伝いに来る白い息	孝子
添 豆まきを手伝いに来る白い息	
原 節分は豆食べきれぬ歳となり	長一
添 節分の豆食べきれぬ歳になり	
原 手に豆を出して鉄振り今日の幸	雅代
添 手に豆を出して鉄振り今日の幸	
原 豆炭のコタツで寝た青春譜	靖博
添 豆炭のコタツ恋しい青春譜	
原 早起きは町一番の豆腐や	としお
添 町一番の早起きは豆腐屋だ	

句立ての例外として七七五、八九、九八、合計十七などがありますが、さらに七五五の作りも可と考えています（理由は別の機会に述べる予定です）。

原 こころ住む鬼鬼鬼へ豆たりぬ くにこ

添 胸に棲む鬼鬼鬼へ豆足りぬ	
原 枝豆にビール至福の夜もふける	美紗子
添 枝豆にビール至福の夜がふける	
原 節くれて豆もある手を愛おしむ	かずお
添 節くれて豆のある手を愛おしむ	

Ⅱ佳句Ⅱ

節分の豆を炒ってる老いた鬼
豆を撒く鬼が寂しく出て行った
勿体ないが隅まで豆を拾う鬼
鬼は外豆が私にはねかえり
鬼は外まさか私のことですか
逆上がり励むこの手に血が滲む
お豆さん炊いて届ける人がいる
リハビリのつもりで選ぶ種の豆
知恵絞るヒント見つけた豆辞典
食べられる事なくゴミとなる豆も
こずえ

Ⅱ今日の推せん句Ⅱ
豆を手を鬼を待っている孫三つ
三つ子のたましい百までを期待します。
逝つた子の豆を数える鬼やらい 宇野幹子
頭から離れたことはありませんね。 吉田陽子
模範的な夫婦像が見えます。
Ⅱ私の句Ⅱ
豆買いが油を売りに来て困る
埋蔵金ないが豆なら植えてある
（搭載しなかった句は役員が添削いたします）

秀句鑑賞

同人吟 森山盛桜

—1月号から—

気忙しい真つ直中に「いよいよご清祥のこ

とお慶び申し上げます」と未だ現役サラリーマンに向けて大役が降ってきた。

定退が近いと言えど、昨今の景気・情勢では「諸君さらば」と逃げる訳にもならず……。そんなこんなと慌ただしい中で作業した為、粗選になったかと想いお許しを賜りたい。

さて、昭和五十四年十二月に川柳教室を創設し、翌年六月に「中八句を詠まぬ」会として創立した程である。正に中八は遠慮した。

亡霊はバブルの影を引きずって

木本朱夏

現世には、確かに亡霊が生きている。

景気不景気に関係ない貌して膨らんだバブルであったが、金銭感覚を狂わせ、金食い虫は蔓延るままに弱者の懐を狙っている。

餌まくと隠れたものが首をだす

野坂なみ

単なるイヌやネコの獣類に限らないのだ。

森や林野に、海にも河川にも生きたいものが多い。田畑には餌を播けば足を踏ん張つても首を出してくる生物に植物。万物すべて餌の

欲しいものばかりなのである。

時雨から逃げて時雨の中にいる

森田明子

秋末から初冬にかけて降ったりやんだりの雨をこう称ぶ事は周知のとおりと思う。

涙を催しそうで逃げ帰るようにその場を出たところ生憎の氷雨が寒さを唄っているのだ。現実には明るい気持ち「雨に唄えば」なのか。

愛想のないスーパードーが買ひ易い

岸桂子

確かにそんな感じのする店がある。すなわち、弁茶羅という愛想がない分だけ、私のような無口タイプには都合がよいというものがある。それにしても御婦人方には買ひもの姿がよく似合うものだなと感心している。

日章旗タンスの奥にきつとある

高瀬霜石

我が家ではタンスの中ではなく判りやすい処に袋へ容れて吊つてあるのです。

大人しい日章旗ですからタンスの奥にまで隠れたのかも：「日の丸の白地に文字を書くなかれ」と文部大臣奨励賞の作品もある。

一編のドラマ紡いで夫婦たり

高橋岳水

ユーモアを解しながら姑を囲んで介護している壮年期のホームドラマ。また新しい齡の暦を捲る。恙なき統編のドラマとしたい。

身構えて一人暮らしの鐘の数

金子美千代

鐘楼の百八つも絵になる一人ではあるが、ほとけ様へ唱える経文には独りの鈴鉦（鐘）が添うている。この句は「身構えて」がよく効いている。無心な念珠の姿が浮かぶ。合掌キリストの身の上話知るマンガ

榎本宏子

世界一の読者数をもつ聖書であるが、馴れぬ私には難しい処があるようだ。これをマンガ本にしてブームに乗せた作戦は大当たり、ブッダ（釈迦）は読了、また本屋へ行くか。もつと撫でてやれば良かった子の頭

大川桃花

「後悔先に立たず」とか「後の祭り」など、ことわざの論ずるところであるが、子育ての然と難しさを感じる。私など親は撫でてくれる人だと覚えぬ。きつと感謝する事になる。

老いてなお衝動買いの癖を持つ

原さよ子

有無の秤にかけて「在れば便利・必要」と働く本能も緩み「つついづい買ひ」の癖が生まれる。愉しい人生として楽しく暮らそう。

どこにでも在るが本音は反省している。
てのひらに無色透明けさの雨

近藤 豊子

「アラッ雨かしら」差し出した手のひらに
雨粒が落ちた。朝の雨には汚れなき気をする
無色で透明感があった。昨日の不快感はこの
水滴によって消えた。今日は明るく振る舞う
ことにしよう。

絵の中のはるかな舟を偲び見る

大谷 篤子

思ひ出という絵巻物は誰にでもあり、長い
手紙・長い川だと思ふ。父母・祖父母そして
友だちと私。舟それぞれ長い旅してゆく。
はるかな昔の旅を偲ばせて舟の画が変わ
る。作者のやさしい性格が読みとれる。

一休みしてわたくしを取り戻す

安芸田 泰子

せち辛い世の中、ましてや百年に一度の経
済恐慌という不景気が続く状況下では、中
小企業や弱者いじめの福祉社会は大変に辛い
ことなのである。正月明け以降には活気付け
たいとは、あの偉い方々の台詞だ……

方程式を卒業したらみな忘れ

寺川 弘一

そうでした。六三年を通学して叩き込んだ
数学。算数のころは面白かったのか大きな
声で九九を覚えたのだが、方程式になると少
しずつ戸惑いが起こる。予習復習して解ける

ようになった。図面に三角関数や微分積分も
解る。学校を出た途端この頭に残っていない。
なぜだろう金がないのに溜まるゴミ

出口 セツ子

同感です。実に平凡な事がらと感じます。
契読紙・ダイレクト・手紙・宅配便は届く。
衣類などは古び、食べ屑も出てくる。結構無
駄な贅を買っていた。空気中には埃など舞う
ゴミである。金が乏しくなると贅沢の細かい
ところに気のまわる事になる。

引き算の下手な暮しで疲れ気味

黒田 能子

加除算は油断するほど難しくなるようだ。
孫子の数は多ければ多いほうが良く、友達も
親族も同じ思いがする。引き算が下手な暮し
振りを言えども愉快に過ごせば気疲れなど辛
せな環境だなと思わせる。

鈍行でうまい空気を吸いに行く

堀 正和

特急と快速以外は鈍行の山陰路は単線なん
ですが、平成二十一年には姫路・鳥取間の高
速自動車道も開通し、中国山地の北側に海を
抱き占める環境は、空気（オゾン）も豊富に
恵まれ、鈍行の田舎暮らしも善いですよ。

肩書きは消えてもたぎるものはある

天正 千梢

肩書きを欲しが人も多いが、任期と共に
肩書きの消える職務もある。問題は肩書きの

有無による務め振りだが、消えても滾るもの
の有る作者は、ボランティア精神も旺盛な人
で貴重な方だと思ふ。貴重な人に愛を託す。

閃きも一晩寝ると消えている

福本 英子

何度も経験した私ですが、近ごろ特に酷く
なり、パツと閃いたものを即メモしとけば、
佳吟にでもなったかも知れず、トイレや枕辺
に、ポケットにも手帳やメモ帳を備えたい。
そうすれば楽に睡眠も取れそうだ……「逃げ
た魚は大きかった」のかもしれない。

種袋より美しい夢を播く

白根 ふみ

「夢を播く」とは愉しく効いた句である。
種袋なので播くにした作者の心根には優しさ
まで伺える。野菜の種でも花の種でもないの
だと想いたい。美しい夢の種というからには
必ずや華やかな絵になることだろう。

軽石にストレス抜いた穴がある

津川 紫晃

大半の風呂場には軽石が待っている。
その軽石は山のストレスが噴き抜けた小さ
な空孔がいっぱいあり、私の踵は垢など無い。
欠けた皿捨ててしまつて楽になる

句読点いくつも打つて未完成

小豆澤 歌子

大石 あすなろ

—水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

都倉求芽

てふてふの飛んでる母の手紙読む

増井ヨシ枝

母の手紙、歴史的仮名遣を読むだけで昔の愛情が甦る。

紅涙という奥の手を持っている

宇野幹子

ひと筋の涙を解毒剤とする

松山芳正

一句を並べるといつの世も、仲良きかな人情と涙。表裏を使い分ける術を教えてください。

息抜き力の加減うまくなる

早川孝子

老後の夫婦に息抜きは日常茶飯事。そのうまさに幸あれ。

服装の乱れ心の乱れかも

松葉君江

ぼろぼろのジーンズから膝が出ている。誰でもよかった人殺し。ついつい連想する。

クラス会葉見せ合う旅の宿

早泉早人

葉持参でも一泊のクラス会。羨ましい限り。大いに後期高齢を謳歌しましょう。

思い出し笑いをしてる古着達

神野千恵子

引き出しがいっぱいに詰まるとも、とても捨てる気になれぬ思い出の数々。思わぬ不況になっても思い出が豊かにしてくれる。

大根が主役になつて湯気にいる

高木道子

冬はなんといっても大根。血糖値に悩む私を温かくて満腹感を満たしてくれる大根は神棚に供えたいくらい。

赤い糸少しほどけている夫婦

寺井弘子

少しくらいほどけたっていいですよ。何十年もしつかりつないできた赤い糸。褪せてきたら染直し、ほどけてきたら息抜きをしてからまた結ぶ。それでこそ其白髪、そして金婚。

名ばかりの主婦で昨日も今日も留守

藤岡りこ

名ばかりなんとかというのがベストテンに選ばれたが主婦の場合には好意的に？寝付かれて毎日ウジウジ聞くより家庭はずっと明かるい。

言い訳をしてプライドに叱られる

保野登志子

今の政治家達のなんと軽い放言と言いつつ。この句を見せてプライドの有無を問いたい。

身の丈に合った目線がむつかしい

河津正治

情報過多の時代。ついつい目線が上ずってしまふ。それを若い人たちにどう教えるか。

やりたい事いっぱいあつて六十五

松尾美智代

いいですね、六十五、いっぱいして下さい。私は思う事の半分も出来ずとうとう八十に。

年賀状今年早めに書きはじめ

伊藤アヤ子

これを何十年目指してきたことか。実行された句主に最敬礼。拍手。

いい句をたくさん見せていただいてありがとうございました。この機会にひと言申し上げたいと思います。川維時代から川柳塔発足時にかけての常任理事に清水白柳という方がおられました。高名な宮大工で句風も高尚で人望厚いお方でした。その方に因んでこの「水煙抄」欄は設けられました。「水煙」とは塔の九輪の上部尖端にある火焔形の装飾のこと。ただの「みずけむり」ではないのです。心して投句くださればありがたいと思います。

■各地句会だより

尾崎尾浜川柳会

新居・トレピエ

を起点に

田 原 宏 一

「おう、これはいい部屋だ」、「ほんと、素晴らしいですね」、「川柳が楽しくなりますよ」などと、入口に立った皆さんが一緒に感嘆の声を発したのが、外ならぬ尾崎女性センター・トレピエです。清潔な白い壁、影をつくらぬ十分な照明、ゆったりとした空間、幅広い机、背中を包み込むような椅子等々。地域活動を展開し、交流を深め広めていく場としては恰好な会場です。

尾浜句会がこれまで使用してきた建物は、紹介するにも案内するにも説明しづらい場所にあり、それだけに今回九月から利用し始めたトレピエは、想像以上の好感をもって迎えられました。それと共に交通機関の至便さにも

もあります。阪急神戸線（塚口駅より西へひと駅、西宮北口駅から東へひと駅）の武庫之荘駅下車、南へ徒歩約三分の好位置に在ることです。そのためか九月の転居以来数人の初参加者があり、同掲の写真はその時の記念を物語ります。

また転居を機に月例会の一部を変更いたしました。（変更部分は兼題を一つ増やして計三つとし、自由吟共ども各三句です。）

所で今年の尾浜川柳会で特筆すべきことは、九月二十八日（日）、尾崎芸術フェスティバルの一環として、長浜美龍会長と同人山田耕治氏により、現在に亘る柳人先輩諸兄弟の名句を、ギター演奏とのコラボレーションで朗読したことです。これは朗読に色つやをつけたレトリックとなり、聴く人観る人が時に笑い時には頷いて深く思いを起している様子が伺われ、川柳に一層の近親感を持つてもらう催しとして、大きな成果があったのではないかと推察しております。

いささか自画自賛の感は拭えませんが、トレピエへの転居を起点として、尾浜川柳会は今後とも更に活動の輪を展開してゆきたいものと思っております。



国語力

井上桂作

最近国語力の著しい低下が、学生の思考力の減退を招いていると国語学者は指摘しています。国語は、その国において公的なものとされている言語で自分の国の話し言葉です。我が国では漢語・外来語などに対して、和語・やまと言葉などと言う表現が使われています。

国語学はもちろん国語を研究の対象とする学問ですが、日本語の音韻・語彙・文法等について、歴史的にまたは体系的・個別的に研究します。したがって、「その国の人々の歴史や文化、伝統の中から生まれ発展してきた言語」が国語というわけです。

現代の青少年の場合には、パソコンやゲームに熱中して読書の機会を著しく減少し、歴史や思想などの勉強がなおざりになっています。戦後の教育現場では、日本語は論理的ではないとする人達がでてきて、国語の授業の方向性を見失っていました。

外国人が日本語を学ぶことを意識して、文法中心の教育を進めてきたのです。外国人が日本語を学ぶには学び易いですが、日本人が学ぶ場合は機械的な授業ではなく、創造力や感性を高めるような授業を行うべきです。

最近言葉の使い方や物議をかもしたのが「後期高齢者」なる言葉で、医療機関などで紛糾していました。また高齢の運転者に「もみじマーク」の表示を義務づけたことも、老人に枯葉マークとは失礼と反感をかったようです。

こうした著しい配慮の低下をふせぐには、まず家庭での問題点が考えられます。核家族化がすすんで法事などの行事が簡素化され、伝統の文化や習慣が子供達に伝えられなくなり、そうした行事を後の世代に伝える祖父・祖母とも同居しなくなったことも大きく影響しています。

さらに国語力を養うには、読書が大切だとされています。本は過去の知識・知恵の蓄積であり、新しい物を生み出す原動力となってくれます。自然に本を読むことができる人間をつくるのが、教育の大きな役目でもあります。折角大学を出てもマンガが好きで、読書の習慣のついていない人が多くなりまして、活字を読むのは根気のいる作業です。読

書や言葉のニュアンスは実際に経験しないとうまくできません。

本というのは不思議なもので親が読まない子供も読まない。したがって本のたくさんある家庭と、ない家庭では大きな差異が生じます。子供が静かに読書のできるような環境を作ってやることも大事で、少くとも月に一度は家族して図書館に行く習慣をつけておきたいものです。

そうして子供達に国語力を身につけるには人の話を黙って聞く姿勢、すなわち聞く力（聴解力）をつけることが大事な要素です。人の話をきちんと聞く、話を聞いて要点をまとめ中身を理解する力は、読解力と平行して大事な要素となります。大人の話をじつと聞くことによって（感情を言葉にする大切さ）を子供に会得すること、読むこと、聞くこと、話すことの三つを加えて、常識を備えた円満な大人に育てたいものです。

国語は全人的な教育であり、各教科の根本になります。両親が愛情を持ってできるだけ話しかけてやると、子供も自然に言葉の力がついてきます。社会の日本語力テストは、単に難解な漢字の読み書きや知識をためたりするものが多いようです。国語力を高めようというのは日本の「教育大本」をつくることなのです。



追悼

宮本三喜夫さんありがとう

川上 大輪

十一月十八日の夕方、牛尾緑良さんから訃報のメールが送られてきた。それは三喜夫さんのご逝去を連絡網で回しましょうか、という内容だった。あまりにも突然のこと

で暫くはただ呆然とするだけだった。聞けば十六日にお亡くなりになられ、今日が告別式だったとのこと。緑良さんもてっきり私に訃報が届いているものと思われていたらしい。

その後お取り込み中のお忙しい中にもかかわらず、長男ご夫妻がご丁寧な私の自宅にお見えになられた。葬儀は家族葬ということで自治会の方にもお知らせはしなかったということを知った。

三喜夫さんは捕鯨の町で有名な太地町のご出身で現役時代は国鉄マンであり、若い頃は各地を転々としたらしい。本社句会や、わかやまの句会への行き帰りに、いろんな思い出話も車の中でよく聞かせていただいた。

お人柄については私が言うまでもなく、皆さんが思っている通りの方で、

つましくささやかに生き愉しいよ

春ですぬ明るい話題つぎつぎに

募参り母さん遺す菊提げて

早いです人並みに歳とってます

マラソンの途中は孤独頑張るね

物静かで温厚で真っ直ぐ、何事にも熱心で前向きであつた。わかやまの句会や本社句会でも皆勤を続けられた。また「嫌」と言えない性格でもあつた。句は技巧に頼らず、思ったことを素直に表現されていた。

川柳を始められたのは八十歳を過ぎた頃で、町内で初めて川柳の会を開いた時から会員であつた。

ご自身の身の回りのことから政治や経済、社会、スポーツ等あらゆる方面に目を向けられていた。

前例がないと役所は動かない
W杯終わり寝不足おさまった
タマチャンの放浪の旅うらやまし

平成十八年には、生きた証を残したいとの思いで、句集「私の川柳」を上梓された。平成十九年一月号の川柳塔に緑良さんが「句集紹介」をされていますが、この句集から三喜夫さんの凝縮されたお人柄や優しさが、ひしひしと伝わってくる。

十月の川柳塔わかやまの句会に出席された時、「頭がふらふらする」ということで投句を済ませ、ご子息の車で帰られた。その後入院をされていたが、まさかまさかの出来事であり、残念でならない。「川柳塔まつり」の行き帰り、車で一緒にさせていたいただいたのが私にとって三喜夫さんとの最後になつてしまった。今はただ思い出が頭の中を駆けめぐるだけとなつてしまった。享年八十八。法名 喜畠誠真居士
ご冥福をお祈りいたします。(合掌)

柳 歴

平成十二年 川柳塔わかやま吟社誌友

平成十三年 川柳塔わかやま吟社同人

平成十四年 川柳塔社同人

平成十八年 句集「私の川柳」発行

本社 一月句会

一月七日(水) 午後一時
アウイーナ大坂

平成二十一年初句会が晴れやかな新年の気分の中で開催。出席者山名。年末亡くなられた濱野奇童氏(参予・岡山県)への黙祷のあと、昨年同様に三宅保州「初歩教室年間賞」の発表。岡本 昇・高木道子・荻野像山の三氏が表彰された。次に昨年の皆勤者31名の氏名が読み上げられた。次いで昨年度月間賞杯永久保持者の谷口義さんの表彰が行われた。

初句会は河内天笑主幹のおはなし。

テーマは「路郎川柳」。主幹より「本日は路郎川柳の中でも路郎川柳の特長のある句についてお話しますと始められ、路郎句集「旅人」のレジュメが配られた。句集「旅人」を三日間かけて熟読され掲載された千五百句余りの中から特長のある句を抜粋されて解説された。句集「旅人」の自序、はしがきの解説。句集より「牛の句」「旅つれづれの句」「居止め、よ止め、し止め、出止めの句」「七七の句」の抜粋の解説があった。そして主幹より「私はどこの句会でも、その場、その時に作句しているので入選句しか残っていないが川

柳歴43年間の句を集大成して、主幹任期中に句集を出版するつもりであると意気込みを述べて「おはなし」を結ばれた。(郁夫記)

月間賞は柴本はつはさん(大坂市)に輝く。
(司会)美龍・昭(協取り)月子・蕙子
(受付)理恵・日の出(清記)光久

席題「メール」

谷口

義選

初春のメール列島駆けめぐる

太郎

顔のないメールへ顔のない返事

好

屋台酒まで追い掛けて来るメール

准一

母からメール「飯いづでも炊いてるか

一風

夫のメール命令形にある不満

正雄

打ち方を覚えたとメール着く

寿子

君が好きそんなメールはすぐに消す

天笑

朝一にメールを読んでいる日課

哲男

二階からメシはまだかとメール来る

(矢)五月

お二階の娘にめしとメールする

見清

閻魔からはばちメール来る予感

尚士

メール打ったとわざわざ言うてくる電話

則彦

考える人の姿でメール打つ

葉

この歳で思わぬ苦勞さすメール

宏子

福の神さまメール打っていいですか

義子

正座してメール打てるおばあさん

千代

吹けば飛ぶ愛を囁き合うメール

幸雀

ほつこりと大阪弁のメール来る

昭

立てばメール坐ればメール子はせわし

一風

約束のメールを待っている深夜
冗談のように本音伝えてくるメール
幻に会いたくなつてするメール

ルイ子
美花
森子

ハガキ出したらメールで返事くれる母
メール便あなたの顔が見えません
メール来るなぞかはんわかつる心配

保州
ダン吉
義子

見られたら困るメールを妻が見た
アドレスを変え新しい恋進む
メールにも恋の一端の息遣い

楓楽
集一
耕治

勤務中であろうと押しかけるメール
楊貴妃からお逢いしたいと言うメール
こそこそと夫がメール打っている

恵子
富子
瑠美子

飯いらん仕度の後に子のメール
佳

麗

冬枯れにふわりと春のメール来る
メールから色とりどりの声がする
夫にもメールアドレス教えない

理恵
葉子
いさお

メールから時々とんで来る吹き矢
メールでは敬語知ってる息子です
人

道子
富美子

七草粥教えてほしいと来るメール
地
母からのメールかしこで終わります

哲男
保州

天
メールから飛び出してくる火種
軸

森子

年中無休受付けているメール

兼題「二」(巻)

岩崎

公誠選

平凡に害にもどつてつがなし
一からのスタート妻が押してくれ
一年の計を三日で書き替える
バツでぐつと貫禄つけはった
公園に一人で居ると怪しまれ
一日を一合の酒締めくくる
初詣で一番乗りで風邪を引く
給付金一回限りじゃ治らない
一人だけ残してあとは切り捨てる
豆腐丁如何様にでもなさいます
第一楽章愛の葛藤予感する
一歩退く勇気をくれた妻の愛
一富士も鷹も見ずに金は貯め
一大事こつかいピンチ減らされる
一番の好きな男の背伸び癖
外野席の一人で終わるちびた靴
一滴が明日の命支えてる
一人でもきちんと正座して食べる
万が一方舟用意しています
うつぶんを一杯ためているレモン
ワンランク上げて男の貌になる
信念を貫き一人反旗する
此処一番平常心がゴール決め
リストラの背に日が長すぎる
一遍に変わるものなら変わりたい
一本を通した自負に悔いがある

虫 庸 佐 いさお 修 保 州 宏 子 勝 弘 紀 雄 理 恵 和 子 孝 一 一 風 月 子 靖 博 正 和 楓 楽 義 義 ばっは 岳 人 森 子 満 作 更 紗 舞 夢 千 代

オンリーワンを生きて悔いなし無位無冠
壁一枚向こうは地獄かもしれぬ
一番でなくても牛のマイウエイ
リハビリの一歩大地が柔らかい
明日へと続く大事なこの一歩
七草の一つ揃わぬままの粥
佳
拉致の子が一番近い国にいる
人間が一番コワイ世になった
一本の指揮棒に酔うコンサート
先頭で風を切るのも楽じゃない
袖の下一度貰うと癖になる
人
何やつても一枚上手お母ちゃん
地
母の手に鬼が一匹住んでいる
天
一月一日いらない歳を取らされる
軸
一粒の涙に負けるのは男

兼題「もしも」

渡辺

富子選

外出のもしもに備え迷子札
もしもばかり思いわずらう冬の底
俺だつてもしもの時は飯を炊く
三億を入れる金庫を買ったのに
ドライフラーにも水をやるもしも
もしもの時あなたにだけは居てほしい

幸 雀 朱 夏 千 枝 子 雅 文 菜 月 千 代 耕 治 美 代 子 好 葉 尚 士 ばっは 篤 子 昭 雅 明 楓 楽 尚 士 哲 男 美 代 子 理 恵

恐竜の化石と信じ持っている
真っ白い下着を着けているもしも
もしも株が化けたら月を買い占める
時折りはもしもの中で遊んでる
ポジティブに生きてもしもは考えず
六法を読んでもしもの策を練る
行く先々でもしものしが絡みつく
もしもなど思えば天まで落ちてくる
赤い糸ももしもあなたでなかったら
もしも今動けばきつと的になる
ひよつとしたあの流し目はオーケーか
もしもと言う期待の種を蒔いておく
空広しもしも私が鳥ならば
A型でもしもばっかり考える
からだじゅうあちこちも持っている
手の内に引き寄せておく命綱
もし生まれ変わるならば貝になる
魔法の靴ももしも履けたら会いにゆく
仏壇の奥にもしもが入れてある
もしもの時頼りになるのは金でつせ
取越し苦労ももしもしが離れない
あの世へのツアーがあればまっ先に
考えすぎのもしもで一歩出そびれる
楽天家のもしもとベシミストのもしも
逆境にもしものを期待して耐える
拉致家族若しやもしもの春を待つ
佳

朋 月 朱 夏 直 樹 五 月 靖 鬼 集 一 葉 たもつ 能 子 准 一 光 久 昭 みつ子 正 和 天 笑 無 限 いさお 葉 子 たつお 蕉 子 理 恵 水 昇 能 子 啓 子 集 一 浩 二 修

もしもの時泣かないことに決めました
千年の眠り埴輪にあるもしも
時々はもしもに魔法をかけている
繋がる薬一本にあるもしも

人

わたくしが居なくて生きていきますか

地

虚と実の狭間でも少しもが燃えている

天

一瞬の少しもが隙を狙ってる

軸

ときめいたもしもを数え日向ぼこ

兼題「目立つ」

池

森子選

目立つ服着せて迷子を防いでる
女ひとり目立たぬように猫と棲む
寒空で目立った派遣村の鍋
七草の時だけ目立つ芹なすな
暗闇にいてささ薔薇の自己主張
目立つ服着たら顔つきまで変わり
紅一点充分視線感してる
研修で目立つ才能刈り揃え
蟹の足一本とれてよう目立つ
その中のひとりへモーニングが目立つ
整形の鼻はやっぱり高すぎる
青い空一つ残った木守柿
凛とした気品が目立つ氏素姓
モデル業陰の努力は見せぬ顔

ばっは 雅文 いわゑ 森子 尚士 柳弘 公誠 喜子 理恵 深雪 加お里 朱夏 好修 雅明 美花 雅文 公誠 倅子 ふりこ 靖鬼

母だから子の欠点が目立ちすぎ
目立たぬよう隅に座っている狸
汗だけが目立つ男の太い芯
地味な服わたし一番目立ってた
花束をもらい花束だけ目立つ
オール5のトップいじめの的になる

人

年金で目立たぬ様に生きてます

目立ちたい総理影まで薄くなる

遺伝子が目立たぬ所で牙を剥く

ぎりぎりのところで目立っている度胸

白足袋が目立つ春まだ浅き日に

目立ち過ぎる貴方でいつも損をする

目立つのはご免仮面脱ぎ捨てる

目立たない角を曲がると仮面脱ぐ

背伸びせず目立たず爪を研いでいる

目立たなかつた生徒何でもよく見てた

目立つものなんにもないが夢を持つ

目立たずに生き目立たずに死んでいく

住

目立たない位置で野心をあたためる

七光りという十字架を背負ってる

わたくしの生きた証だ目立ちたい

目立たない位置で時代を読んでいる

その時は目立つ男を借りてくる

人

目立つように目立たぬように置く寸志

地

言い訳をするほど目立つ寒椿

能夫 郁夫 無限 月子 保州 たつお いさお ダン吉 道子 朝子 和子 寿子 天笑 篤子 靖博 深雪 いわゑ 蕉子 楓楽 千代 賢子 葉子 義子 富美子 義子

天
貴方だけ目立つ私の胸の内
内面を磨いて凛と咲き誇る

軸

光らない石だが私には宝

菩提樹の数珠と象牙の印鑑と

神代から女性性は宝七福神

鑑定に出すまで家の宝です

子宝に恵まれ嫁はでかくなる

戦せぬ国九条という宝

お宝は孫の元気な笑い声

受験勉強今瀬戸際にいる宝

子は宝だけれども戦にはやらぬ

うちの宝もうピカピカの一年生

真面目さが宝万年課長補佐

周平の世界が僕の宝のもの

愚妻だと言っているが宝物

青テント家族写真が宝物

命みな青い地球の宝です

宝島の地図はネットに載せておく

国宝展抜いてある仏

叱られた数は宝の数だろう

朋友も悪友もいる住所録

胎動の響きにくる宝物

宝石で飾り孤独と住んでいる

和子 集代 富美子 楓楽 哲男 葉子 富子 弘風 昇 勝弘 正雄 一風 無限 哲子 水昇 ダン吉 浩二 郁夫 欣子 蛭 庸佑 正雄

羊水を泳ぐ宝に氣を貰う

虎の子の一万円が拉致される

解散という宝刀が錆びたまま

へその緒の箱を母から譲られる

宝だと思つた孫が金を食う

田満というお宝を持つ家族

少年が庭に埋めたラムネ玉

平凡な日々が宝と知る齡

寶石に無縁野良着で磨く鍬

生かされていのちすべてが宝もの

住

好きなことさせる夫は宝物

一生の宝にしてる父と母

宝探しあなたにめぐり逢えました

私の宝を妻が捨てたが

お宝は無いが夕餉に皆そろう

人

煩惱を乗せると沈む宝船

地

腕に持つ技が宝の町工場

天

できぬ僕宝と思う母がいる

軸

百均へ宝さがしに二人して

兼題「人 氣」

西出

楓葉選

庸 佑

紅白の太トリ母に捧ぐ歌

螢

光 久

昭

朱 夏

耕 治

美 智子

見 清

朋 月

富美子

正 雄

ふりこ

加お里

太 郎

保 州

集 一

ダン吉

楓 楽

見 清

(奥) 五 月

うたかたの人氣にあぐらかいている

人氣など瞬きをする間に消える

人氣無き総理に託す身の不幸

蟹工船今年も人氣続いている

読みづらい人氣の名前つけられる

直言が人氣とっても温い人

僕の周りはいつもおばちゃん親衛隊

今もなお千年前の恋光る

不況には節約騒ぐ品が売れ

食いだおれ閉めても太郎人氣者

冬大根ほどの人氣があつたら

氣のゆるみ天狗の鼻の折れる音

自分では人氣があるという錯誤

湯たんぽに人氣とられたコンセント

どうすれば人氣でるか問う総理

見せ方を変えて人氣の動物園

芸よりも甘いマスクにある人氣

NHKのおかげで薩摩が炎えている

絶頂の人氣奈落の上に立つ

人氣者になると叩きにくるメディア

二つ三つ体のほしい人氣者

親の手を借りた人氣に影が差し

スキヤンダル撒いてスターの座を狙う

人氣取りの給付金より欲しい職

弱点をさらけてからは人氣者

紅白ではじめて知った人氣歌手

安・近・短が人氣我が家は昔から

不況風飛ばしてくるかもオバマ

久 峰

葉

浩 二

美 花

千 代

ダン吉

弘 一

哲 男

東 吉

玄 也

朱 夏

蕉 子

公 誠

宏 子

(奥) 五 月

啓 子

正 雄

寿 子

時 雄

桃 花

能 子

昭

恵 勇

富 子

好

千 代

恵 子

朋 月

人氣取りばかり並べるマニフェスト

年主はやはり諭吉にある人氣

佳

人氣など氣にせぬ芸のしたたかさ

ヨソ様と夫比べるのはよそう

火を潜り風をくぐって今が旬

人氣先行ブレッツシャアのしかる

人氣あるうちに次の手考える

人

友達を中心にいる丸い鼻

人氣者同士視線を合わさない

地

退き際が見事だったという人氣

柴本ばっは

天

人氣とやこの不可思議な手暗がり

軸

21年度川柳塔誌發送日

1月27日(火) 2月27日(金)

3月27日(金) 4月27日(月)

5月27日(水) 6月27日(土)

7月27日(月) 8月27日(木)

9月26日(土) 10月27日(火)

11月27日(金) 12月26日(土)

お世直し

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

豊中もくせい川柳会 藤井 則彦報

ざりざりへ月光仮面現われる
闇魔にも恵比須顔にもなるお金
急ぐから余計小銭が出てこない
毒舌の続きは次と言うて去る
続いてるうちに見ました放浪記
うちの妻足芸使い家事さばく
飼主が犬にだんだん似る不思議
もうお金ないけど余命たんと有る
迷わずに愛を選んだ若い頃
のはほんと生きてストレスない暮し
悲しみと怒りに暮れた年終える
干涸びた思考を揺らす発車ベル
研ぎすました心の声をきいている
ざりざりの言葉で先生は叱り
生きられるざりざりまでの積木つむ
変わらねば明日の日本が見つからぬ
目齒足と部品にお金掛ります

石舟 石 舟
タミ 庸 佑
郁 坊
堅 坊
玲 子
則 彦
美 義
夢 隆
勇 治
千 代
隆 隆
葉 子
見 清
都 代
早 人
宇 乃

最後まで波乱に満ちたコンチエルト
ざりざりになってますよとカード言う
好奇心と健康維持のポランティア
生真面目に歩いた靴の大欠伸
ざりざりだんね大阪弁でするもみ手
音立てず髪は律義に伸び続け
手拍子でカバーしてます芸の無さ
じつと手を見てるだけの年の暮れ
幕が降り花それぞれの居どころへ
あれもこれも期限切れてる会員証
ざりざりの答えを出している涙
合掌の手の中にある安堵感
楽し気な会話が続く手話の指
加齢ですの見立てに惜しい初診料
ざりざりまで口を出さずに見てる母

ほたる川柳同好会

水野 黒兎報

眼についた雨粒払う秋あかね
素粒子というわからぬが凄まじいもの
粒揃い美人姉妹は母遺産
はいはいと行つたが帰りがたくたで
はいはいといまだに振込む奴がいる
もう返事くれぬ写真に話しかけ
一粒だけ言い訳しないしじみ汁
一粒の涙で終る離婚劇
山びこが好き好き好きと返事する
ごま粒のような秋を見るる月

孝一 寿美子
肋 骨
満 寿
萬 的
玲 子
巴 子
尚 士
佳 惠
求 芽
志 津
野 鶴
十八娘
寅次郎
美智代
柳 童
黒 兎
長 一
禮 子
蛭 柳
雪 子
見 清
宇 乃
勇 治
美智代

傍目には他人の子らは粒ぞろい
粒よりの魔女が綱張る北新地
入学時粒よりだった東大出
ゴハン粒取って口へとい母性
広告の目玉追いかけて元気で
粒よりと聞いて背筋が固くなり
不揃いの粒だが味に変わりなし
返信はいらぬと書いて心待ち

城北川柳会

伊達 郁夫報

ささくれた世の日溜まりにある丸み
満月も雲の流れに今日は負け
鍵一つ取替え安堵の医者通い
もういいかいゆつくり来てねお正月
立ち直り早い女の食べ歩き
夜道を帰る牛の尻尾につかまって
シナリオを書き直しては秋の蝶
通院のできる元氣をお大事に
まだ未熟化けそこなっている尻尾
風の盆月と一緒にについてくる
しぶ柿の粉ふくまでを待ち切れず
役に立つ幸送る年賀状
私は貝になりたい太郎です
天命に任せて生きる幸せを
あてつけに菊の盛りを褒めちぎる
ブランドは虚勢だったと知る不況
植山のことなど思う日向ぼこ

久 治
幹 男
信 子
契 子
春 代
肋 骨
祥 風
勝 勝
じゅんこ
美智子
容 子
あやめ
ひさ乃
妻 子
千 歩
求 芽
寿 子
昭 子
あさ子
利 行
勝 弘
桂 作
とし子
倫 子
朝 子

幸運も不運も掴むわが十指

お家賃は納付金から払います

不都合な時は上手に呆けておこ

三世代仲良く住んで妥協癖

縁側に人も雀も寄ってくる

ペットの死だけでは解せぬテロ行為

定年の夫と遊ぶ台所

嫁さんの家にはつかり行く息子

帰る家あるから人は頑張れる

ありがとう家族に礼を言うて近く

キッチンでメモ書き追加する師走

家の中に笑い絶えない子沢山

聞いてやる忘れてやると母の墓

衣食住足りて素朴に辿り着く

そのままだが素敵なんですそのままだが

キッチンで夫を料理する思案

産着縫う娘への銭丸い腰

家の灯が今宵も待っている安堵

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

出直しの切符掴んだ日の翼

こつ掴みあとは明るく介護する

財宝を掴まぬ母の笑い皺

ブレーカー飛ぶほどハート掴まれる

るんるんの声にすべてを悟る母

るんるん今なら飛べるかもしれぬ

ハイヒール履いて悪路をつつ走る

一歩

弘風

志華子

典子

正

東吉

明子

順三

千里

ルイ子

麗

集一

郁夫

昭

令子

修

章久

賢子

大輪報

寿子

よしこ

伶

登美代

めぐみ

大輪

俣子

るんるんの妻と無口の差し向かい

吉報に一日思い出し笑い

るんるんなはずの年金影うすく

予期しないプレゼント解くもどかしさ

今日もまた余白に虹を足している

温泉が言うほど効けば医者いらす

愛と憎い湯の里で締めくくる

温泉めぐり果たさず逝つた妻を恋う

落日に染まる感謝の露天風呂

坊ちゃんの熱血燃えた道後の湯

満天の星とひととき僕の謎

謎解けぬ心の闇を抱いて冬

変幻自在心の底は謎である

大臣がわたくしよりも字が読めぬ

リセットをする和小指の謎解ける

夫婦にも謎があるから面白い

一夜干したら跡形ない男

ラッピングされると謎がとけません

アツと言う間に一万円が消える謎

謎めいた目が笑つてるひよつとして

手のひらに夫の謎を乗せている

石室の謎の一つはまだ解けず

謎ひとつ解けて女は歳をとる

尼崎尾浜川柳会(前月分) 田原 宏一報

浮き沈みしても木の葉は波に乗る
歳末の空に希望のルミナリエ

紀子

よりこ

美子

和子

あきこ

謙

利治

三男

克博

正博

和香

准一

輝子

英子

小雪

智三

保州

順子

紀久子

徑子

富美子

稚代

裕美

宏一報

政江

佳句地十選 (1月号から)

国米 きくゑ

ワンカップこの世の坂の一体み

サジ投げた子がたつぷりと夢くれる

品格を積み重ねます本の虫

神様がくれた誰にも二十四時

片隅で地味な意見が光つてる

語り終えほのかなぬくみ持つ湯呑み

曲ること嫌いな顔のヘソ曲り

化粧した顔がそれかと鏡言う

さつぱりと昨日を脱いで明日を着る

介護を受ける大和撫子だった母

出かけても夕飯仕度待っている

値上げ風潮浮き足立っている庶民

おばあちゃん達者な口でああしんど

みきびたり紅葉葉しむ滝の水

お節づくり終えて安堵のそばにする

頼み事今は多忙とことわられ

お義理だと判る歳暮が届く暮

震災がチャインと知事がのたもつた

こころ根がいのか今年風邪ひかぬ

気忙しい日々と前文書きつづり

隠し芸心浮きうきさせて暮

身はひとつびつり埋まるスケジュール

禁煙する声は聞けど続けてる

次根

一粋

哲史

キヨミ

稚代

美はる

正博

満壽巳

みつ子

螢

よし子

よしひさ

五月

勝巳

かすお

江美

美代子

義芳

野薫

里江

正治

紀乃

真陶

子供にもすぐ日が暮れる忙しき
気がつけば米寿の夫と六十年
大声でなく正論で諭す父

ちどり足玄関チャイム乱れ打ち

忙しい時ほど知恵が湧いてくる

人恋し ひっそりと咲く冬の薔薇

窓際で負けず嫌いなシクラメン

秋の暮れいまださみしくないひとり

よく喋る女が蟹を食っている

十二月八日の記事も小さくなり

忙しい人から何時も労わられ

愛の字のジグソーパズル埋まらない

人間が好きでいい汗かいている

川柳塔まつえ吟社

三島

沁丘報

ボランテア疲れた顔もせず帰り

ボランテア湖もキラキラ汗をかく

おにぎりの一個にこもるボランテア

リーダーの笑顔が包むボランテア

年金がさせるゆとりのボランテア

ボランテアの気持ちで暮らす四世代

困らせた次男が老後見るといふ

早熟の桃が困らす目のやり場

笑ったら困るはなしを聞いている

聞き違い思い違いをして困る

困る弱点励まし合ってケア仲間

大学を出ても困らす独り部屋

耕 治

亀 子

昭 三

奮 水

靖 鬼

鹿 太

雪 菜

求 芽

朋 月

哲 男

美 義

孝 一

美 龍

町 紅

畔 湖

注 湖

禮 子

たけし

芳 恵

桂 子

玲 子

螢

蘭

スズコ

房子

あと一〇キロまだまだ息は続きます

仕合わせが続く勿体ない事だ

平凡な暮らしも次号へと続く

趣味続く生き抜くための糧とする

台本にない日が続く胃が重い

男なら続いて来いと縄梯子

頑張ったぶんだけ福を拾います

生きざまを拾い集めて籠に盛る

雪虫のはかない命拾えな

恋心拾ってくれるひとならば

拾っても拾い切れない過去の罪

拾う神鉛筆と紙送り来る

人生の舞台静かに幕おろす

舞台での大風呂敷で晴れ姿

舞台裏覗けば陰の苦勞人

役の舞台へ力溜めている

華やかな舞台の黒子裏で耐え

妻だけの拍手で舞台幕が降り

京都塔の会

都倉

求芽報

陽が落ちる速さに焦る秋の暮れ

みそぎの小川で反省いたします

みそぎの小川せせらぎの音に澄む心

厄除けか欲か分からぬ願ひ事

砂利までも染めるイチヨウの好奇心

雑踏から一歩逃がれて花の庭

平安の雅を偲ぶ屋根の反り

茂 美

治 代

静 恵

英 子

喜美子

和歌子

ちえこ

幸 子

幸 代

柳 歩

幸

日出子

邦 代

小 生

長 吉

知恵子

紫 晃

沁 丘

鹿 太

義 孝

文 代

公 子

昌 乃

扶美代

大根杏だけが昔を知っている

ひっそりと余生のはずがノール賞

シナリオからひっそり外れ途中下車

入院の友にひっそり置き手紙

ひっそりとピエロが帽子脱いでいる

マンションにひそと都会も孤独です

ひっそりと貴方見ている私です

聞くだけの母がひっそり歌っている

ひっそりというが忙しい書齋

壊れやすいハートですから真結びに

七回忌もう易々と泣きません

今の子はがまん糸が切れ易い

易い方へ流れる癖の雑魚の群れ

痛くない靴で時々脱げ易い

易々と思う相手の返り討ち

御し易く見えても胆が据わっている

再婚ならよほど美人がお金持ち

よほどの手だれと切り口からわかる

よほどのことだな頭下げてきた

惜敗が余程応えたのか奮起

眉唾の話よっぽど値引きして

お静かに腹すえかねた老いの声

川柳茶ばしら

板山まみ子報

外人も日本食店点を付け

洗う手間省き大根よく売れる

二万円所詮大金持ちの策

葉 子

静 枝

わ こ

満 子

福 子

美 穂

寿美子

輝 美

求 芽

知 栄

篤 子

綾 子

宏 子

哲 子

欣 之

ふりこ

則 彦

啓 子

かずお

庸 佑

美 義

義 子

文 男

週 行

美代子

絵手紙の心安らぐ筆遣い
物差しをあてがいうつが晴れ
この坂はわたしに元氣くれる道
大根があれば満足冬の膳

川柳ふうもん吟社

夏目 一粋報

まつばりの人生恋もするわいな
家中のクツション役と妻の自負
文明の森でネットに溺れてる
無駄めしを気にせぬ母が居てくれる
癌手術まつばりになる八十路坂
初孫の側近じいとはあである
新聞も本もネットで読んでる
無駄めしでなかった知恵がたまってる
あなた色染まるつもりが染めていた
無駄めしを食べさす余裕ない時世
ネットカフェで今日の命をつないでる
振り込めサギ老いのまつばりにする
家計簿にまつばりだとは書きません
しやかの手にジャンプするのが未来です
ボンネットバス郷愁を乗せ走る
仮面つけ本音を吐いているらしい
まつばりだ七十路の坂のぼる
まつばりに縁が無いのは昔から
いつまでも無駄めし食って職がない
側近が偽装の手口知っていた
よきに計らえ一度は言ってみたいの

かつ子 幸子 由美子 まみ子
洋々 美恵子 一瑠 悦子 孝男 美雪 無限 善夫 かをる 春名 房江 菊香 一京 行男 あしび 節子 清帆 清信 昌鼓 茂登子 金祥

無駄めしを食ってる私何なのか
無駄めしを食わらせて育てるのが趣味だ
無駄めしを食ったあの頃グレていた
税金で無駄めし食わすいいお国
無駄めしも晩酌だけは欠かさない
食べて寝てあとはお迎え待たばかり
インターネット駆使して余生遊んでる
植木屋の来ぬ訳をさく鬼瓦
エンドウもネット頼りに這い上がる
ネットさえつくカラスのエサあさり
ネット裏スカウトマンの目が光り
青春の無駄めしいつか役に立つ
側近のプライド時に勇み足

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

除夜の鐘懺悔する人笑う人
雑踏で十円拾うこの勇氣
大はしゃぎしたのに何も変わらない
煽てればどんどん伸びる鼻の丈
燥くのは辛いこころの裏返し
どんどんと暮る思いは止められず
ほめられてどんどん伸びる可能性
地の果てでどんどん氷減る不安
帳尻を合わせ祈りの手をあわす
CTに骨の髄まで見透かされ
透明な仏像の瞳に金しぼり
ボーナスへ燥いだ頃を思う下駄

稔 由美子 はつ江 喜子 蟹郎 志げ緒 毅 妻子 喜美子 虎尾 益子 圭一郎 一粋 紀雄 浩三 扶美代 欣之 賢子 あかり 朝一 耀一 一風 寿鶴 幸生 秋子

仏典に凡聖一如目を開く
風邪引いていたわり合っている枕
大自然逆らうことはない夕日
出発ちの鐘あなたの幸のために鳴る

川柳花の輪

妻谷 重風報

土曜日は鰻の日だと妻とぼけ
土曜日もううちの父さん仕事です
土曜日が半ドンの頃よき昭和
失恋に土日の旅の風あたり
父帰る土曜待ってるチャンコ鍋
大相撲ケジメの金を驚つかみ
年金にけじめをつけて離婚
言い寄られバツ一ですとけじめつけ
部下のミスわが身に鞭を打つけじめ
独居では暮しのけじめ崩れがち
川柳若葉の会 宮嶋シマ子報
焚火でもしようか一人のクリスマス
煙製の煙の味を食べている
湯煙にかすんだ時は妻も美女
きらわれて貰の煙行き場なく
邪恋の火を消す消火器が見当らぬ
恋の火をつけ回るのはキューピッド
線香の煙わたしも亡母の歳
活火山抱えて今も観光地
火種持つ事の起りはあなたから

幸岳 栄子 柳伸 弥生 芽田暮 やすの 音成 ミヨノ 一幸 重風 薫 泰子 克衛 善栄 喜美子 能子 ますみ 香住 弘直 シマ子 慶子 烈 加津子

長柳会

村上 直樹報

永久の恋を包んで千年紀
携帯に追いかけて居留守だめ
湯上りのビール一杯蘇生する
竹の皮包むおにぎり母の味
香典を包むお金を話し合い
夜の蝶化粧の下にまた仮面
ああしんど苦しまぎれ的美辞麗句
野の仏すっぽり雪に抱っこされ
運が良く三途の川で引き返す
包装紙二度のお役に取っておき
携帯を持ってないこと自慢する
特攻で散った桜よ甦れ
雪山に携帯と言う命綱
細胞が蘇生して行くワンカップ
給付金仲間外れにしないでよ
甘そうな色で包んだしうい柿
鴨葱が来たとき喜びジャン仲間
ラッピング次第で化ける特価品
万感を胸に包んで退く一線
携帯でつないだ愛も今は風
心まで光が包むルミナリエ
晴れ姿熱気が包む授賞式
秋日和くにの母連れ美人の湯
紅葉狩り月も一緒に家族風呂
刃こばれをおでんの湯気が包みこむ

直樹 明信 マサ 明子 よしお 正博 輝子 エミ たけし 武男 敬二 正一 正子 和子 光弘 芳野 淳司 三和子 英美 けい子 正美 登美子 靖博 裕興 富美子

老老の介護は愛に包まれて
嘘ひとつ包んで丸く住む夫婦
気配りの優しい嫁に支えられ
携帯に喜怒哀楽を握られる

西宮北口川柳会

黒田 能子報

雲悠々わたしも急ぐことはない
急いでも足が歩幅を決めている
急ぐけど足がもつれて歳もバレ
若返る薬はしいと急ぐ老い
急がずにじっと待ってる残り福
今日の愚は明日は踏むまい冬木立
遠い人を出させろ明けの星
老いはまだ昨日と違う明日の彩
しゃべらない分だけ飲んでよく食べる
どのようにまくしたてても無口に勝てぬ
一同を静める無口の咳ばらい
年寄りは無口聞き役それも良し
以心伝心無口のままで分り合う
言い合ってやがて無口になる夫
散る時の紅葉は無口すぎないか
添乗員が無口でよかったツアーパス
冬の夜の無口へお茶を入りに立つ
またしても揺き始めた総理の座
抑えればなお思慕ゆらぐ老いの恋
円高に金融ゆらく兜町
冬の海なまじ半端でなく揺れる

幸雄 和代 靖子 一慧 いわゑ 直 俊昭 一之 松煙 宏一 比ろ志 わこ 忠 キク子 キヨミ 江美 能子 りこ 晴美 求芽 哲子 正和 美代子 奮水 昭三

ガムを噛み煙の行く方追うみじめ
老いてなおゆらぐ心で待ち合わせ
花は花葉は葉できれいな花水木
誕生日生きている証ありがとう
時止まれ嫌でござんす老いるのは
庭の菊は後に回して菊を買う
コンビンにおでん顔出し冬が来る
涙した数だけ強くなる女
蛮勇も寄る年波には勝てません
来いと言うからストックホルム行くだけさ
秒針がくるくる回る暮れの街
この指とまれみんな止まらぬ年の暮

川柳クラブわたの花

西川 義明報

子供達指切り誓い仲直り
ワンクッション置いて円満解決に
誕生日母の時代はひっそりと
愛薄れ忍ばかりなり昨日今日
軽い芸出では消え去る一発屋
半額に釣られまたまた無駄を買う
年齢をとり空気のような愛となる
老体も楽しさあつて働ける
綴れ刺す夜長に歌を聞きながら
大波を被って夫婦腐れ縁
疑えはきかない愛を信じよう
鬼ごっこすくにつかまる淡い恋
お湯を入れチンした味で育てられ

茂 早加水 二英 順子 弘子 てる いたる 折杭 嘉代子 富喜子 鹿太 義子 莊司 美はる 克美 いつふみ 義明 宏 正春 欣子 妙子 俊子 晴美 浩三 孝子

湯加減も妻の手だった新婚時

山盛りの夕餉も昔ひとり膳

心理学共に学んだ友が近く

軽すぎる命の骨を拾う箸

ひと皮を剥けば本当にいいお方

ケイタイ依存親が悲鳴をあげてます

心こもる手紙何度も読み返す

愛というのは静かなものだねえお前

住み慣れて人も空気も心地よい

少子化のベツトは愛をひとりじめ

曲り角父の背中を目標に

紅葉の赤西溪は別世界

懐かしい心紐解く住所録

若人の誓いへ拍手惜しまない

君の目が蝶になつて恋してる

ハンカチの折り目正しいセールスマン

フルムーン月も一緒に湯に浮ぶ

川柳塔きやらぼく

大塚

恵子報

音たてて暮れゆく夕日追っかける

街路樹が信号の色赤黄色

一重どりされた国保が無事返る

想い出は宝だ夢だ会話する

秋夜ながラジオに夜加して貰う

飛行機がその上を飛ぶ曇り空

冬になると家族の絆丸くなる

ひと夏のドラマも終り風は秋

初冠雪わたしは雪が大嫌い

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじめ

たえ子

美代子

耀一

知佐子

民

君江

博子

愛子

ミツ子

宏至

幸枝

一風

恵子報

恵子

章江

寿々子

瑞枝

春枝

すみえ

晶子

紫泉

亜弥

木枯らし一号無口になった無人駅

留守電で孫の生れた声を聞く

秋の日が刻々落ちてはかどらぬ

三回忌兄も祖先の仲間入り

クラス会昔話にときめいて

秋の日を受けてルビーになる石榴

止め札に菩薩の耳がいやされる

乾燥機にたよっている洗濯だ

去った青春取り戻したいもう一度

イベントの度に違った顔で出る

ひらがなで暮す終章しなやかに

川柳ささやま

遠山

可住報

一瞬の迷い先手を取り逃がす

暗い世へせめて安らぎ彩の皿

世話やけるやつちやな財布忘れとる

くじ引きで天も味方の先手とる

不況風せめて元金とれるまで

コンクールせめて拍手が聞こえたら

孫達がせめて巣立つ日みきわめて

朝採りを早起きカラスに先越され

せめてもの温み入れとく熨斗袋

のん気者先手とられて動き出す

ありがたいお寺は高い山の上

百万とは言わぬヘンクリ五、六万

高知川柳社

小川てるみ報

絵手紙で秋を運んだ赤トンボ

やえ

天雀

ふみ

那珂子

清子

蘭

なみ

玲子

雪江

日枝子

千代

可住報

純子

美緒子

二英

美紗子

多美子

開子

かほる

幸子

富美

美智子

哲男

可住

朴訥な手紙にあった温かさ

運命を変えた手紙が一つある

メモ書きの手紙が温い共稼ぎ

絵手紙へ一句を添えた温かみ

この手紙届けてほしい千の風

ブラックで鎮めています糊の虫

いい出会いコーヒー甘く甘くする

コーヒーの香りに朝を起こされる

コーヒーを飲んでラジオは深夜便

産声待つ缶コーヒーが冷めてくる

コーヒーをサプリメントに生きている

コーヒーにアイデア貰い明日の夢

コーヒーでしんみり想う孤独感

紙一重命拾って深呼吸吸

もう過去は追いませんよと再生紙

赤紙は有無を言わさぬ紙だった

自然薯の気まま手こずる鉄の先

川柳塔唐津

仁部

四郎報

官舎にも女性のボスがおられます

まだしたい事が多くて惚けられぬ

諦めず道踏みしめる牛歩かな

この感謝今の自分は妻ありて

算数は2でも計算高い子だ

病院の廊下に四季の陽が巡る

縮緬の皺に見惚れる仕舞い風呂

てるみ

健

悦子

松風

和江

まさ子

幸子

憲一

暖

三郎

美々

京子

典雄

紀美子

千鳥

みどり

谷忠

四郎報

高明

輝夫

勝視

實

蜂朗

四郎

晴翠

川柳塔なら

坊農

柳弘報

百葉の長のおかげて生きている
 クラス会終生幹事惚けられぬ
 良寛のころで子供育ててる
 父の意をそむいて鬼になる立志
 良心はあるが時外してる
 わたしならもてない男好きになる
 良妻の振りばかりして五十年
 良心を落とした辺りまで戻る
 みそ汁の味に恥じないころざし
 セルリアンブルーが笑う秋の天
 青を抱き青に抱かれて逝くつもり
 あいまいを良しとしている小糠雨
 耕してこの地に芽吹く志
 飼育され妻に似てきた僕の顔
 良心はあつたり無かつたりしてる
 自民党が喜ぶような良い農家
 高すぎてポキンと折れた志
 刑務所は良い三食仕事付き
 良い天気旅の値打ちを倍にする
 青竹の正義一直線に天を突く
 憧れは山河の下で鉄を鋤く
 親子だな直球ばかり投げている
 志捨てた時から錆びていく
 経済を論じて居酒屋の閑志
 千年の森から漏れる青い息
 本気なら始発の駅で待つてます

博一 彰治 満作 成子 勝弘 萌子 弘風 六助 洋子 孝子 のりこ 恵美子 加央里 シマリ 義 真理子 順啓 太一 比呂志 恭昌 良一 完次 隆盛 理恵

無職です主婦です特売へならぶ
 青い実の主張にひそむ無限大
 人間を磨く青さが消えるまで
 家元に仕えて似てる咳ばらい
 未来図へ青い意見の可能性
 人間不信青を重ねる鬱の画布
 切り株に座れば父の志
 父のバトン掴むと熱く炎えていた
 ならぬ堪忍するが堪忍あしんど
 川柳らくだの会 岸本 宏章報
 働いて金なる木と縁がない
 政界の風刺漫画で知る世相
 ほのぼのと夢も満タンランドセル
 漫画から明日の元気が湧いてくる
 主人公わたしで兄が描く漫画
 働いた汗は誰にも称えられ
 ほのぼのと夢見心地の旅浴衣
 鼻メガネ漫画に夢中お爺さん
 洗濯物抱けばほのぼの陽の匂い
 エリートも電車で漫画読んでいる
 東大阪川柳同好会 森下 愛論報
 横綱の自負休場に追い込まれ
 うぬぼれの強い女が笑わない
 うぬぼれの尻尾を写す水鏡
 沈む陽の未練真つ赤に燃え上がる
 沈んでる友を励ます酒がある

美千子 富子 辰雄 弥生 朝子 國治 秋雄 一風 柳弘 大鯨 孝子 清帆 邦昭 仁子 宏章 富貴子 玲子 せつ子 紀子 秀夫 ダン吉 朝子 賢子 克己

船頭に惚れて乗ってる泥の船
 陽が沈み喧嘩の続き明日にする
 読み返す閃きのメモばかり
 ボケットに残したメモにある不覚
 仲間にも困まれたくない影がある
 仲間だと信じて弱音はいた朝
 叱り置く程度で許す仲間内
 見て見ない振りしてくれる仲間です
 こわいけど頼り甲斐ある父の声
 家紋背に越えねばならぬ父の壁
 反骨の拳が闇の壁を突く
 白壁に小便無用と書いてある
 壁厚く塗って息子の自閉症
 白壁に品よくピアノ鳴り響く
 わかあゆ川柳会 松本はるみ報
 春の音聞いたか虫が動き出す
 それっきりさつさと勝手に逝った人
 明日を待つ晴れたら好きな靴でゆく
 世の中の乱れ見ている千の星
 マンネリへ活入れられた棒グラフ
 座ぶとんもじつと耐えているこあいさつ
 童謡のカラスはどこへ行ったやら
 国境を越えたあの日は若かった(満国境)
 虫食いの葉っぱに安心する世界
 川柳塔みちのく 小寺 花峯報
 管理職取れた男の笑い皺
 和子 風子 八郎 高尚 穩夫 美子 シマリ 和代 三重子 敏子 美弥子 章久 雅文 愛論 伸子 かつ子 はるみ 好栄 聖子 ちよえ 惠美子 博利 清泉 吞舟

食

主婦業の奥の深さは言いません
墨絵一幅しずから深いものを抱く
風の木の葉を散らす深い意図
辞書開く拡大鏡とさがします
半世紀馴染んだ辞書は宝物
旅の風話す言葉は辞書にない
菊の香に辞書を繙く文化の日
サクサク開いた辞書の艶
余生なお辞書は友なりわが師なり
求めない悟りの窓が少し開く
無になつて時空を越えてゆく翼
なにげない笑顔に心洗われる
花かえて仏に留守を頼む旅
コーヒーはホット編物しています
ポケットに入る夢をもっている

サークル檸檬

吉田あずき報

笑子 栄恵 淑子 房子 半徳 現代 幸子 敬子 力 厚子 太虚 栄香 史子 千枝

とつておきの噂みんな知っていた
ローズ川柳会 山崎 哲夫
傘の杖老いの集いに陽が温い
ありがとう電話手紙で仲間入り
メモ書きににじむ人柄思いやり
下書きの方が良かった熨斗袋
サイフォンの音静かなり銀杏散る
波風が立たないほどの物忘れ
読めるけど書けない漢字年毎に
娘のために生活の知恵書き残す
女ですたまにはおしやれして集う
恋も祭りも見果てぬ夢よ浮き雲よ
万葉仮名さらさらさらと書けたなら
日記帳斜め斜めに走る文字

和歌山三幸川柳会

武本

哲夫 君子報 藍 哲子 トミエ 貴代子 美龍 いわゑ 年代 義子 君子

どのあたりまでがこの世か地平線
溜め込んだ金をこの世に置いて逝く
お灯明この世の話今少し
露の世を生きて悪夢がまだつづく
浮世とや背伸びしている熨斗袋
国赤字長生きしてもいいですか
この世へと残すセリフが見当らぬ
これらが分からないから生きたる
おいしものまだまだ食べられるこの世
ロスタイム溶かして秋の陽が沈む
男は人の骨を抜いてる赤い爪
駅長のタマが赤字の補填する
迷うたび神と握手をくり返す
握手するあの手の手に癖がある
握手だけで何も言えない青リング
誰よりも握手待ってる拉致家族
それぞれのお手わくあつてする握手
表情の固い握手でそれつきり
握手する指が温度差読んでいる
交差点だけか握手をしませんか

川柳大阪

長井

善純報

准一 芳女 朱夏 保州 瑛子 東吉 イセ 桂香 幹子 章子 町子 碧 絹子 起世子 幸 昇 キミエ 純子 和子 笑風 鉄心 信醉 花笑

日頃から手段選ばぬマイペース
言うことを一番効かす鼻ぐすり
済んでからより良い手段思いつく
介護する手段はやはり愛でしよう
無になって最後の手段決めている
風ばかり読んで手立てをよう決めず
採点を自由にあやつる奴がいる
逆転にもう一本と父の酒
孫娘抱いて爺の目点となる
交差点で氣勢をあげる山車の上
またおいで見送る母が点となり
沸点を上げて茶釜の自己主張
満点を上げた人が先に逝く
教育に汚点を付けた金とコネ
じわじわと秋の兆しが嬉しいね
じわじわと軍拡の波寄ってくる
じわじわと値上げ一品減る有
一言がじわじわ染みる友の声
じわじわと互を頼りにしています
忍び寄る老い振り払い生きています
じわじわと言いたい事を言うてはる
じわじわと陸地なくなる温暖化
じわじわと根雪の溶ける仲直り
じわじわと親のありがたさが染みる

南大阪川柳会

吉川 寿美報

紀雄 勝弘 まつお 若香 すがお 一風 喜楽 五月 青道 美花 珠生 柳弘 一步 章久 美世子 和司 かよこ 彦太 東吉 柳昌 笑歩 朝子 善純 尚士

悪友が去って寂しい年になり
明日がある男は過去を振り向かず
過去は過去今を大事に生きてます
道ならぬ恋のドラマに憧れる
逆風が止んで白紙の地図を買う
こだわりを捨てると広い道に出る
人生の道草でした堀の中
忠告を逆に恨んでいる瞳
子に残す道は奇麗に掃いて置く
道行きは心美人に手を添える
こんなもんかと変らぬ姿の山に聞く
姿などどうあれ命いとおしむ
グラビアのプロポーションと日向ぼこ
お披露目の双子バンダに癒される
艶やかな女形姿に溜息が
花が好きも大好き丸く生き
性質のまるさへ無理を押しつける
詐欺師には向いてるらしい丸い顔
苦勞したお蔭人間まるくなる
エキサイトすると本音がついポロリ
汗の章目分史はまだ終わらない
本物の僕を知ったら腰抜かす
琴線に触れて走り出すメロス
一番後ろ一番隅が性に合い
司馬遼の街道たどり癒してる
物言えは姿がうすくなる総理
生きてゆくあすへ心を整える

和雄 萬的 栄子 東吉 郁夫 集一 ばっは とし子 章久 克己 嘉住子 志華子 たもつ 柳伸 弘泰 直子 憲太郎 昌紀 太朗 楓楽 ダン吉 修 柳弘 ゆめ 勝弘 一步 あや子

エンタシスの影らみに見る古代の美
美しい容姿骨筋に顔がある 清 昭

尼崎浜川柳会

田原 宏一報

栄転を東くんだり嫉妬する
約束の下りのホームで逢いましよう
噂聞き手足伸ばして舞う落葉
黙つときお札にぎらす掌が温い
あの寿司屋氣も短いが手も早い
四季を舞う都をどりに魅せられる
ポロポロに負けぬ根性父母ゆずり
ぼろぼろになつても捨てぬ意地がある
のぼろより下る手摺の有難さ
ぼろぼろの辞書だが脳を支配する
菊人形今出陣の舞扇
魔屋に過疎の厳しき見せられる
ぼろは着ても誇れるものが一つある
若者の特権ポロがよく似合う
愚痴たつぷり聞かされてる下り段
ファツションに女は何時も鍛えられ
のぼつたらくだる道理を忘れてた
枯れ葉舞うベンチで襟を立てている
ぼろぼろの記憶つないで長話
野に下りやつと視界も広くなる
古稀傘寿下る坂にも起伏あり
ぼろぼろにされた氣持を悔しがり
土壇場になつてぼろぼろだと氣付く

宏一 孝子 よしひさ 里江 野薫 正治 亀与子 靖鬼 勝巳 イサミ 義芳 かずお 昭三 耕治 全彦 美義 哲男 朋月 求芽 五月 比ろ志 江美 紀乃

世は情けそんな言葉が懐しい
布引の滝をくだると港街
ほろほろの息子に父は命がけ
あらこの世また一年が過ぎました

翠洋会

安土 理恵報

孝一
奮水
よし子
美籠

熱くなることもないほど呆けている
しばらくは逢わずに待とう風邪の熱
熱さめてみればあなたも唯の人
熱心に誘った訳を後で知る

舞夢
日の出
集一

老いらくの恋と気付かぬまま微熱
おしゃべりが弾む仲間のティータイム

尚士

山の分校仲間はずれなどしない
いらちな奴とくさい奴いて仲間

志華子
千梢

飲み仲間麻雀仲間も高齢者
長続きしてる格差のない仲間

千歩
桃花

仲間からもう力と慰めと
シャンパンの音が弾けて盛り上がる

みつ子
茶々

ロゼワインがどう酒のことではないか
ポートワイン飲めば昭和の味がする

恭昌
すみ子

シャンソンがワインの味を深くする
同じくにも恰好をつける杖

楓楽
知之

「もう」か「まだ」コート着る日を迷ってる
年上に席譲られて途中下車

弘子
げんえい

しゃべらない方にわたくし嫁ぎません
気忙しい日でもやつぱり二十四時

蕉子
照子

麻生さん前総理よりもちますか
日本にもチェンジの波が寄せて来る

満作
浩二

川柳さんだ

北野

哲男報

人間を愛する心変らない
変れない男の姿冬木立

朋月
茂山

年変わり牛歩でばちばち行くつもり
信号が変わるゆつくり行きまじよか

キヨミ
美紗子

ねずみ歳変の一時で締めくくる
旅先でたらずんで見る絵の世界

雅司
一泉

賽銭は五円と決めて半世紀
ウインカー出す時は出す癖として

好文
二英

ひらめきは人の力も借りている
過去未来みなあたためる日向ぼこ

順子
千代子

結び目をゆるく孫へのプレゼント
家族みな丸くなる秋日和

章子
婦美子

寒いから今日は絶対鍋だろう
年男何かいいことありそう

忠
正和

三億円入れる金庫は買うてある
米子住吉川柳会

哲男

渡辺多美子報

多美子

キッチンがとても和やか料理好き
先生の死因はやはりガンらしい

日枝子
ふみ

探し物神隠しかと疑って
月一度食事するだけ友の会
白浜の梅樽の風呂波の音
もしかして僕が仕込んだ毒女
欲望を捨てれば老いがやってくる
豊作が続く賑わう村祭り

倉吉川柳会

竹信

照彦報

寒い日はキムチ漬する手が弾む
寒いからわたし太陽になります

きみ子
瑞子

おしどりが温かい寒いと肩寄せる
温暖化世界の財布もお寒い

賀寿恵
次男

銃口が凍った北滴の歩哨
返り花寒さの中をじつと耐え

重忠
貞子

寒い朝ゴミ当番をやり終える
日は落ちて晩酌時間やってくる

けいこ
泰輔

落ちて来た棚のぼたもち要注意
どぶ川に落つこちるまで飲むなかれ

由起子
完司

通帳の口座落しがドンと来る
お化粧を落し今夜も夢紡ぐ

玲坊
よしえ

長寿国もしも進めば溢れ出す
ふたありにもしもの時がやってくる

和枝
喜美子

生きている限りもしもは諦めぬ
僕大臣もしも選ばりや辞退する

萩江
日生子

この夢がもしも叶えば楽隠居
不穏な国へ修学旅行送り出す

睦子
京子

太陽が沈まなければ来ない朝

悠子

兼題のもしもはとてむずかしい

この一年残ったものは命だけ

歳の暮れねずみ小僧を待っている

歳末に民を惑わす給付金

師走の空に未曾有の風が渦を巻く

当たと困るのでジャンボくじ買わぬ

この落ち葉札なら嬉し暮れの風

歳末の商戦烈し声喧らし

歳末は昔は楽しいものだった

冬だけはぬるくて寒い仕舞い風呂

川柳塔打吹

野口

節子報

穏やかな川の流れのような日々

戦争に負けて流れてきた男

今年の恥水に流してお正月

頑固でも流れに乗って丸くなる

生け花は世界に一つ自分流

午後の二時こそこそ逢瀬蜜の味

こそこそ賢い人は逃げてゆく

こそこそ医者が内緒で家族呼ぶ

いざの時こそこそしないのが男

知らぬ間に梅酒のビンが空になる

退職後減らすつもりが賀状増え

新聞を広げて憎む同時テロ

そこから玩具広げて子の世界

母の愛広げる荷から溢れ出す

政局も漢字も読めず傷広げ

英子

秋草

石花菜

和子

龍枝

鬼一

風露

美津恵

恭子

照彦

孝恵

螢

公恵

たけ代

美美代

清

くにこ

美代子

美ツ千

照彦

京子

楨元

龍枝

玲坊

義人

手を広げ暴れる牛に仁王立ち

大漁を両手広げて自慢顔

仏壇の前に広げる旅みやげ

ドンドロケ鬼のでつかいくしゃみかな

好きな人のメールといつも鬼こっこ

鬼ばと二度と言うなと孫論す

老眼鏡はめて睨みのきかぬ鬼

成敗される鬼は下っぱばかりなり

赤鬼が元帥という酒のいんでいる

鬼だつて歩いて見たのルミナリエ

鬼見上げて故郷後にする

日本海から鬼の声鬼の息

赤鬼がひよこを食べる資本主義

七転びとうとう鬼の手にふれる

おれおれの背後赤鬼青い鬼

川柳塔すみよし

岩崎

公誠報

病床の父の様子を星に聞く

肉じゃがは家族を包む一つ星

星くずを枕に夢で行く宇宙

星は夢夜空にピカピカささやいて

あこがれの星をつかんで落着かず

星空は静かな時間くれました

遠い日のわたしをめぐる冬星座

星の数正月休みでふえている

流れ星こんな女に誰がした

手をとって夢のかけ橋七つ星

重忠

滋

完司

和枝

善江

紀美恵

富恵

克枝

玲子

きみ子

和子

芳光

石花菜

美知江

節子

公誠報

ケン坊

温子

蕉子

幸子

篤子

日の出

ばっは

チエコ

正太郎

末吉

星芽えて心の底を見すかされ

欲ばけの願いはきかぬ流れ星

願いごと言い終えぬ間に星流れ

一流のホテルの顔だ星の数

白星の数を重ねて大関に

図星つく友には口が重くなり

五ツ星値段はどではなかったな

流れ星愛は一直線にゆく

降るような星と地酒で母達者

もう一度星に願いをかけてみる

残業の疲れ勞う明けの星

見覚えのある星だけど名を忘れ

五ツ星あげよう妻の目玉焼き

母さんの手料理三ツ星五ツ星

星はどの数の中から貴方だけ

星古い女は夢を持ちつづけ

舌よりも星の数見て味を褒め

星条旗の中に日の丸埋め込まれ

金星を二つもあげて負け越した

引き裂かれ二人見ている同じ星

目から星飛び出る時価のにぎり寿司

六甲川柳会

伊勢田 毅報

鍵っ子を慰めている子犬の目

銀杏ひらひら神の調べを聞くような

公園のベンチ秘密を知っている

少子化にシーソーの歌聞こえない

ン子

五月

庸佑

太郎

明江

定子

芳香

かりん

桃花

ヒロ

美籠

シマ子

まつお

(矢)五月

萌

遠野

裕紀

昌博

克夢

舞夢

公誠

毅報

みつ子

いわえ

光久

和郎

ベンチには喜怒哀楽が染みている

公園に叱った孫を連れてゆく

公園の砂にかくした恋二つ

公園に集まってくる無垢な風

公園で心をいやす昼下がり

出店ある夜はいそいそ公園に

三日だけやってみたいわホームレス

老犬を抱いてブランコゆーらゆら

石橋を叩いて渡れと言われても

孫の手をしっかりと握り右左

身の安全守る上司に従わず

食品の産地確認おこたらず

さらさらと暮したいから好奇心

太陽を浴びてのんびり昼寝する

やったぜとひそかな自負と光る汗

さらさらと綺麗な指にある秘密

福の神するりと抜けた年の暮れ

人が好き心寄せ合い老いの坂

孫が来る嬉しさ打ち水二度三度

はいはいと聞いているうち家事が増え

百歳の母の笑顔がある平和

船べりの白い波頭に虹映える

来し方を思う間もなく年暮れる

一本の芯を通しておく誠

お茶漬が好きで友にはこと欠かぬ

和歌山三幸川柳会

武本

人間を見ると痒くなるお猿

千賀子

史郎

美恵子

孝子

基輔

順子

寛子

弘子

美穂

孝子

淳子

忠貞

能子

繁義

茂彦

武彦

毅

悦子

洋一

政一

礼甫

純江

春香

無限

楓楽

碧報

紀子

しとRの違いに耳がむず痒い

痒いのはあの頃ついた嘘の数

隔靴搔痒もう堪えきれぬ拉致家族

聞かぬ振りしてゐる鼓膜がむず痒い

振りすぎた尻尾だんだん痒くなる

蕁麻疹人間食つてから痒い

良妻と嬉しがらせて痒くなる

菌痒さを笑顔に代える母ころ

痒いところかき合っているよい夫婦

老いという未知の世界に辿り着く

八十八ヶ所浄土へ辿るリハーサル

薄情な細字を辿る虫めがね

童宮へ二度と辿れぬ玉手箱

源流を探し当てれば母の櫛

明日辿る道をきれいにして生きる

水のうまさに辿りつくころ日が暮れる

似合ういろやっぱり黒に辿りつく

子亀天晴母なる海に辿り着く

辿りつく果ては地獄が極楽か

追憶を辿つて冬にすべり込む

咲き誇るルーツ辿ればこぼれ種

議事堂が玉虫色になる妥協

変身の過去に触れたくないちようちよ

ブライドが人目を盗む虫眼鏡

鈍感な虫か足音気にしない

議事堂の柱にアリが住みついた

泣き虫に弱い夫ですぐ折れる

ゴキブリに聞き逃げされた痴話げんか

朱夏

美花

純子

町子

起世子

次根

かずみ

柳昌

桂香

仁子

光廣

美子

賀代子

和子

幸恵

理恵

俣子

昇

当代

幹子

イセ

准一

八重子

みね

東吉

章子

孝義

泣き虫が見違えるよな親分に

北国の景色は今日もモノトーン

秋の景色に深いタッチをして生きる

弁当に妻の景色がそのまんま

あの人が来ると明かるくなる景色

センチメンタルジャーニー秋という舞台

川柳ねやがわ

籠島 恵子報

つぶやくと心が熱くなるのです

後戻り出来ぬ車で極楽へ

病気見舞自分の達者知る

暮れるまで遊んだ頃の手毬唄

喪中ハガキが多い今年の寒い冬

原点に戻ると見えて来る出口

閻魔さんが次はこいつとつぶやいた

正論を吐いて男は散り急ぐ

孫達が昔へ戻すクリスマス

腹撫でて何かつぶやく主婦さん

派遣社員囑託居場所消えている

さらばワシントン瑞穂の国に戻ります

熱込めて意見を返す手話の指

退屈もあつて幸せ噛みしめる

子供等の声が弾ける良い町だ

山茶花のつぶやきを聞く雪うさぎ

色々の意見があると締め括る

年賀状今年も書けるありがと

美しい初日の出見て若返る

真つ直ぐな意見を吐いている背骨

瑛子

絹子

登美代

菜摘

碧

保州

集一

あさ子

一笑

とし子

弧一

郁夫

修

賢子

弘風

さち子

ルイ子

鈍甲

野鶴

一風

仁清

柳弘

銀杏

かすみ

日出子

朝子

お互いさまた言う日本のよい言葉
冷えきった街で財布がちじこまる
つむし風頬をなぶって逃げてゆく
厳しい世家族和みの輪に戻り
結婚の文字が行き来をするアラフォー
つぶやくようにささやくようにああしんど

堺川柳会

河内 月子報

短いが猛火を秘める妻のメモ
おやおやと笑いを殺す隆鼻術
プロポーズせぬまま降りた観覧車
正直な人はいつでも回り道
気短ですぐ手が出るが父が好き
至れり尽せりが駄目な男にしてしまい
よいしよしてもらつても舌回らない
オンボロのわたくしにまだ利用価値
女にも意地があります別れない
お別れに私の得意料理など
蟹食わせ熟女二人黙らせる
はなむけの言葉短く温かい
短めの言葉聞きとく看護する
妻だけは恥らうひとでいて欲しい
後悔が染みついていてる女の手
数日の看病で逝き喜ばれ
母ちゃんにばれてしまつて立回り
おだてにはどんどん回る独楽である
偉人聖人みんな女が産みました

西 恵
じゅんこ
博 泉
忠 央
麗 恵
公 誠
恵 勇
玄 也
唯 教
雅 明
天 笑
日の出
扶美代
さくら
月 子
鐘 造
俣 子
かりん
つづや
篤 子
八千代
としお
みつこ
(矢)五月

もう別れたの逢瀬に涙する
大掃除わたしも部屋もリフレッシュ
結婚は炊事の出来る人探す
左遷とも知らずに母は赤ご飯
喜寿の海女笑顔きらきら光つてる
女性には女の嘘がすぐ判る
友達には男がいいと言う女
回転の鈍い右脳をもて余す
悪女にも美女にもなれず熟女なり
よく吠える犬が苦手で遠回り
音痴でも割れる拍手でリズムのり
口の堅い女を一人知っている
褒めるところ褒めて短く叱つとく
美しいままで死にたいとは女
女だてらそんな言葉もありました
母さんに抱きしめられて拭く涙

いずも川柳会

佐藤

治代報

舞 夢
梓 乃
綾 乃
像 山
冬 虹
時 雄
千 代
のん子
萌 月
朋 彦
山 彦
愿 吾
健 吾
竜之介
世紀子
雅 子
桂 子
キミエ
孝 亮
美江子
主詩朗
健 柳
靖 乃
徳 子
幸 子

真剣な目に入れ替えてから座る
万に備えて買った本の山
引き当てた温泉旅行持て余す
どんどんと書いてどんどん消している
起き上がる手に一冊の本がある
ふる里がどんどん回る水ぐるま
ブレーキなど掛けてくれる女燃えている
引き際を考えている馬の足
青春の残滓を探す古本屋
いつの間に上座に座る年になり
早々と一線を引く旅の空
ブレーキが掛からぬ僕はボンコツ車
図書館を出る頃右脳走り出す
大根がひと雨ごとに太くなる
老婆のブレーキ利かぬ重い尻
アメリカのくしやみでどんどん株下がる
ポニョの引力一駒ずつを好きになる
隙ねらい冗句で固い座をほぐす
元氣らしい爪はどんなのびてゆく
袖を引く女に弱く引つかかる
引き際の顔を今から考える
足して引く師走の風はほろにがい
オホウフアニメにひとり笑っている
どんどん働きた後ゆつくりしていよう
座布団の裏を返すと女の座
読みかけの本があるから生きている

佳 子
絢 子
たえこ
敬 子
しげる
治 代
煩悩児
多 喜
寿 美
祐 次
美佐子
としき
昌 枝
歌 子
房 子
房 緒
喜 子
左 余
まこと
蘭 水
玲 子
茂 美
きみえ
文 子
章 峰
ちかし

岩美川柳会

石谷美恵子報

善人の真ん中において肩がこる
真ん中にいれば誰かが楯になる
潔きよく生きる男のど真ん中
ど真ん中にあぐらのかけるのは男
わたくしの臍が宇宙の真ん中だ
真ん中を歩いてうまい飯を食う
真ん中へいたい気持ち捨てきれぬ
真ん中に居れば以外と目立たない
真ん中の子が一番に自立する
先生を真ん中にしてハイチーズ
兄弟の真ん中いつも損ばかり
真ん中を真つすく歩く難しさ
中立で右も左も向いてない
真ん中を歩く風が強くなる
無理なことするのだからカタツムリ
馬鹿から出してギツクリ腰になる
町が好き無理な役でも買つてでる
滝下り無理して採った岩の松
無理をした笑顔に頬がひきつれる
元氣ねと言われて少し無理をする
三日後に無理が顔出す老いの日々
鼻ぐすり効かせて無理を通させる
麻雀にビリオド一番鶏が啼く
ビリオドにするか鏡に問うてみる
何もかも忘れて明日は羽化をする

忠良 清帆 螢 はるお 完司 一瑤 圭一郎 一京 公乃 公子 稔 幸子 かつみ かおる 一粒 睦男 孝男 重忠 節子 よしえ 菖子 雅女 蟹郎 幸安 茶子

ビリオドを打って未練がまだ残る
シャッターも冷たい雨に曝される
はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
閉店のセール最後の忙しさ
終電車虎も狐も年の暮れ
ふたりして予防接種の寡黙連れ
終りなき戦地球が哭いている
確信がないので語尾を濁しとく
終章のページに残るありがとう
ホスピスの庭に明る笑い声
リベートのわずかに転ぶ小役人
袖の下貰わんことに決めている
永田町そのリベートに影がある
リベートにまったく縁のない私
賽銭箱祈願成就のリベートに
一本のミカンの樹にも出来不出来
ころがつたみかんでなくむバス旅行
過疎の村旧家に映える夏みかん
みかん剥く指先妻の物思い
限界が来たに残せぬ徳儀
惜敗の悔しさ明日の糧とする
あつさりと頭下げられ權子抜け
敗れても次につなげと父が言う
負けるが勝ち雷さまに逆らわぬ
優しさに負けて人生狂い出す
童話ではいつも兎が負けている

たぬ 幸枝 章司 ヨシ枝 美喜 久仁子 泰子 悦子 いさお 一知 アヤ子 美代子 真一 一屯 一壺 恵子 敏 扶美代 猿杓 庸佑 光男 ちづる みつこ 喜久子 六点

負けるたび器がでかくなつてはる
富柳会 池 森子報
へそくりを移した場所がわからない
カルテには内緒の酒がよく効いた
昭和史に折り畳まれた青春譜
風の海より荒波に乗り移る
内緒事あつて世間は平穩に
自由ですか束縛ですかやっこ風
内緒事あつて人生花ざかり
ふる里の母に内緒の闘病記
間を置いた答えばかりで生き上手
ここのけと言えは話は千里駆け
気はゴール足は置いてく徒競走
駆け落ちが子連れで帰る村芝居
捨ててきた村で仮面を乾している
縁の下埋蔵金が眠ってる
燃ゆる火よ私は風を待っている
満月を遡う思いで見える二人
ふる里の村にロマンを伏せてある
鐘に問う強く生きてる目であるか
蟻になり蜂にもなつて村で生き
ほころびを模様に見せた母の腕
手毬唄聞こえた村を抜ける風
メルヘンが秋いつぱいにアキアカネ
風読んでよんで一句が秋晴れる
村祭り若い衆には光る汗

ダン吉 ひろし 鐘造 よりこ 壽峰 糺 高鷲 和子 あり 登子 未知 甘良 晴美 アキ 武人 奏子 寿之 澄子 恵 紅紫朗 よしみ 彦次 欣之 佳子 千恵子

村も秋子等を育てたまつり笛
愛なんてとなたも言わぬ長寿村
日糸三世日本に移り大ヒット
接続が悪そうやえぬ稲光り
降板のうしろ姿は秋の彩
私より上を翔んでる冬の蠅

川柳塔鹿野みか月

福西

茶子報

張り替えたラベルへやがて裁かれる
蒼天に自己主張なせぬ根っこ
張りぼての夫婦が越えた幾山河
美しき弓張り月になるさため
牛小屋も改築されて子供部屋
張りのある少し膨つくらよいお顔
歳月に里は疎遠になるばかり
不景気へ手揉みして待つ客はなし
牛糞の有機野菜が売り切れる
不信感募る職なし家もない
紅つけて張り切りすぎてけつまずく
ふるさとの時雨のなかに家が建つ
悲しみを募らせ鬼女に成ったのか
張り合いがあるから歌をうたつて
牛のようのにびりしてよ我が夫
緊張が続いて首が回らない
冷たいふとん海老になったり猫になったり
鷹の目が雀千羽を募りだす
大学も定員割れで再募集

鬼焼 信子 七朗 千華 深雪 森子 茶子 彩子 くに子 睦子 節子 和子 弘子 実満 きみ子 幸枝 小鹿 孔美子 久枝 和子 蟹郎 忠良 かつみ

乳牛のお力添えに感謝する
どっしりと牛歩で歩む母達者
感情のますます募る真情美
飲み会に堅い糸まで緩みだす
宴会へ地産牛肉よく売れる
若さにも勝ちたい気持ち募らせる
ありがとう田舎の母に似た雲よ
猛犬に注意と書いて張っておく
募る思いに仏壇を開けておく
募金だけ勝手に歩く赤い羽根
募金箱気持ちはそと入れておく
ふるさとに親はいないが風吸いに
一にも二にも辛抱強い人募る

汲香 みさ子 諷人 幸安 小生 かおる 富久江 重忠 永子 満 露子 惣子

第60回三原市神明祭協賛川柳大会

とき 2月8日

ところ 三原市民福祉会館

宿題と選者(2句、締切11時30分)

「喜ぶ」田中新一・「姿」森中恵美子
「学ぶ」赤井花城・「雪」中田たつお
「尊ぶ」定本広文・「岬」土田欣之
「結ぶ」高塚夏生・「音」小島蘭幸
会費 2000円(昼食、発表誌呈)
懇親会 3000円
連絡先 〒723-005三原市一町4丁目
2番33号 八島 白龍

西出楓葉さんの句集「天秤座」が再び脚光を浴びることになった新聞記事を紹介する。平成20年12月14日付朝日新聞大阪版より転載。

大阪力 励みの栄誉

長年の活動、取り組みが評価される受賞それは、歩んで来た道が、曲がりくねりながらも間違いではなかった、と実感する最良の瞬間として、人々を励ます。今年、府内で賞を受けた人々を紹介する。初回は川柳家、西出楓葉。福岡市で6月に開かれた全日本川柳協会の福岡大会前夜祭で、西出の句集「天秤座」が「第一回川柳文学賞」を受けた。

《濡れた手で句想メモする台所》

川柳を始めた79年から05年まで27年間に詠んだ500句弱を収めた初の句集。結社「川柳塔社」理事長で朝日新聞大阪版の「朝日な」にわ柳壇」の選者を務める。

川柳塔の前身となる「川柳雑誌」を創刊した麻生路郎(1888-1965)は川柳に「人間陶冶の詩である」という理念を掲げた。師の橘高薫風は、義母の影響で川柳を始めた主婦を、温かく厳しく指導してくれた。

賞を「路郎、薫風という師の教え、流れに沿ったもの」と受け止めた。生涯に一句でも「いのちある句」が残せるようにと願う。

句集の名は「10月中旬生まれの私の星座から」

柳界展望

川柳愛好会くろえ（代表・三宅保州）は会員の手づくりにて第百回句会記念川柳合同句集「くろえ」を発刊。和綴じ90頁。

○堺まつり協賛秋の誌上川柳大会の入選句は堺川柳会20年11月号句報で発表された。同人の天位。

▽柳界動向△

○「田辺聖子の人生あまから川柳」―田辺聖子著―集英社新書、新書判176頁、定価714円。

通帳に治まりましたジャ
ンボくじ 河内 天笑
隠し味ほどの秘密は許されよ 升成 好
宝です空気のようになっ
た人 矢倉 五月
まっさらなのち両手で
受けるババ 渡辺 富子
若さよしのちの音で水
をのむ 北野 哲男

○平成20年度愛媛県民総合文化祭が11月24日開催された。参加者255名、同人天位
慢心へたがが弛んでいた
まさか 宮尾みのり

▽計 報△

●濱野奇童（参与・岡山県）

12月28日逝去、81歳。葬儀は12月31日津山市に於て行われた。追悼文次号。

●木下平次郎氏（同人敏子さんの夫）は11月30日逝去76歳。

▽新誌友紹介△

西宮市 服部 榮

紹介者 西口いわゑ

尼崎市 松下比る志

紹介者 山口 光久

鳥取市 高浜 勇

紹介者 武田 帆雀

大阪狭山市 和住 明次

京都市 田部 和幸

紹介者右2名村上玄也

鳥取市 田中 一暉

紹介者 鈴木 公弘

河内長野市 木見谷孝代

河内長野市 竹田美美子

紹介者右2名板尾岳人

豊橋市 藤田 千休

常任理事会11月7日（水）出席20名①川柳塔誌創刊1000号記念行事について

②本社句会開催時間アンケート（案）の検討③常任理事の各地句会担当制について

の提案④大阪川柳大会会計報告⑤パソコン導入について

の報告⑥定例確認事項⑦各部報告事項、同人4名承認。次回2月9日（月）10時

新同人紹介

（前月承認分）松まつ

山 芳 生

（前月承認分）荻おき

野の 像 山

（前月承認分）天笑・月子・玄也・五月推薦

大久保 のん子

（前月承認分）天笑・みつ子・舞夢推薦

黒岩 靖 博

（前月承認分）直樹・正子・富美子・淳司推薦

笹倉 ひろし

―玄也・公誠・尚士推薦

仲川たけし先生を悼んで

松山市 宮 尾 みのり

全日本川柳協会初代会長のご逝去からも、日は静かに流れております。

葬儀の当日愛媛新聞の一面の地軸欄に掲載された一文を紹介させていただきます。

—平成20年10月30日付、愛媛新聞より—
「日の温みあるうち布団入れておく」の一句を詠んで一九九二年に政界を引退した仲川幸男さんが亡くなった。「たけし」の雅号を持つ川柳人としても知られ、全日本川柳協会の会長も務めた▲「政治歴生きた誇りと後悔と」。松山市議、県議を経て八〇年参院議員に。▲「永田町玉虫色の人の群れ」。二期十二年の参院議員活動を題材にした句集「国会の換気扇」シリーズ三巻は思わずニヤリの句が並ぶ。中曽根政権から竹下、宇野、海部政権へと次々に交代。牛肉・オレンジ自由化や消費税導入、リクルート事件など激動の日々だった▲「割引が弱者の旅へ慈雨となる」。教育や福祉、スポーツ分野でも幅広く活躍、知的障害者の交通運賃割引制度を実現させた。篤志面接委員として受刑者教育などにも力を注いだ▲「報恩の余力すこうし残しにく」。後継者の選考がスムーズに進むようにと任期満了の一年前に勇退を表明。潔かった。以後は地元への恩返しと川柳協会の社団法人化などに尽力した▲四年前の米寿の誕生日。地元伊予市内にできた句碑の除幕式で元気な姿を見せていた。訃報に驚いた人も多かったのではない。冥福を祈りたい。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岬川柳会	15日(日)午後1時半締切 蹟く・いたずら・平均	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 藤 井 寺	15日(日)午後2時締切 例えば・マンガ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時50分締切 慣れる・記憶・ひたすら 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さんだ	17日(火)午後1時から 綿・道具・冷える・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	28日(土)午後2時半締切 転ぶ・黒・箱	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
岸 和 田 川 柳 会	21日(土)午後1時半締切 下駄・焦がす・ささい シーズン	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市 川 柳 会	22日(日)午後2時締切 くどくど・青・書く・ギフト	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	22日(日)午後1時から ちよっと待て・スリム 年金	鳥取駅シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原 美雪 TEL.0857-53-1185
京 都 塔 の 会	23日(月)午後2時締切 つもり・追う・参考	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
南 大 阪 川 柳 会	23日(月)午後6時から 古い・ためらう・砂糖・雑詠	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	23日(月)午後7時半締切 豆・鳥・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前9時半から ホームレス・家・親類・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和 歌 山 三 川 柳 会	28日(土)午後1時から 狂う・くるくる・やっと	和歌山市勤労者総合センター 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	28日(土)午後7時締切 笑う・温泉・かけら・紐	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	5日(木)午後1時から 拗ねる・寒・一途	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
富 柳 会	7日(土)午後1時から 粒・手探り・自由吟	富田林市中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 川 柳 会	7日(土)午後1時締切 装う・正体・マンネリ・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	7日(土)午後2時締切 白紙・像・渡す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	8日(日)午後2時締切 余寒・着ぶくれ・がつがつ 雑詠	山本コミュニティセンター3F 学習室 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8日(日)午後1時開場 迷う・階段・ほやほや 動物を数える言葉	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時開場 梅・価値・ほんもの・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10日(火)午後2時締切 勘・貸す・3時・自由吟	尼崎市女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	10日(火)午後1時半締切 絵・逃げる・さすが	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
堺川柳会	13日(土)午後1時から すみません・早い目 「はとば(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	14日(土)午後1時から ドキドキ・音・内緒	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	14日(土)午後1時から 鍵・中味・重ねる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-1 牧野芳光
川 柳 塔 ま つ え	14日(土)午後2時締切 家計・中間・探す・すんなり	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川 柳 塔 みちのく	14日(土)午後5時締切 信仰・利口・ときどき	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締切 格差・カルテ・こっそり 自由吟	寝屋川市立総合センター4F (第1研修室) 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉

編集後記

まいりましたが、掲載させて戴いた次第です。

☆今月号特集は「風百句」

15年度から19年度同人吟中の風の句を部員一同で抽出、朱夏さんに百句に絞っていただきました。季節の風や心象風景の中の風、風百態をお楽しみください。

☆昨年11月に亡くなられた早川清生氏は川柳塔の前身である不朽洞の会員であり、楓楽理事長が一月号追悼文に書かれているように昭和30年代の『川柳雑誌』の頃のことをよく書いて下さった方です。

☆9月、鶴形句碑建立記念の大会に出席された清生さんは病気のため、ずいぶんやつれておられました。

が、朱夏さんの依頼に応じて目次下原稿を引き受けて下さいました。

その折2月号掲載と約束をしたので遺稿となつてし

まいりましたが、掲載させて戴いた次第です。

☆11月末、紅葉の美しい千里丘陵地にある清生氏宅を訪ね仏前にお参りした折、奥様からその原稿は病状悪化の中、時々横になりながら書き綴っておられたと聞きました。その後間もなく入院、帰らぬ人となつてしまわれました。あらためてご冥福をお祈り致します。

(希)

▽このところ夜の十二時になると、「サントワマミー」の曲が流れ出す。ボタンの押し間違いか、セツトされてしまったようだ。家族にこんな粋な事をしてくれる者はいない。メカオランチの私にも出来ない。ちよつとしたミス터리だ。

▽これがまた不思議な事にある方の招きで、シャンソンのコンサートに行った夜からである。コンサートの

ひとこと

「柳誌」編集で学んだこと

入社直後の試備期間中に「社内報」編集の使い走りの経験しかない私が、和歌山三幸川柳会柳誌の「七面」編集に携わって二年余が過ぎた。編集技術や決め事の「いろは」はさて置き、私なりに学んだことが多い。

①会員それぞれの句の中に、その人の形・思い・感性・ユーモア度・視野・想像力・力点などを私

なりに読めるようになったこと。

②句会記や大会記事を書くに当り、臨場感が魅了、私自身の句づくりの糧となること。

③他の柳誌の編集方針・主張・思想を読み取る努力ができること。

④先達の句集・冊子・名言に納得し編集の参考にできること。

⑤新聞・テレビを多角的に読み、分析、判断力を養えること。

会先輩諸氏の叱咤激励を受けながら研鑽の日々である。

(喜田 准一)

余韻もあつて、越路吹雪のCDを聞いたのは確かだが、入れっぱなしにしたCDが、流れる事になろうとは。

▽こうなると、十二時が楽しみになつてきた。が、この魔法偶然にかかったものいつかは解ける事になるであらう。

▽棚からボタ餅と言うが、せめて棚の上にボタ餅を乗せておかないと落ちてこない話を思い出した。(恵)

□校正をしいて立ち往生をする事は少なくありません。読み難い文字や、略語、カタカナ語、専門用語、それに方言等、手近な辞書や資料では解明されない場合などです。

□特に方言は編集部で使っている広辞苑、大辞林、明鏡国語辞典等でも分からず作者にお伺いをするより仕方の無い場合もあります。

□送り仮名の付け方も、悩

むところで、新聞社の「用語の手引」(73年の内閣告示「改定送り仮名の付け方」に準拠)等も参考にはしますが、先の辞書の何れかが良しとしていれば、編集として原句に手を入れることはありません。

□悩ましい事もあります。沢山の佳句に出会えるという最大の喜びがあります。多くの皆様の投稿をお待ちしております。(富)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(4月号)

地名

都道府県
市町村
姓雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「永遠」 (2月15日締切)

4月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

		B	A			B	A	
地名	市都 道府	姓雅号		切らないで下さい	地名	市都 道府	姓雅号	

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		
				年 年 月 月 から から 一年 半年 9 5 8 0 0 0 0 円 円 — 該当の方に○をつけて下さい

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980-4-298479



作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (2句)
一路集 (3句)
初歩教室 「楽しい」 (3句)

河内天笑選
小島蘭幸選
新家完司選
高瀬霜石共選
木本朱夏選
松本文子選
両川無限選
田中みね選
鈴木公弘担当

5月号
檸檬抄 「緑」
一路集 「楽器」「雲」「リボン」
初歩教室 「セールス」

本社2月句会

とき 2月9日(月) 午後1時開場・2時締切り
開催時間、締切り時間に注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「蕨風作品、固有名詞の句を読む」
兼題 「襟・衿」
席題 「」
会費 1000円
投句料 500円 (切手可)

真相 冬眠 開む 「なんだか」 角野 徳山 山口 西出
河内 鴨谷 水野 角野 徳山 山口 西出
内天笑選 瑞美子選 黒兎清選 仁清選 みつこ選 楓楽選

本社3月句会
9日(月) 午後1時から
兼題 「隣」「パール」「手ぶら」「明日」「気合」

第27年度 夜市川柳募集

第9回 「目」天根夢草選
ハガキに3句 2月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室
電話(〇六)七九一三四九〇番
振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

発行所 川柳塔社

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アート

発行人 河内 權治

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇九年(平成二十一年)二月一日発行

発行人 河内 權治

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アート

発行所 川柳塔社

電話(〇六)七九一三四九〇番

振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 090 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)